

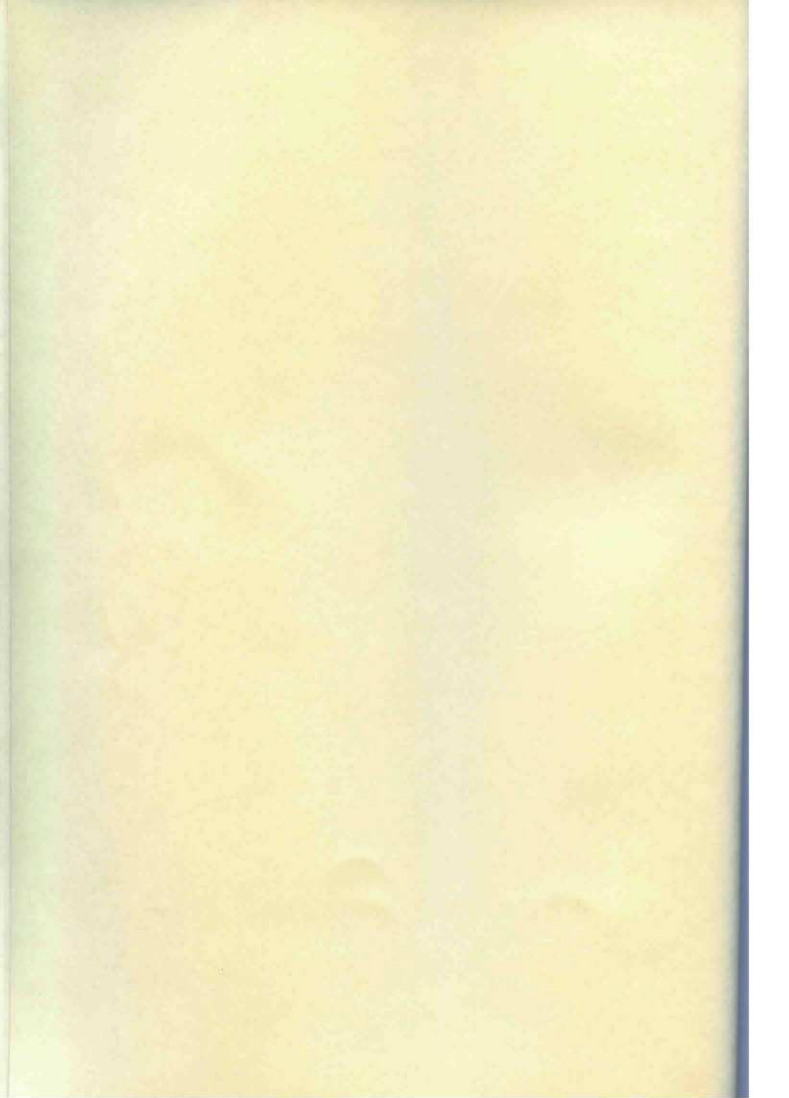
長野原町埋蔵文化財調査報告 第12集

小林家屋敷跡

—長野原町立中央小学校屋内体育館・プール建設に伴う発掘調査報告書—

2005

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



こ ばやし け や しき あと
小林家屋敷跡

—長野原町立中央小学校屋内体育館・プール建設に伴う発掘調査報告書—

2005

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

AMERICAN SOCIETY OF PLANT PHYSIOLOGISTS

Volume 100, Number 1, February 1987

Published by the American Society of Plant Physiologists
11 Dupont Circle, N.W., Washington, D.C. 20036



調査区全景



出土陶器



金銅飾り金具



黒漆地板状木製品部材

序

現在、長野原町はハツ場（やんば）ダム建設という大事業に全町を挙げて取り組んでおります。その中で、貴重な文化遺産を後世に正しく伝えるべく調査し、保存・活用を行えるよう考えております。

近年、姉群馬県埋蔵文化財調査事業団による吾妻川沿岸の発掘調査では、天明三年の浅間山噴火で発生した火山泥流に埋もれた数多くの遺跡が発見され、大きな成果を挙げています。

当時の長野原町坪井村には、大戸の加部安左衛門、大笹の黒岩長左衛門と並び吾妻の三分限者の一人であった小林助右衛門が現在の町立中央小学校の敷地内で酒造業を営んでおりました。天明三年の泥流はこの小林助右衛門の屋敷や酒蔵をも埋没させ、吾妻川に面する地域は甚大な被害を受けました。この被災状況については江戸時代中期の医師で『解体新書』の訳述でも著名な杉田玄白の手記『後見草』に詳細な記述がされています。

今回の調査は、町立中央小学校の屋内体育館・プール建設に伴う調査で、その際に偶然にもこの小林助右衛門の屋敷の一部を検出することができました。屋敷の背後を巡っていた石垣、土蔵跡1棟、礎石建物跡2棟が検出されました。そこからは当時の陶磁器、木製品、鉄製品、石製品が出土しています。本書はこれらの調査成果を収録したものであります。

末筆になりますがこの調査を実施するにあたり、関係各位に対し厚く御礼申し上げますとともに、本書が広く活用され文化財の保護に役立つことを願ひ序文といたします。

平成17年3月

長野原町教育委員会

教育長 金子有巻

... (faint text) ...
 ... (faint text) ...
 ... (faint text) ...
 ... (faint text) ...

... (faint text) ...
 ... (faint text) ...
 ... (faint text) ...
 ... (faint text) ...

... (faint text) ...
 ... (faint text) ...
 ... (faint text) ...
 ... (faint text) ...



Figure 1: Bar chart showing data points.



Figure 2: Vertical bar chart showing a single data point.

例 言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字長野原字坪井に所在する小林家屋敷跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は町立中央小学校屋内体育館・プール建設工事に伴う事前調査として、長野原町役場の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は、長野原町役場の全額負担による。
4. 調査は発掘調査を平成14年4月1日から4月24日迄、整理調査及び報告書作成を平成14年4月29日から平成17年3月31日迄の期間実施した。
5. 本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。
6. 本書は富田孝彦が編集した。執筆は第V章以外は富田が行った。ただし、第三章に関しては、坂寄富士夫氏（長野原町文化財調査委員長）、小林 清氏（同委員）から多くの資料を提供していただいた。
7. 調査において以下の項目の一部を委託した。

テフラ・トイレ遺構分析：(株)古環境研究所 測量：(株)測研

木製品・炭化材樹種同定分析 金属製品分析：(株)パレオ・ラボ

8. 本書における石製品の石質鑑定は飯島静男氏（群馬地質研究会）に依頼した。また陶磁器類において大西雅広氏（(株)群馬県埋蔵文化財調査事務所）、木製品において追川吉生氏（東京大学助手）の御教示を得た。
9. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。

（五十音順敬称略）

阿久津 聡・麻生敏隆・飯島静男・飯島義雄・飯田陽一・飯森康宏・池田政志・石川雅俊
石坂 茂・石田 真・石守 晃・市村勝美・岩田芳明・追川吉生・大江正行・大西雅広
小野和之・小川卓也・唐澤定市・黒岩幸恵・黒岩文夫・久保 学・小林 清・古屋祥子
斉藤和之・佐々木由香・佐藤明人・坂寄富士夫・嶋村 明・清水 豊・陣内康光・杉山秀宏
杉原敏之・関 邦一・関 俊明・高橋政充・田中 雄・津金沢吉茂・堤 隆・中澤章文
檜崎修一郎・野口 淳・野口茂男・巾 隆之・原 信行・福田貫之・藤根 久・藤巻幸男
松田 哲・松島榮治・松原孝志・水田 稔・村田敬一・山口逸弘・渡辺弘幸
長野原町立中央小学校・群馬県教育委員会・(株)群馬県埋蔵文化財調査事業団

10. 調査組織は次のとおりである。（左：平成14年度、右：平成15・16年度）

教育長	金子宥巻	教育長	金子宥巻
課長	浅見俊雄	課長	山口伸行
補佐	林 敏則・樋口 正	補佐	樋口 正・白石光男
係長	白石光男・浅井一弘	係長	中村 剛（平成16年度～）
調査担当者	富田孝彦	調査担当者	富田孝彦
調査参加者	唐澤美恵子・櫻井佳世子・嶋村和作・竹淵珠美・萩原 仁・山口正太郎		

凡 例

1. 本書で使用した地図は1:2,500「長野原町都市計画図」(長野原町2001)、1:10,000「長野原町都市計画図」(長野原町1994)、1:25,000地形図「長野原」・「大前」(国土地理院1997)、1:200,000地勢図「長野」(国土地理院1986)である。

2. 挿図の方位は磁北を示す。

3. 挿図の縮尺については下記の通りであり、各挿図中に示してある。

遺 構 石垣・土葺跡・礎石建物跡……………1/60

囲炉裏・固定臼設置土坑……………1/30

遺 物 復原陶磁器……………1/4

土陶磁器片……………1/2

木製品・金属製品……………1/1・1/2・1/4

石製品……………1/6

4. 遺構の略号については以下の通りである。

5. 挿図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における遺物の法量は遺物ごとに明記している。計測数値は推定値を含み()内の数値は現存値、< >内の数値は復原推定値を表す。

6. 遺構・遺物実測図中のスクリントーン・記号は下記の通りである。その他は図中に示した。

遺構



地山



焼土・炭化材



山砂・粘土



軽石



泥流堆積物

遺物



黒漆



銅板・銅鋳



織維質

陶磁器 ●

木製品 ■

金属製品 ▲

石製品 □

※木製品実測図中の点線は銅板の剝離推定範囲を示す。

目 次

巻頭図版

序

例 言

凡 例

第I章 序 説

- 1 調査に至る経緯…………… 1
- 2 調査の方法と経過…………… 1

第II章 遺跡の立地と環境

- 1 遺跡の位置…………… 6
- 2 周辺の遺跡…………… 7
- 3 既往の調査…………… 8
- 4 基本層序…………… 12

第III章 文献からみた小林助右衛門

- 1 出自・系図…………… 14
- 2 生 業…………… 14
- 3 業 績…………… 15
- 4 屋敷景観…………… 19
- 5 被災状況…………… 20
- 6 被災後…………… 23
- 7 関係文書・文献…………… 25

第IV章 検出された遺構と遺物

- 1 遺 構…………… 28
- 2 遺 物…………… 31

第V章 自然科学分析

- 1 小林家屋敷跡の土層とテフラ…………… 37
- 2 トイレ遺構分析…………… 39
- 3 小林家屋敷跡出土木製品・炭化材の樹種同定…………… 43
- 4 金属遺物の分析…………… 51

〈要 約〉…………… 56

〈遺物観察表〉…………… 59

挿図目次

- | | |
|-------------------------------------|-------------------------------------|
| 第1図 調査遺跡位置図 (S = 1/200,000) | 第15図 出土木製品材組織の光学顕微鏡写真4 |
| 第2図 調査地点位置図 (S = 1/5,000) | 第16図 出土炭化材材組織の走査顕微鏡写真1 |
| 第3図 「坪井村絵図」部分 | 第17図 出土炭化材材組織の走査顕微鏡写真2 |
| 第4図 周辺の近世遺跡分布図 (S = 1/50,000) | 第18図 元素マッピングおよびポイント分析を行った試料 |
| 第5図 基本土層図 (S = 1/20) | 第19図 試料No.7の透過像と元素マッピング測定結果 |
| 第6図 小林家系図 | 第20図 試料No.8の透過像と元素マッピングおよびポイント分析結果 |
| 第7図 小林助右衛門関係石造文化財分布図 (S = 1/10,000) | 第21図 試料No.16のポイント分析結果 |
| 第8図 第3トレンチ石垣設置状況図 (S = 1/50) | 第22図 遺物表面のポイント分析結果1 |
| 第9図 石臼計測位置図 | 第23図 遺物表面のポイント分析結果2 |
| 第10図 調査区西壁の土層柱状図 (S = 1/20) | 第24図 試料No.28の透過像と元素マッピングおよびポイント分析結果 |
| 第11図 溝状遺構の土層柱状図 (S = 1/20) | 第25図 No.30の赤外線吸収スペクトル図 |
| 第12図 小林家屋敷跡の花粉・胞子 | |
| 第13図 出土木製品材組織の光学顕微鏡写真1 | |
| 第14図 出土木製品材組織の光学顕微鏡写真2 | |

挿表目次

- | | |
|---------------------|------------------------------|
| 第1表 周辺の近世遺跡 | 第5表 屈折率測定結果 |
| 第2表 小林助右衛門関係石造文化財一覧 | 第6表 小林家屋敷跡における花粉・寄生虫卵分析結果 |
| 第3表 小林助右衛門関係文書一覧 | 第7表 小林家屋敷跡出土木製品・炭化材の樹種同定結果一覧 |
| 第4表 小林助右衛門関係文献一覧 | 第8表 出土遺物の蛍光X線分析による化学組織 |

図版目次

- | | |
|------------------------|---|
| 図版1 遺構全体図 | 図版14 木製品実測図3 |
| 図版2 遺物分布図1 (陶磁器・金属製品) | 図版15 木製品実測図4・金属製品実測図1 (銅製品) |
| 図版3 遺物分布図2 (木製品) | 図版16 金属製品実測図2 (鉄製品) |
| 図版4 遺物分布図3 (石製品・浅間A軽石) | 図版17 金属製品実測図3 (鉄製品) |
| 図版5 石垣実測図 (平面・立面図) | 図版18 石製品実測図1 (挽白) |
| 図版6 土蔵跡実測図 | 図版19 石製品実測図2 (挽白) |
| 図版7 1号礎石建物跡実測図1 | 図版20 石製品実測図3 (搦白) |
| 図版8 1号礎石建物跡実測図2 | 図版21 石製品実測図4 (固定白) |
| 図版9 2号礎石建物跡実測図1 | 図版22 石製品実測図5 (固定白) |
| 図版10 2号礎石建物跡実測図2 | 図版23 石製品実測図6・その他 (縄文土器) |
| 図版11 陶磁器実測図 | (写真図版) |
| 図版12 木製品実測図1 | 図版24 石垣、土蔵跡、1・2号礎石建物跡、遺物出土状況(飾り金具・木製品・陶器) |
| 図版13 木製品実測図2 | |

図版25 遺物出土状況(陶器・銅製品・漆碗)、金銅飾り金具接写など

図版26 調査区全景、石垣

図版27 土蔵跡

図版28 1号礎石建物跡、遺物出土状況(銅製品・木製品)

図版29 2号礎石建物跡、遺物出土状況(部材)、土蔵基礎復原

図版30 土蔵基礎復原、測量、サンプリング、作業風景

図版31 陶磁器、木製品

図版32 木製品

図版33 金属製品(銅製品・鉄製品)

図版34 石製品(撓白)

図版35 石製品(撓白・固定白)

図版36 石製品(固定白・基礎石)、縄文土器

第 I 章 調査概要

1. 調査に至る経緯

長野原教育委員会では毎年10月に次年度以降の公共事業の照会を役場関係各課に行っている。平成13年11月下旬に教育委員会学校教育課から社会教育課に埋蔵文化財の有無の照会があった。長野原町立中央小学校の体育館およびプールが老朽化し、プールと体育館が一体となった屋内体育館・プールの建設が予定されていた。当該地は明治期に町の重要文化財に指定されている瓦塔・板碑が出土しており、また同小学校敷地内には天明3（1783）年の浅間山大噴火に伴う泥流に押し流されたとされる小林助右衛門の屋敷・酒蔵があったという記録が残っていることも考慮して造成工事着手以前に試掘調査を実施する必要があるとの回答をした。その後、計画地の現状と対応策を検討した結果、試掘調査を実施する旨で合意した。平成14年3月5日に試掘調査の依頼文書が学校教育課から提出され、学校関係の調整・重機搬入に伴う協議を経て、同年3月18日に教育委員会文化財担当立ち会いで実施された。調査対象面積は1,200㎡であったが砂場や下水道の関係で制限された。

試掘調査は対象地に幅1.2m程のトレンチを合計4本設定し行った。その結果は、①1トレ～3トレで石垣が検出された。石垣は高さが1.4m程で壁面は垂直に立ち上がり、裏込めを有している状況が確認された。②石垣の壁面には地山である関東ローム層のブロックが打ち付けられたかのように付着し、石垣上面および下面に浅間A軽石が部分的ではあるが確認されたことから、検出された石垣は天明3年当時のものと判断される。③また石垣以南には表土下に所謂浅間石を包含する砂礫層（泥流）が1.1m、その直下に浅間A軽石が3～4cm厚で確認され、上下石臼、板状の銅を鋸留めした加工木材などが軽石層直下で出土した。④出土した遺物は近世陶磁器にほぼ限定される、の4点に要約でき、上記石積以南の記録保存を前提とした発掘調査が必要であることが確定した。

3月19日には試掘調査結果を原因者に回答し、発掘調査費用の策定・調査区内が小学校の敷地であることから調査期間と学校行事との調整を経て、平成14年4月1日から本調査を開始する運びとなった。

2. 調査の方法と経過

(1) 発掘調査

a. 表土除去

表土除去は重機を使用して行った。試掘調査で、石積が東西に延びていること、石積以南は泥流堆積物、浅間A軽石があることが判明していたので、そのことを念頭に表土から遺構確認面まで少しずつ掘り下げていった。遺物が散見される面までを重機でそれ以下は人力で除去した。また、重機のバケットの爪に鉄板を溶接して遺構を傷つけないように配慮した。

b. 遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行った。石垣は天端石を、その他の遺構は泥流堆積物直下の浅間A軽石を念頭に泥流中の礫と礎石の識別に努め、平面形を確定していった。

c. 基準杭の設定

調査区全体を網羅するように国家座標IV系に準拠した1×1mの基準杭(グリッド)を設定し、測量作業の基準とした。また、調査区内に標高値を落とし込んだ任意の杭を設定し、土層堆積状況断面図や遺物出土状況図作成の際の基準とした。

d. 遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した上で土層観察用のベルトを設定し、遺構内の覆土の除去に着手した。本調査は泥流堆積物に埋没しているため、全体の土層は調査区南壁・西壁で確認し、各々の遺構に関しては適宜ベルトを設定して、土層の観察を行った。

遺物の取り上げについては、単独で泥流堆積物中のもはその遺構一括、個体もしくは遺物の集中している箇所に関しては出土位置図(ドット図)を作成の上、取り上げ作業を行った。遺物出土位置図は1/10のスケールで作成し、標高値の記録を一点ずつ行った。

e. 実測図の作成及び遺構の写真撮影

実測図は土層堆積状況図、遺物出土位置図及び完掘状況遺構平面図を作成した。土層堆積状況図は遺構が小規模であったので遺物出土位置図と同様に1/10のスケールで作成した。完掘状況遺構平面図は光波測距儀を用いて行った。完掘遺構の変化点を三次元記録し、その場でパーソナル・コンピューターにより現地での詳細な観察の上で結線し作成した。また、土層堆積状況図及び遺物出土状況(位置)図のポイントの位置も完掘状況遺構平面図作成時に記録した。測定したデータは公共座標値に変換後、加工・編集を行いCD-Rに保管した。

遺構の記録写真は土層断面、遺物出土状況、完掘状況の順で撮影を行った。カメラは一眼レフを用い、モノクロとカラースライドの2種類のフィルムを使用した。フィルムサイズは35mmである。またデジタルカメラもそれらと併用した。

(2) 自然科学分析

遺跡の性格や内容をより具現化するために発掘調査の成果に基づき自然科学的手法を用いて以下の4項目を実施した。

a. 土層とテフラ

小林家屋敷跡は浅間山火山1783(天明3)年の噴火に伴って発生した天明泥流堆積物により埋没しており、泥流発生前に降った浅間A軽石層は部分的ではあるが3~16cm厚で確認されている。また泥流堆積物層中にも黄褐色軽石が混入している。今回は土蔵跡の調査区西壁セクション及び2号礎石建物跡の固定白設置土坑セクション(調査区南壁)で試料を採取し、試料に含まれるテフラと指準テフラとの同定を実施した。

b. トイレ遺構分析

2号礎石建物跡には2連の固定白を設置した土坑が検出されているが、検出当初は性格も不明であったため、溝の可能性も含めて、覆土に含まれる寄生虫卵・花粉の分析を実施した。後から考えれば検出位置が屋敷の北東隅(鬼門)にあたり、トイレ状遺構の可能性はなかったのであるが、結果的には周辺環境の復原には重要な分析なので敢えて掲載することにした。

c. 木製品・炭化材の樹種同定

小林家屋敷跡からは多くの木製品片・建築部材片が出土している。それらの大半は製品名が特定され

るものが少なかったり、酸化により土質化しているものが多いが、本地域における江戸時代の樹種利用を明らかにすることは、今後増えるであろう本地域での調査事例や都市部との比較材料になるので有意義な情報蓄積と考えて実施した。

d. 金属遺物の分析

木製品片のほとんどが銅板を鋳留めしていたり、その痕跡があるものであった。またそれらに混じて金銅飾り金具や鋳頭を鍍金したもの、木質部が腐朽して膜だけ遺存した漆器などが出土している。これらの木製品表面に付着した赤色物の成分や金属製品自体に付着している成分を分析することを目的として元素マッピング測定を実施した。

(3) 調査経過

a. 発掘調査

発掘調査は平成14年4月1日から4月24日にわたって行われた。

3月29日 調査範囲確認、機材の搬入を行う。

4月1日 重機による表土除去。これと併行して表土除去部を順次ジョレンがけ、遺構確認作業を行う。石垣・土蔵基礎などを検出し、石垣の精査がほぼ完了する。

4月2日 調査区壁・土蔵基礎周辺の精査。調査区西壁付近で鉄釘が多数出土。試掘調査のトレンチ埋土の除去。嬉恋郷土資料館長松島栄治氏が来跡。

4月3日 土蔵基礎周辺・礎石建物跡精査。礎石建物跡では建築部材痕が検出されるが、腐朽・土質化により判別困難。石垣壁面に付着した木材片の写真撮影、取り上げ。石垣平面図・立面図作成開始。出土遺物の写真撮影。

4月4日 土蔵基礎検出状況写真、実測。礎石建物跡は引き続き掘り下げ。礎石建物跡の東側に2連の固定臼を検出。溝（土坑）が付帯しており、礎石建物であるが性格不明。調査区内には全部で建物3棟と判明。事業団関係者6名、群馬町清水氏来跡。

4月5日 1号礎石建物跡は引き続き掘り下げ。礎石ほぼ全部検出。礎石建物跡の建築部材痕、炭化材、遺物を精査。漆器出土。囲炉裏検出。2号礎石建物跡の固定臼を半載。事業団麻生氏来跡。

4月8日 1号礎石建物跡の建築部材痕・炭化材・遺物出土状況写真・実測、囲炉裏半載。2号礎石建物跡の固定臼掘り下げ。事業団関係者7名、黒岩文夫園長来跡。

4月9日 土蔵跡・1号礎石建物跡周辺の遺物取り上げ、炭化材・建築部材痕のサンプリング。土蔵の構築面でビットを検出、ビットより縄文土器片（関山式）出土。2号礎石建物跡の固定臼半載状況写真。事業団関係者2名来跡。

4月10日 土蔵構築面のビット実測、西壁セクション図。1号礎石建物跡の構築面を検出、南壁沿いにサブトレ設定、礎石間ビット精査、囲炉裏半載写真・実測。2号礎石建物跡の固定臼エレベーション図。石垣北西隅に土坑検出。事業団麻生氏、黒岩園長、幼稚園先生来跡。

4月11日 土蔵ビット実測。1号礎石建物跡の構築面ほぼ検出。2号礎石建物跡の固定臼写真撮影、エレベーション図。石垣北西隅の土坑から木材に混入して丸釘出土。攪乱扱いとする。事業団藤巻氏、黒岩園長、中央小先生、小林清氏来跡。

- 4月12日 雨天のため午後から。全体測量、各遺構のエレベーション図、土層注記。1号礎石建物跡 囲炉裏内埋土（炭化材含む）サンプリング。
- 4月15日 全体清掃。調査区全景撮影。石垣に平行して検出された溝（雨落溝）を掘り下げ。テフラ・寄生虫卵・花粉のためサンプリング。榑古環境研究所早田氏外1名、事業団関氏、黒岩園長、野口茂男氏来跡。
- 4月17日 全体清掃。調査区近景撮影。調査区南壁沿いにサブトレ設定、掘り下げ。第一小6年生社会科見学。事業団松原氏、新治村原氏来跡。
- 4月18日 サブトレ掘り下げ途中。2号礎石建物跡東側出土木材サンプリング。中央小PTA、事業団杉山氏外1名来跡。
- 4月19日 サブトレ完了。縄文時代包含層は検出されず。
- 4月22日 全体測量補足。調整会議で24日に埋め戻し決定。
- 4月23日 土蔵基礎復原。実測。石材サンプル。埋め戻し準備。撤収。
- 4月24日 埋め戻し。

b. 整理調査・報告書作成

引き続き4月29日から整理調査・報告書作成を行うこととなった。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで8箱、現場で作成した図面類は34枚程度であった。その他の立会・試掘調査や社会教育課の事業の合間を見て担当と作業員2名で作業を進めていくことになった。

遺物洗浄・注記作業は4月29日～5月31日までの約1ヶ月を費やした。これと併行して遺構図面の修正、遺構写真の整理を行った。

遺物の接合作業及び石膏による復原作業は6月3日～8月30日までの約3ヶ月間を費やし、報告書に掲載する陶磁器・金属製品をほぼ確定したが、一旦整理作業は中断した。

また11月3・4日に開催された町の文化祭で「小林家屋敷跡発掘調査速報展」と題して、調査概要や、出土遺物の展示を行った。

平成15年12月1日～平成16年3月31日までは事業の合間をみて陶磁器の実測・拓本・トレースを行った。これと併せて遺構図のトレースを行った。石質鑑定を飯島静男氏に依頼して行った。

平成16年4月から事業の合間をみて金属製品の実測・トレースを行った。また5月に出土木製品・炭化材の樹種同定および金属遺物の分析を委託して行い、報告書に掲載する木製品を確定した。

12月1日から12月27日までの約1ヶ月を費やし、木製品の実測・拓本・トレースを行い、併せて版下作成を開始した。版下は平成17年2月28日まで約2ヶ月を費やし作成した。

遺物写真は1月中旬～下旬に完了した。

編集作業は2月下旬までに仮割付を行い、執筆作業は2月～3月上旬にかけて行った。また3月上旬に追川吉生氏（東京大学助手）に依頼して、出土木製品を中心に近世の遺物を実見していただいた。併せて保管用に資料・遺物の整理をして3月31日、全ての作業を完結した。



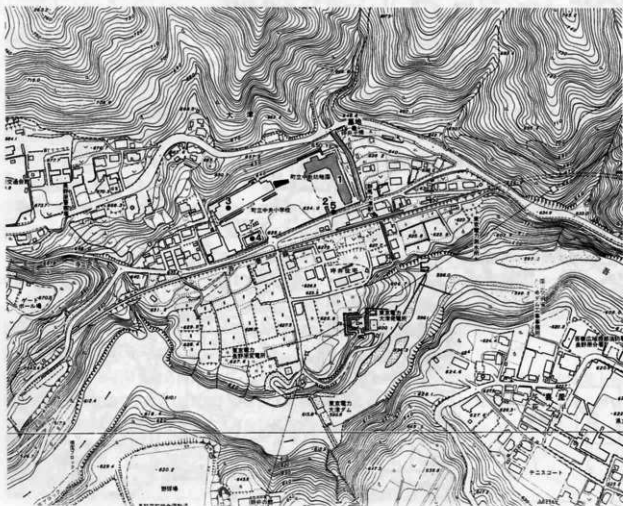
第1図 調査遺跡位置図 (S = 1/200,000)

第II章 遺跡の立地と環境

1. 遺跡の位置

小林家屋敷跡が所在する長野原町は群馬県の北西部、吾妻郡の南西隅に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と上毛かるたに読まれている鶴の尾部下端にあたる。長野原町は北部と南部に大別され、北部は高間山（標高1,341m）・本白根山（標高2,171m）の両山系からなり吾妻川流域沿いに東西に延び、南部は浅間山（標高2,568m）の裾野に広がる浅間高原地帯を経て長野県に接している。本遺跡は北部の吾妻川流域地帯に属し、吾妻川左岸の河岸段丘上に立地する。現在の町立中央小学校の敷地内がほぼ合致する。

本遺跡の立地する段丘は吾妻川から下位・中位・上位・最上位の4段からなる河岸段丘の中段段丘に相当し、吾妻川からの比高差は約40mを測る。この段丘は約21,000年前に噴出した応桑泥流堆積物を削って形成されている。その上に重なっている関東ローム層中には約11,000年前に噴出したと考えられる浅間草津黄色軽石層（As-YPk）が1.2m以上堆積している。下位・中段段丘面は天明3（1783）年の浅間山の大量噴火に伴って発生した火砕流（泥流）により壊滅的に被害を受けており、調査地点は浅間山の北東にあたり標高は約635mである。



第2図 調査地点位置図（S = 1/5,000）



第3図 『坪井村絵図』部分 明治6年 群馬県立文書館所蔵

2. 周辺の遺跡

長野原町における遺跡分布状況は昭和48年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から3ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した⁽¹⁾。また平成6年度からハツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施しており、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成14年3月と平成16年4月に遺跡地図の改訂を実施した⁽²⁾。平成16年度4月現在で214の包蔵地(指定史跡等を含む)が把握されている。

本遺跡の位置する吾妻川流域地帯の西部地区はダム関連事業と直結している東部地区と比べて、試験

確認調査の数は少ないものの、町教育委員会が主体として本発掘調査を実施した事例のほとんどが当該地区によるものである。本遺跡を含む吾妻流域地帯には縄文時代～近世に至る多くの遺跡が分布しているが、ここでは近世遺構を検出している遺跡に絞って概観していきたい（第2図・第1表）。

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4～2.1万年前に黒斑山崩壊を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応桑泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間板鼻黄色軽石（As-YP）降下をもたらした。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間D軽石（As-D）、4世紀の浅間C軽石（As-C）、天仁元（1108）年の浅間B軽石（As-B）、天明3（1783）年の浅間A軽石（As-A）という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古年代の指標にもなっている。その中でも天明3（1783）年の噴火は軽石降下後に襲った泥流（鎌原火砕流）により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらした。有史以来の記録的火山災害として知られている。この泥流によって埋没した嬭恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺観音堂の石段」、「十日ノ窟」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが⁹⁾、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグランド造成中に日待供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡(2)の痕跡が確認された¹⁰⁾。平成16年には個人専用住宅建設に伴って泥流直下の畑を検出し、鶴木I遺跡(3)の範囲拡張とした¹¹⁾。畑には2箇所の円形平坦面が確認され、陶磁器片も出土している。

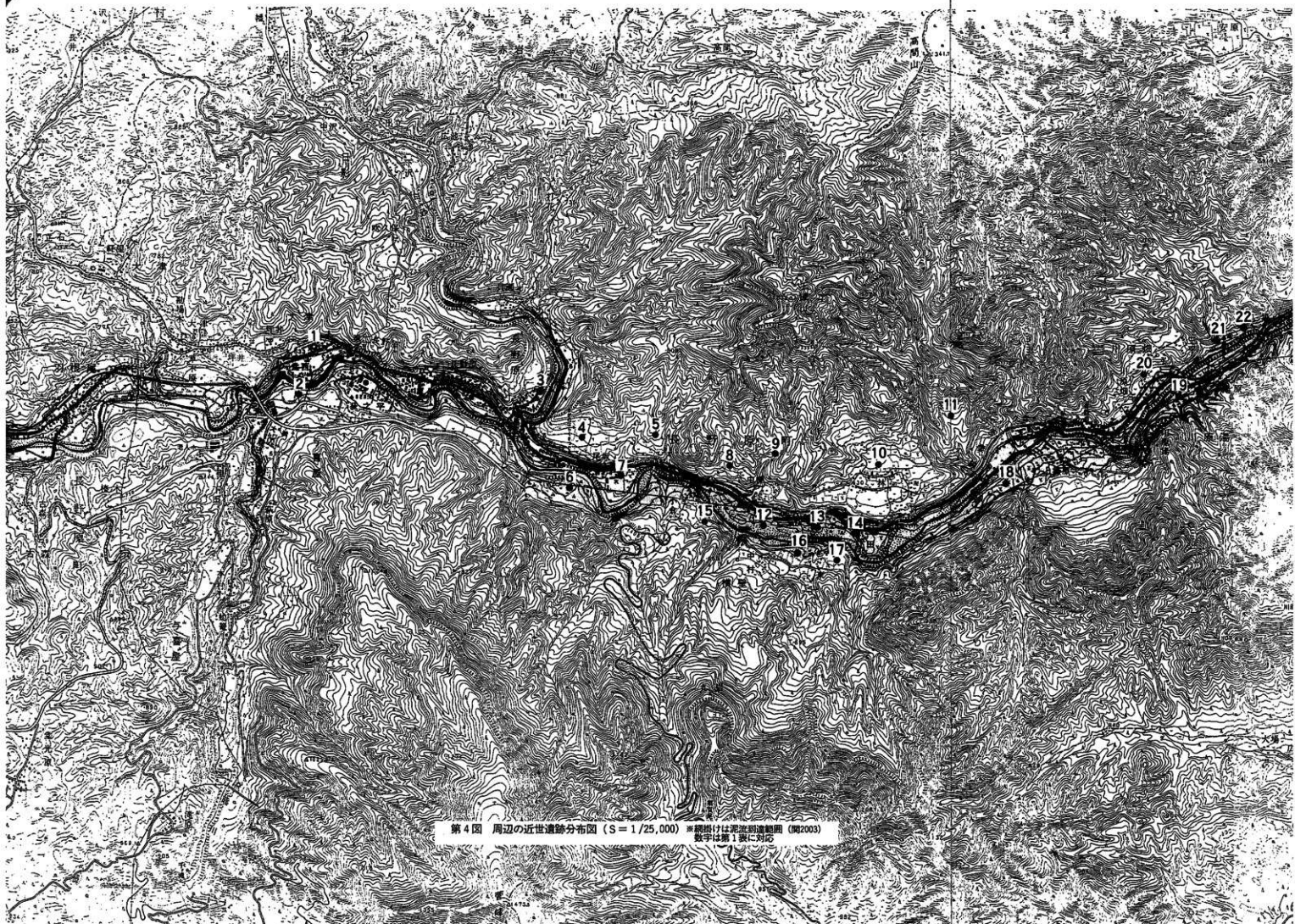
近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、尾坂遺跡(6)、久々戸遺跡(7)、中棚II遺跡(12)、下原遺跡(13)、下田遺跡(14)、横壁中村遺跡(16)、横壁勝沼遺跡(17)、川原湯勝沼遺跡(18)、西ノ上遺跡(19)、東宮遺跡(20)となり、現在も継続調査中である。これらの遺跡では主として畑跡・ヤツクラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まった畑景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている¹²⁾。さらに平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・薬缶・鉄釜・石臼の他、「青面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅的状况であった一端を垣間見る発見があった¹³⁾。

推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。長野原一本松遺跡(4)、幸神遺跡(5)、二反沢遺跡(9)、上原IV遺跡(10)が該当する。このうち上原IV遺跡では溝（旧河川流路）を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

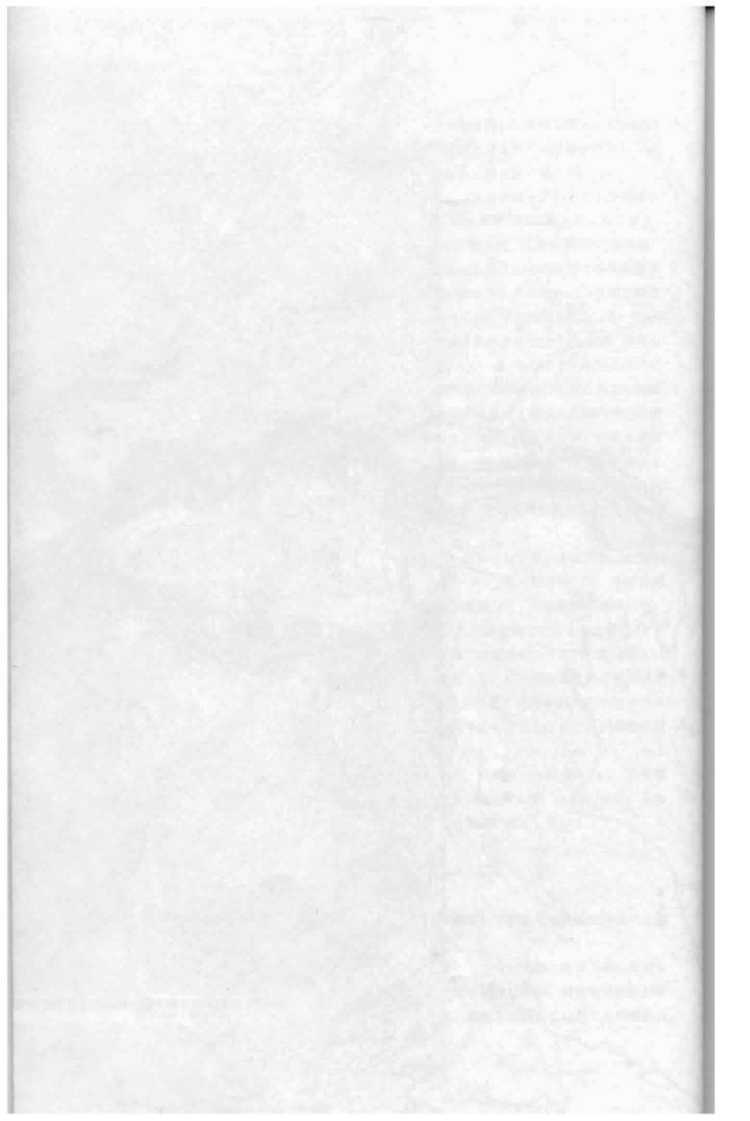
3. 既往の調査

今回の調査は小林家屋敷跡の第1次調査にあたる。本遺跡は包蔵地として把握する以前と以後に1度ずつ調査が実施されている（第2図）。

包蔵地として把握する以前の調査は平成12年度に隣接する長野原町立中央幼稚園の建設工事に先立って実施された（第2図1）¹⁴⁾。基礎工事中に立ち会い、土層の堆積状況を確認したが、対象地は砂混じりの礫層が基盤となっており、かつて対象地東側に存在する御堂入沢の沢筋を形成していたことが窺われ



第4図 周辺の近世遺跡分布図 (S=1/25,000) ※総冊数は泥流河道範囲 (岡2003)
数字は第1表に対応



第1表 周辺の近世遺跡

No.	遺跡名	町No.	種別	時代	概 要	備 考
1	小林家屋敷跡	211	埋没村落	純文・近世	平成13年度試掘・14年度調査、試掘(町) 縄文：前期・晩期土器片、近世：石垣・土蔵・掘立柱建物、陶磁器、木製品、金銀製品、石臼などを検出。	文献1, 5, 6, 13
2	日新井村跡	143	埋没村落	近世	昭和55年自衛隊によるグラウンド造成中に埋没跡の検出され、日持供養塔、石臼、農具などが出土。	文献1, 2, 3, 16
3	鶴木1遺跡	72	その他	中近世	平成16年度調査(町) 中世：内耳土器片、陶器片、近世：畑、円形平坦面、陶磁器を検出。	文献2
4	長野第一本松遺跡	63	集落跡、散布地	縄文・弥生・古墳 平安・中世・近世	平成6～15年度調査(事) 縄文中期～後半：住居跡、土坑、柱穴列、列石、配石、埋没ピット、包含層、掘立柱建物、埋没土器、集石、配石遺構、弥生：土器片、土坑、古墳：土器片、平安：住居跡、竈穴、掘立柱建物、配石、列石遺構、土坑、ピット、伊勢、焼土跡、中近世：土坑、溝、ピット、竈穴状遺構、櫛列、やっくら、掘立柱礎、炭化木材、焼土、赤白、土器片、筒型銅製品を検出。	文献1, 2, 14～23 旧一本松遺跡
5	幸神遺跡	62	集落跡、その他	縄文・平安・近世	平成8・9年度調査(事) 縄文早期後半：土器片縄文中期～後半：土坑、住居跡、埋没石、石臼、埋没谷、包含層、平安：畑、近世：溝、倒木を検出。	文献2, 16, 17
6	尾坂遺跡	201	その他	近世	平成6・7年度試掘(県)、11年度調査(事) 江戸：畑、土蔵を持つ構造物、溝、円形平坦面、石垣を検出。	11.19
7	久々戸遺跡	200	散布地、その他	縄文・近世	平成6・7年度試掘(県)、7・9～12・14・15年度調査(町) 江戸：畑、掘立柱建物、道、やっくら、円形平坦面、天明式土器、浅間A群石を検出。	文献9, 10, 13, 15, 17～20, 22, 23
8	鶴木且遺跡	51	集落跡、散布地	縄文・平安・中世 近世	平成11年度試掘(事)、12・13年度調査(事)、平成12年度試掘(町) 縄文早期前半～中期：住居跡、石臼、打製石器、スタンピング石器、土坑、ピット、溝、土器片、平安：住居跡、羽釜、高台付竈、灰燼陶器、黒書土器、刀子、土坑、ピット、中世：掘立柱建物の柱穴、土坑、土坑墓、近世：排水遺構、ピット、溝を検出。	文献2, 4, 10, 11, 20, 21
9	二反沢遺跡	52	社寺、その他	中世・近世	平成11年度試掘(県)、12年度調査(事) 中世：石垣、段造成跡、区画、土坑、ピット、近世：畑、溝を検出。	文献2, 17 旧大栗院堂跡
10	上原Ⅳ遺跡	44	散布地	縄文・江戸	平成15年度調査(事) 縄文後期～晩期：住居跡、掘立柱建物、土坑、竈穴状遺構、ピット、列石、配石遺構、焼土遺構、土器片、石臼、大石、江戸：溝、下駄、動物の骨、農具、石鉢、陶磁器を検出。	文献2, 6, 23 市村春二氏蔵
11	立馬1遺跡	37	集落、墓 その他	縄文・弥生・平安 中世・近世	平成13年度試掘(事)、13・14年度調査(事) 縄文早期～後半：竈穴、竈穴住居跡(早期燃焼土器を伴う)、前期住居跡、縄文包含層(押型土器、黍飯土器を伴う)、漆器式土器を出土。弥生：住居跡、土器片、土器墓、平安：竈穴住居跡、土坑、鉄製釣鐘車、竈穴、中近世：掘立柱建物、土坑、溝を検出。	文献1, 2, 21, 22
12	中瀬田遺跡	203	その他	近世	平成11・12年度試掘(県)、11～13・15年度調査(事) 江戸：畑、溝、円形平坦面、溝状遺構(道)、石積み、やっくら、陶磁器片を検出。	文献2, 13, 16, 19～21, 23
13	下原遺跡	204	集落跡、その他	縄文・平安中近世	平成12年度試掘(県)、12・13・15年度調査(事) 平安：住居跡、竈、江戸：畑、水田、住居を検出。	文献2, 11, 13, 20, 21, 23
14	下田遺跡	47	集落、その他	縄文・近世	平成6・7・9年度試掘(事) 縄文：土坑、竈穴、江戸：段状遺構、住居跡、畑を検出。	文献2, 11, 17 「新遺跡地図」No.3126、 旧下原(下田)遺跡
15	西久保1遺跡	31	集落跡、散布地、その他	縄文・弥生・平安 中世・近世	平成6～9年度試掘(事)、10～12年度調査(事) 縄文前期～中期末：住居跡、水場遺構、水場土坑、削片陶器場、土坑、弥生・平安・中近世：礎石建物、土坑、溝、ピット、江戸：浅間A群石を検出。	文献2, 11, 18～20
16	横俣中村遺跡	24	集落跡、墓その他 その他	縄文・弥生・平安 中世・近世	平成8～15年度調査(事) 縄文前期～晩期終末：住居跡、土坑、集石、配石、列石、掘立柱建物、竈穴状柱列、埋没、包含層、ピット、西道、埋没土器遺構、銅製釣鐘車、立石を伴う配石遺構、弥生：土坑(両耳墓)、平安：住居、石積み、中世：竈、中近世：掘立柱建物、石垣、墓、焼土、礎石建物、土坑、土坑墓、方形区画、畑、近世：掘立柱建物、石垣、墓、礎石建物、石、墓、礎土、礎石建物、土坑、土坑墓、方形区画、畑、近世：掘立柱建物、石垣、墓、礎石建物、石。	文献2, 13, 16～23 旧上野田遺跡
17	横俣野呂遺跡	23	散布地、集落跡、墓その他	縄文・弥生・平安 中世・近世	平成6・7年度調査(事) 縄文：竈穴、弥生：土器片、平安：住居跡、近世：土坑墓、土坑、集石跡、溝、チャート片を検出。	文献1, 2, 11 「新遺跡地図」No.3118、 旧野呂遺跡(東平遺跡)
18	川原瀬野呂遺跡	206	散布地、その他	縄文・平安・近世	平成7・9年度調査(町)、9・15年度調査(事) 縄文前期・後期：縄文土器片、平安：住居跡、掘立柱建物、焼土、江戸：畑、やっくら、道、溝、平坦面(埋没置き場)を検出。	文献11, 17, 23
19	西ノ上遺跡	212	その他	近世	平成14年度試掘(県)、14年度調査(事) 江戸：畑、円形平坦面、道を検出。	文献22
20	東京遺跡	208	その他	近世	平成7・9年度試掘(町)、12年度試掘(町) 江戸：畑、陶磁器、敷石、浅間A群石を出土。	文献4, 11, 17
21	二社平遺跡	209	散布地	縄文・平安・近世	平成6・8・10年度試掘(事) 縄文：土器片、石器、平安：土師器、鉄鏝、江戸：浅間A群石を出土。	文献11, 18
22	石垣遺跡	210	散布地、その他	縄文・弥生・近世	平成8・9年度試掘(事)、10年度調査(事) 縄文前期～中期：土器、石器、埋没谷、土坑、弥生後期：土坑、江戸：畑を検出。	文献2, 11, 17

た。

第2次調査は平成14年度に浄化槽埋設工事に先立って実施された(第2図2)¹⁰⁾。その結果、顕著な遺構は検出されなかったが、堆積土層は現表土から1.5mまでは盛土、その下には泥流堆積物が1.8m厚、さらにその直下で浅間A軽石が地表下3.3mで3cm厚で確認された。地盤は関東ローム層は見られず、礫混じりの泥炭層で湧水が確認された。遺物は軽石直下で陶磁器片2点の他、泥流中で縄文晩期土器片が検出されている。

この他に工事中の発見が3地点ある。まず明治43年に旧中央小学校校舎建築のため整地中に板碑が発見された(第2図3)。板碑は高さ84cm、幅30cmで上部が欠損しているが阿弥陀三尊をあらわす梵字、及び「延文二年五月二日」の文字は明瞭である。延文2年は北朝年号で1357年にあたる。次に昭和9年に小学校の講堂増築のための整地中に瓦塔が発見された(第2図4)¹¹⁾。講堂の増築は旧プールがあった場所である。瓦塔は屋蓋上層部の完形に近い1点と軸部の小片1点からなり、奈良・平安時代の所産と考えられる。上記の板碑と瓦塔は共に長野原町の重要文化財に指定され、中央小学校に保管されている。さらに平成16年度には下水道工事により泥流堆積物中より馬の大腿骨が発見されている(第2図5)¹¹⁾。

4. 基本層序

本遺跡の基本層序は調査区南西コーナーで確認した(第5図)。試掘調査での所見と併せると以下ようになる。

第1層 整地土・攪乱

現表土で、小学校の校庭となっている。繰り返し整地されており、その下には旧木造校舎の解体によると考えられる攪乱層が所々見られる。

第2層 暗褐色砂質土

いわゆる泥流堆積層で、締まりは強い。河原石・浅間石を多量に含んでいる。

第3層 軽石層

いわゆる浅間A軽石で、部分的ではあるが3cm厚程度の純層で確認されているが多い箇所では16cm厚を測る。

第4層 暗黄褐色土

地山の盛土で強く叩き締められている。建物の構築面で、上面に泥流の鉄分沈着が顕著で角礫を含んでいる。

第5層 黒色土

建物構築前(整地前)の表土層と考えられる。混入物は見られない。

第6層 暗褐色土

江戸以前の自然堆積層。混入物はほとんど見られず、粘性・締まり共に強い。

第7層 明褐色土

いわゆる漸移層である。



第5図 基本土層序
(S = 1/20)

- 註
1. 長野県教育委員会 1990 『長野県町の遺跡一町内遺跡詳細分布調査一』
 2. 主に下位・中位段丘で発見された天明距離に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「群馬県文化財情報システム」Web版 (<http://www2.wagamachi-guide.com/gunma/index.html>) で参照願いたい。本書では第1表および本章でできるだけ最新情報を記載した。
 3. 雄志村教育委員会 1981 『鎌原遺跡発掘調査概報 浅間山噴火による埋没村落の研究』
1994 『埋没村落 鎌原遺跡発掘調査概報 (よみがえる延命寺)』
 4. 長野県教育委員会 1989 『長野県町の文化財』
群馬県立歴史博物館 1995 『第52回特別展 天明の浅間焼け』
 5. 未報告。
 6. 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003 『久々戸遺跡・中棚遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』
 7. その他数地点で出土しているため『町内遺跡V』で報告する予定である。
 8. 長野県教育委員会 2003 『町内遺跡II』
 9. 長野県教育委員会 2003 『町内遺跡III』
 10. 石村喜美 1962 『上野・長野原出土の瓦塔』『歴史考古7』歴史考古学研究会
 11. 註5と同じ。

参考文献 (第1表の文献番号に対応)

1. 長野県町 1976 『長野県町誌』上巻
2. 長野県教育委員会 1990 『長野県町の遺跡一町内遺跡詳細分布調査一』
3. 長野県教育委員会 1989 『長野県町の文化財』
4. 長野県教育委員会 2002 『町内遺跡I』
5. 長野県教育委員会 2003 『町内遺跡II』
6. 長野県教育委員会 2004 『町内遺跡III』
7. 長野県教育委員会 2004 『町内遺跡IV』
8. 群馬県立歴史博物館 1995 『第52回特別展 天明の浅間焼け』
9. 上毛新聞社 1999 『群馬県遺跡大辞典』
10. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998 『長野原久々戸遺跡』
11. 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002 『ハッ場ダム発掘調査集成1』
12. 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002 『長野原一本松遺跡』
13. 群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003 『久々戸遺跡・中棚遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡』
14. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995 『年報14』
15. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996 『年報15』
16. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997 『年報16』
17. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998 『年報17』
18. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 『年報18』
19. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 『年報19』
20. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001 『年報20』
21. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 『年報21』
22. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 『年報22』
23. 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004 『年報23』

第Ⅲ章 文献から見た小林助右衛門

1 出自・家系

小林家系図を第6図に示す^①。小林助右衛門の先祖は宇多天皇に発し、敦実親王の流れをくみ、足利尊氏や武田晴信に仕えたと言われているが確証があるわけではない^②。調査地点の北東側、国道下にある現在的小林家墓地の墓石によれば、小林又右衛門政久(1661年没)から始まっており、徳川時代の初期、信州から坪井に移りすんだと言われている。すべてが助右衛門を襲名しているわけではなく、助兵衛政房^③(1702年没)の後、助右衛門清房(1719年没)、助右衛門正喜(1766年没)、助右衛門正永(1804年没)と3代襲名し、堅治郎正延(1794年没)を挟んで助右衛門正晟(1807年没)、助右衛門行政(1828年没)と2代襲名している。その後の後継者はおやす(天保中没)という女性(娘)が一人残り、「何んの為す所も知らず浪費徒食に過し困窮の果、剃髪比丘尼(尼僧)となりほどこしを乞うて生活をなせしが現在(*昭和37年)小林徳重氏水車小屋(昔も酒造米精米の為の水車小屋だったとの事ですが)で餓死」(第4表10)して助右衛門の正系は断たれたという事である。ちなみに文中にある水車小屋は現存しない。以上のことから天明3年の被災時の助右衛門は3代目正永であり、今回調査で検出した屋敷の一部も正永のものということになる。



第6図 小林家系図

2 生 業

信州から坪井に移り住んだ又右衛門政久の時代には農業と酒造業、助右衛門正永の時代になると土地の分限者と言われ酒造業・金融業(金銭だけでなく土地も貸していたらしい)を生業としていたようである。代々家業である酒造の繁栄に努め、正永の時代かどうかは定かではないが大津用水を立石で遅沢川より分水し、引水したと言われている。正永の繁栄を比喻する話として、「立石より自分の屋敷(現在の中央小学校)に至る間他人の地所を借りる事なく個人で関係の地所全部を買い上げて施工した」や「此所で酒造する為の米は遠く高崎方面から運ばれ、当時本街道であった現在の須賀尾峠は米運搬の荷駄が連日数十頭往来し一駄の米を二、三回運搬した如く見せかけて納入する不心得者が相当あっても判らなかつた程だった」などと伝えられている(ともに第4表10)。また江戸横山町(現在の東京都中央区日本

橋横山町) から今井をせを後妻として、被災後は、江戸に真綿店を構えて金融業も営み、諸大名に貸し出しを行っていたが、その後坪井に戻り、晩年は質屋を営んでいたようである⁴⁾。

3 業績

小林助右衛門の業績に関しては、現存する石造文化財から読み取れるものと根拠はないが伝え聞くものに大きく分けることができる。まず前者から見ていくことにする。助右衛門関係石造文化財を集成した(第7図/第2表)。

1) 雲桂山間王殿修造の沿革と地藏薩埵

小林家は代々信仰に厚く、父祖の冥福を祈るために「雲桂山間王殿」を修造していた。このことは正永が建てた記念碑(第7図/第2表3)に詳記されている。その銘文は以下の通りである。

(表) 雲桂山間王殿旧記所蔵の由来は遼かなり、蓋し旧殿は道傍に在り、乃ち馬蹄通ずる所車塵飛ぶ所、人多く、其の淨域を汚すを恐る。是において天和中、小林政房郷人と戮力今の地に移すと云う。今茲に明和四丁亥曾孫小林正永之を更に造営せり。但し境内狭小を恨む。故に山腰を穿ち以て廣大にせんと欲す。而して大石小石累々として蟠屈地中に軋り功成り難し。則ち大衆の石工、役夫を募り冗費二千余人之精力日に弥り漸く成る。然るに後工倭規矩を執り雕朱繩墨を当て、心力を窮し知巧を尽くして殿亦以て成る。初めて石階二十余級を上り、行くこと数歩、又石階十余級を上る。而して殿の構うる所、北は連山に倚り、南は大洞に對し、西は溪流清冷にして以て纓を濯ぐべきなり。殿基大ならずして精巧美觀を極めたり。中央に無量寿仏を安措して十王魏々堂々として、其の左右を按ずるに夫れ正永之意欲するに非ざれども、これを以て人の耳目を驚かしめ、又これを以て為すに非ざれども遊觀の地なり。心偏えに父祖の冥福を祈るあるのみ。友人牧閑散人、山興虎莫逆小林氏において既に二十余年にして、今秋偶々此に逍遙し、則ち正永建碑之志あり、強いて予に其の事を記さしむ。予不文不許を謝し、終書のを以て序す。銘に曰く

雲桂山畔紺樹鬱蒼	化城湧出永為靈場
日輝画棟霞映影梁	天楽長響雨花常香
鳥嶂祥瑞人仰毫光	鬼神擁護万世誰昌
明和四年丁亥冬十月	小林助右衛門正永建為

(原文 漢文)

(裏)

前 録

天和三年癸亥	小林助兵衛政房修造
正徳七年癸巳四月	小林助右衛門清房修造
宝暦七年丁丑七月	小林助右衛門正喜 同

正永父子新刻地藏薩埵石象建雲桂山

旧地

明和四年丁亥十月建此碑

この大要を略記すると、助兵衛政房は、前にあった閻王殿の位置が道傍すぎて環境が良くないという理由から、現在の小林家墓地周辺（一段下の平坦面か）に移し、初代助右衛門清房は正徳7（1713）年、2代目助右衛門正喜は宝暦7年（1757）にそれぞれ修復した。正喜はその時、子の正永とともに流死者の供養のために石地藏（第2表4）を閻王殿がかつてあった場所に建立している。さらに3代目助右衛門正永の時は大石・小石が夥しく出て難工事を極め、相当の日時と二千余人の力をかけて閻王殿を修造し、その完成を記念してそれまでの沿革や閻王殿の様子を詳記した碑を明和4（1767）年に建てたということである。後に正永は父と建てた石地藏が天明の浅間押しで埋まったため、寛政5年（1793）に現在の地に再建している。このことから信州から坪井に移りすんだとされる又右衛門政久の時代に閻王殿が建立され、代々更造していった様子が窺える。「雲桂山閻王殿」は残念ながら現存しないが、銘文にあ

第2表 小林助右衛門関係石造文化財一覧

No	調査No	名称	年代(西暦)	法量			銘文	備考
				高	幅	厚		
1	長3	灯籠	安永5年(1776)	161	51	51	(平)(右) 安永五丙申年七月日 (正副)奉建立 (基台) (正面)丈口右エ門 角右エ門 仲右エ門 助右エ門 徳左エ門 (左) 直右エ門 口左エ門 卯左エ門 忠兵衛 久右エ門	長野原 作道観音堂跡 ※火袋以下残存。笠は傍に、宝珠は一段下の聖観音碑の傍に落ちている。作道観音堂は雲桂寺に移設されている。
2	与102	地藏	享和元年(1801)	59	32	16	(真)享和元年辛酉四月建之 坪井村 施主小林助右衛門正永	与喜屋 萩原観音堂
3	大93	記念碑	明和4年(1767)	134	150	25	(銘文略)明和四年丁亥冬十月 小林助右衛門正永建焉	大津 坪井 小林家墓地 閻王殿再建記念
4	大94	地藏	寛政5年(1793)	328	100	100	(六角柱の基部) (左後) 吾以小林正喜宝曆丁丑八月朔 地藏大土之尊像□於雲桂山之 地而以未星第二十七□天明三卯七月 八日子時□浅間之水龍□□砂埋設 □□□□投草中斯年寛政五□ 秋□□□□高荷□□人尸不残 之功德者也 寛政五星宿癸丑八月吉日 (後)初施主 小林助右衛門正喜 再興施主 小林助右衛門正永	大津 坪井 小林家墓地
5	大95	念仏供養塔	安永5年(1776)	60	42	42	(八角塔の各面に) 安永五丙申年七月 念佛一億万箇 供養塔 普門品六千巻 小林祐助右衛門正永 母建之	大津 坪井 小林家墓地
6	大96	灯籠	明和6年(1769)	187	72	72	(右)明和六巳丑八月日 奉造立常夜籠 施主小林助右衛門正永 (左右一対あるが右は平のみ)	大津 坪井 小林家墓地
7	大101	石祠		42	29	42		大津 坪 松木
8	大134	灯籠	寛政10年(1798)	157	63	63	(平)(右) 願主 小林助右衛門正永 (正面)奉納御神前 (左) 寛政十戌午歳七月吉祥日	大津 神明神社石段中右
9	大137	灯籠	宝暦8年(1758)	209	64	64	(平)(右) 施主小林助右衛門正喜 (正面)奉造立夜燈 (左) 寶暦八年五月吉日	大津 神明神社石段上右



1 灯籠 2 地蔵



小林家遺址全景



3 飯王御所建記念碑



4 地蔵 5 念仏供養塔



第7図 小林助右衛門関係石遺文化財分布図 (S=1/10,000) ※数字は第2表に对应



6 灯籠



7 石祠



8 灯籠



9 灯籠

る石段あるいは石敷の一部と考えられるものは現在の墓地に僅かながら遺存している。その他に灯籠が2基遺存しており、そのうち1基には「明和6巳丑八月日 奉造立常夜籠 施主小林助右衛門正永」との銘がある。これらは閻王殿にあった可能性が高いといえよう。伝聞では「又此の堂には堂主が住み盆、彼岸等にはお参りの人々に湯茶等を接待しておったそうですが、後に野火に焼かれ」たとされている(第4表10)。

2) 作道観音堂、大津神明神社への灯籠の寄進(第7図/第2表1・8・9)

作道観音堂は三原34番観音札所の1番札所で吾妻を巡礼する出発点である。現在は下に国道145号線が走っているが当時はそこから20mも上にあった大岩の覆い被さる狭い道を通っていた。いわゆる岩陰の地形を呈しており、周知の包蔵地「遠西岩陰群(Na83)」^[6]に登録されている場所である。吾妻川の崖につながる急斜面上で、農耕馬や駄馬などがこの険阻な山道から沢に転落する事故が多かったため、その安全祈願に観音堂が建立されたものと伝えられている(第4表12)。観音堂自体は現在の雲林寺に移築されているが、堂前にあった灯籠は原位置を留めている。灯籠の基台部に「助右工門」と刻まれているのが確認できる。

大津神明神社は国道145号線と292号線が交差する大津の交差点の北側に位置する。石垣状の長い参道を登りつめた山頂に本殿・拝殿がある。本殿前に一対の灯籠があり、その片方には「施主小林助右衛門正喜」、また石段途中にも灯籠があり「願主小林助右衛門正永」とそれぞれ刻まれている。

3) 与喜屋萩原観音堂内に地藏尊の寄進(第7図/第2表2)

萩原観音堂は三原34番観音札所の2番札所である。本尊には馬頭観世音、千手観世音で堂内にある諸仏中石造の地藏尊2体のうち1体には「享和元(1801)年西4月坪井村施主小林助右衛門」と銘がある。この助右衛門は年代からして正永である。ちなみに堂宇までの石段は現存で78段あり(道路整備のため8段を切り捨てたとされている)、石柱には「信州中伊那郡高遠領勝間村石屋佐藤清右衛門」と刻まれており、高遠の石工によるものである(第4表12)。

次に後者の伝聞については以下の3項目が伝えられている。

4) 大津用水の改修

先述したが助右衛門が酒造業の関係で私財を投じて改修したとされている。立石から自分の屋敷(現在の小学校敷地内)に至る間は他人の地所を借りることなく、個人で関係地所を全部買い上げて施工したと言われているが証拠文書は何も残っていない。この大津用水は現在も改修整備され、大津・長野原地区の人々の生活基盤を支え続けている。

5) 坪井・松木の石祠建造(第7図/第2表7)

現在の「馬込プレイルランド」東側の山林中に石祠が1基ある。この場所は俗称「天王山(様)」と言われている。この石祠は助右衛門が屋敷の鬼門除けに建てたという伝聞があるが刻銘は何もない。「坪井村絵図」(第3図)には「十二山神境内」の記載が見られる。

6) 諏訪神社建造

屋敷の裏山で、現在の国道北側のガソリンスタンドの地に諏訪神社があったと言われている。現在は削平されているがかつては山になっており、石造物（灯籠）があったらしい。その灯籠は大津神明神社に移された可能性がある。石段途中に1基だけある正永銘の灯籠（第7図／第2表8）か。『坪井村絵図』（第3図）には「諏訪大神」の記載が見られる。

4 屋敷景観

小林家の屋敷絵図等は残念ながら残っていないが、面積的な側面而言えば、貞享3（1686）年「上野国吾妻郡坪井村御検地水帳」（第3表2）に助兵衛政房の屋敷に関する記述があるので参考になる。それを抜粋すると、以下の通りである。

屋敷	拾三間	五畝六歩	
	拾貳間	外畝畝廿四歩四除	助兵衛

屋敷敷地が12間×13間（156坪）の広さで、その外に1畝24歩の垣根などの囲いがあったということである⁶⁾。助右衛門正永からすれば助兵衛政房は曾祖父にあたることから、天明3年時とは違うだろうが一応の目安にはなる。また景観的な側面而言えば、杉田玄白の「後見草 [下] (抄)」(第4表5)が詳細にその当時の様子を伝えている。

「……其村に住居する助右衛門と云る男あり。此男元來富貴多し、慈悲深き聞へ有。扱助右衛門住居といふは、前は吾妻川の路に臨み、後は万山といふ大山に続き道よりは高き事一丈計、山に傍て地を開き、其所に長さ二十間余の酒蔵二棟立並べ、又夫より石階を付け、一丈計上の方に居宅を構へ、其庭の正面に年経たる松を植置きたり。此松の高き事平地より五・六丈も有之由。……」

上記は助右衛門正永が被災した当時の景観である。裏山を開削して土地を広げ、道から1丈計（約3m）上に20間余りの酒蔵2棟が立ち並んでおり、そこから石の階段を設け、さらに1丈計（約3m）上に屋敷を構えていたことが書かれている。また屋敷の庭先正面に高さ5～6丈（約15～18m）の老松が植えられていたようである。調査区は屋敷の北東隅にあたることから現在の校舎へ前面付近に屋敷母屋があり、そこから一段下がった校庭部分に酒蔵が2棟立ち並んでいたことが想定される。また土蔵に関する記述が新美清太夫正倫の「秋之友（抄）」(第4表4)と作者不詳「発信宛先不詳書翰」(第4表7)にあり、屋敷内に9棟の土蔵が建っていたこと、そのうち正永が大切にしていた1棟を残して泥流に押し込まれたことが窺える。

新美清太夫正倫 「秋之友（抄）」(第4表4)

「……扱其夜九ッ時分かの山崩れなかれたり。なれとも土蔵九ッの内大切に致す蔵壹ッのこりける。是ひとへに仏神のかこ成と難有かりける事ともなり。……」

作者不詳 「発信者宛先不詳書翰」(第4表7)

「坪井村 助右エ門土蔵茗々所残りその外不残流失」

5 被災状況

天明3年の浅間山大噴火とそれに伴って発生したいわゆる泥流被害は日本災害史上の一大トピックスとして取り上げられることが多い。それ故にその被害状況を詳記した文献が数多く残されている。その中のいくつかの文献には一個人である小林助右衛門の名が登場することからも改めて当時の有名人であったことが窺えた。助右衛門に関する記述内容は、以下の3つに大きく分けることができる。

- 1) 泥流による被害状況を描写し、助右衛門一家70～90人近くが裏山へ遁れ、一人の死者も出なかったのは助右衛門が信仰心の厚い人物であったからだというもの。

山口魚欄 「浅間焼出津波大変記(浅間山大変記)」(第4表1)

「坪井村流畑三十石余流死八人此の所に小林助右衛門という豪居あり、酒造杯し広く鳴家門有此て大居なりしか、一時に家財諸道具焼失しけり。」

新美清太夫正倫 「秋之友(抄)」(第4表4)

「上州吾妻郡坪井村介右衛門利生有之事」

一、上竈あかつま郡に名主助右衛門と云者有。是は大百姓にて家内七八十人養ける者なり。此度の満水に老人のけかなく犬ねこに至るまで無事に立退し事。元來此助右衛門心正直にして人にあわれみをかけ、上をうやまひ道を道に立つる事を専とし、神仏ふかくいのり、鎮守のいなりをまつり、是を信すること中々常の人思ふ所にあらず。然に此度山おし来、山の鳴よふ只事に非ず。はやく此所を立退候得と申てかへりける。家内の者とも、何いふやらんと捨置けるに、又々来り助右衛門にけ出しはやく立退へしといへて帰りけるか、何国へ行けんさらに見えず。二度に及びければ助右衛門右之物語致ける。本より心正直なれば今宵の内に立退かんと、近所は勿論一家中へも人をまわし、其夜の内家内引連れ、五里ほとわきへのきたり。……」

杉田玄白 「後見草[下](抄)」(第4表5)

「……抑此吾妻溪と申は左右は巖々たる山にて、其の真中を流れ行谷川の名成よし。此故に此川を吾妻川と名附となり。抑此大変にかかりしは此溪川に従ひし左右に続きし二十ヶ村惣て此間に立並ぶ。大家小家はいふに及ばじ、草木人畜に至るまですこしも形あるものは有情非情の無差別皆熱湯と飛出す、百間五十間の焼石にはらわれ、微塵に砕け押流さる。其勢ひをたとへなば百千の石火矢を一度に放つに似たるよし。又熱湯の深き事は何程か計難く、此災にかかりし村の其内に坪井と名附し所あり。(中略)抑此度の山抜と聞と等しく、助右衛門が家族ども皆一統に遁れ出、後の山に這上り、願て見渡せば川より続く熱湯のさばかり高き松の木の一の枝まで浸せしよし。其

深き事凡是にてはかり知べし。又助右衛門が隠徳は天も感心ましましけるにや、かかる災難に逢ひながら一家合せて九十余人不残後の山に通れ、老人も横死する者なかりしよし也。……」

- 2) 被災後その日のうちに草津洗峠まで避難して野宿し、翌日に洗湯の旅館に到着したという避難状況を描写したもの。

作者不詳 「浅間山大焼記」(第4表2)

「……扱吾妻郡内坪井村と言所ハ浅間ヶ嶽方隔たる所なり。此所に小林助右衛門と言て三ヶの都江も聞し大身なり。門戸梁ヲ構家内美々敷、牛馬春や夥し。家来小者迄九拾人程の暮しなりしが、彼硫黄水に押懸られ取物も取あへず命限りと皆散々に出す。軒敷六拾軒土蔵拾六戸前唯一時に押埋り、哀成哉次男孫次郎迎当年廿式歳成しが、平生産生にて有りける。彼大變故父母ニ手ヲ引レ置ツころひつ武三丁程も逃けるか彼硫黄水煙にむせ終に息は絶にけり。父母諸共寄添て、是次男孫次郎よ、呼と叫と薬も水もあらざれハ死骸に取付声ヲ揚げける哀ハ哀也。其間に鳴渡り、間近ク水煙立テ見へけれハ、いたわしい哉孫次郎死骸ヲ振拾逃出ける。目も当られぬ次第なり。山谷ヲ踏越何国ともなくめつたむしやうに逃行ける。馬拾四疋春や八九拾軒唯一時に押流し、漸々草津の湯元江たより愛にて万支の支度をなし、善光寺近辺埴科郡松代より五里脇に決の湯元へ引越ける。扱家内人々終に習わぬ旅なれば其辛勞いわん方なかりけり。……」

緑屋伴七享驚 「信陽浅間嶽年代記」(第4表3)

「……愛に又上州坪井村助右衛門と申者、下人武拾人も召仕酒造いたし御大名方へ仕贈等致し勝手宜百姓なりしか、七月八日の朝近所成山々震備するゆへ何事やらんと驚表出見るに、彼火泥凡拾丈斗にて押掛けれハもの言間もなかりけり。家内者共逃よ逃よと云声にて家財打捨立の俣にて後ノ山江逃出る。跡は野原と成りニけり。夫より信州江逃よ逃越んと草津峠に指懸り其夜は峠に野宿いたせんか女中小共ハ心をいためし上ならわぬ旅路につかれ煩ふ者もあり、死せしものもあり、哀なりける事共也。翌日洗湯菱屋江飛脚(*)お出シけれハ大勢迎に遣し漸々菱屋落着、七月九日方九月上旬迄旅宿いたしけり。此人にくわ敷尋もとめしに世の中の噂ハ咄し程にはなき者なりとい(ハ)共、此度の大へんこそはなしにも筆紙にもつくされずと成。……」

- 3) 災害体験記で被災状況から信濃への避難状況を詳記したもの。

小林るせ 「浅間記」(第4表6)

「をちこち人のみやはとかめぬとありしむかしよりいまも猶たえやらぬ浅間山の煙おとろおとろしう立のほり夏ふかきみとりの空も見えかわす。(中略)心しつかにうちまとろむ夜なくて明けぬれば水無月廿八日 けふはことに空のけしきも物すこうち詠

らるゝにいよいよくろ雲おほひ雨の降けれは戸さしかためつゝ物の色も見へわかす。神なりみちて落かゝりぬへくおほゆるに 石のましりてふりにふるといふにそいかてきはあらんといへは あれ見給へとて戸をすこしをし明ぬるまゝ くひさしのへてみるにけに浅ましうおそろしともいはんかたなく そゝろさむくさへ成てきしかたゆくしゑ思つゝけらる。つみふかき人のいたるとつたへきゝにしちごくとかやいへるもかゝる所にやあらん。(中略)七日にもなりぬれとほしの逢瀬もいとゝおほつかなき空のけしきなりしに此垣ひとへをへたてゝ物したる人の 夕つかたとひきておなしさまのこといひてなけく。(中略)八日今朝は猶空もうちくもり日かけも見えず。いとゝむねもあく時なし。(中略)外のかたにおのこもの声して今なん浅間山くつかへりて愛もとに来るそ とてさけひわたる。人々あしをそらにていつちに行てたすかりぬへき命ともおもひわかす。われか人かにたすけられつゝからうしてうしろの山に至ぬるほと さらにはんかたなし。こゝらなけき待る中にとしおひたる人の 今ひときはうれへ侍りていのちつれなくてよはひの末にかゝるめ見つる事よ とて水無月のすえつかたより外にもいです。ぬりこめのうちにのみ侍りしを 何事もおもひ給ひわかすなから此人を先たすけ出しつゝあとにつゝきてのほり侍る。たれもたれも心たましみなく 道とおほしき所はゆかてたゝたてさまに松かね岩かねにとりつきつゝはひのほる。まして女は心のみさきにたちて ゆけともゆけともおなしところのみある心地してさまよふ。やうやう人にたすけられつゝのほりぬるほとに さりともいかゝなりぬるにやとおそろしさをねんしつゝ しみて見かへりぬれば家とおほしき物も住なれし里もなくてめのをよひぬるかきり すみをなかしたるやうにて いかなる物にかあらん。こゝかしこにほのほ立のほりつゝ我來しかたもわかす 此山まであらましき波のうちよするやうにみゆ。鳥のわたらんよりもはやく あまたなかれわたるものさたかに見もやられず。かくて世はつきぬるにやといとゝ氣のほりてふるひふるひからうしてしようのみねとなんいふに至ぬ。人々ははやなかばくたりたるもあれはやすらふほとなくいさりをりぬるに 木立しけりそひていよいよみちもみえず。人のもてゆくまゝにまかせつゝ 山あひのすこしなたらかなる所にいでぬ。ちかきわたりにもし侍る正永のはらから 子ともあまたもあるか跡ともに皆引くしてこゝにはしりきたる。(中略)こゝにあるかきり皆正永のしる人にしあればつとひきて たれたれもおなしさまの事をのみいひつゝくるもうるさし。こども猶 たへすゆすりみつるに 出湯の瀧のおとさへひゝきあひていとかしかまし。いみなともてきてすゝむれと見もいれられず。(中略)けにさりや信濃なるしふ湯といへる所にゆかりありけるを思ひ出て是なんほとはさまて遠からすといひあわせて かしこに心さすにも行へき道なしはらからたちやうの物のみあしのふむ所をしらす。おそろしき木草しけりたる所を かの男先に立 ことかしこたよりあるかたを 分に分け入てあなひすれと 行なやめるさまとも あさましともいはんかたなし。(中略)こゝにとゝまりて日数をふるに やうやう山もしつまりぬといひあへれと あまの子のやうにかへるへき宿もなし。かくて物するほと おもはずなるつみてなから ぜんくはうじにまうてゝ 年ころねきわたりし仏をおかみ奉らんと思ふ心つきぬ。されといたくかうしにたれば しはしつか

れをやすめてこそとあかしくらす。只つくつくと夢のやうなることを思ふにも常なき世のことはりもかゝるうきめはためしすくなく……」

長文にわたるためここでは部分的に引用したが、全文は第4表18に収録されている。作者は三十幅三集巻之八片玉集に「るせ 小林正永妻」とあり、正永が後妻として江戸から迎えた「今井るせ」である。文章中に夫である「正永」の名が出ており、被災前後の状況、信濃への避難の様子が詳細に記されている。また他の文献では見られない「ぜんくはうじ(善光寺)」まで足を延ばした事が記載されている。このるせ著の「浅間記」は天明の浅間山噴火の記録としては羽鳥一紅著の「文月浅間記」とともに女性の手によって書かれたものとして価値のあるものである。作者るせの出自に関する記述としては第4表18に詳記されているが³⁷⁾、その一部として第4表8を引用しておく。

津村(圓) 涼庵 「浅間集序」(第4表8)

坪井集序

今井氏の両女姉はさよ妹はるせ。姉は武州豊島郡根岸村住佐藤徳明に嫁す。妹は上州吾妻郡坪井村住小林正永に嫁す。姉妹共に和歌を好て吟詠数多に及ぶ。妹寛政二年十月十八日病て江戸浅草柳橋の宅に死す。死するの日辞世の歌二首あり。

きのふけふきゆる待つまの露の身はうき世になにをおもひおくへき
つるにはとおもひし道もおもひきやけふをかきりのゆふへなりとは

圓 正恭しるす

今井るせは、正永が最初の妻を亡くした安永9(1780)年以後に後妻として坪井に来て、天明3(1783)年に浅間山の噴火に遭遇した。姉に「さよ」がいて、るせはその妹にあたる。るせと正永は被災後に江戸浅草柳橋(現在の東京都台東区浅草柳橋)に居を構え、寛政2(1790)年にるせが病死してからも正永が一人で江戸の家に住んで商売を続けていたようである。後述する上原家文書からもそのことが窺える。

6 被災後

天明の浅間押しで、小林助右衛門正永は家屋敷家財の全てを流失した。現在の中央小学校敷地内に居を構えていたが、被災後に一段上の坪井平に移り住むと同時に江戸にも居を構え商売をしていたようである。被災後の生活の様子を記したのとして、県立文書館に寄託されている「上原家文書」⁽³⁸⁾(第3表15・16)がその側面をよく伝えている。

上原家文書(第3表15・16)

(K164)

恐乍ら口上書を以て願ひ上げ奉り候

御先代様と数年の間私儀

御館入り衆之を仰せ有り難き仕合わせに存じ奉り候。然ル処私儀浅間山

変水以来在所坪井村退転同様に罷る成候に付江戸表
本町三丁目出見世真綿店へ引越し数年世話仕罷有り候て
取続くも仕りべき趣に御座候ところ如何なる迫り合に御座候や。五年以前
丑年以来かれこれ難渋ともあい重なり当惑しごく仕候。定めて
御聞き及びも成し下さるべき候。去る丑年之冬江戸店類焼仕真綿等
夥しく焼失仕り其上一子堅治郎病氣之処養生叶わず
死去仕り老練の拙者十方ニ暮れ罷り有候所又々翌寅正月
廿四日在所坪井村自火にて残らず焼失仕難儀至極仕候
其上江戸店之儀も餘程の売掛貸金も御座候所
悴死去仕候に付借り方の者共 かれこれ難渋し其さい方去る辰
春中迄相掛り厳しく催促も仕候得共金子一円も取り
申さず難渋至極仕候。右の通り之仕合故に江戸表も早速相
仕舞當時拙者儀在所坪井へ引込み罷り有り尤も寅年
以来御厚恩身を以て年々拝借米仰せ付けられ下置かれ候に付
少々酒造り仕候て而渡世仕候。然し共利間いささかの儀にて年々困窮
仕難儀至極に存じ奉り候。中々身上取り直し申すべき様も御座無候て
当惑至極仕候
一右に付時節柄願ひ奉り候も恐れ入り奉存じ候得共何卒
御上の御慈悲を以て金子六百両暫時の間拝借仰せ付けられ
仰せ付け下しおかれ候様願ひ上げ奉り上候。左候得ば別段質屋商売
相助連々と元手金も相貯え申し候様に相成下候儀
御座候。尤も御金返上納の儀は御直談も成り下され候はば
如何様共仰せ付けられ次第きつと上納仕るべき候、誠に数年来
御館入りも仰せ付けなされ下置かれ候に付恐れも顧みず右の段
願ひ上げ奉り候。御救と畏れなされ願の通り仰せ付けなされ
御取立成し下され候はば重々有り難く存じ奉りべき候 以上
上州坪井村 小林助右衛門

寛政九年巳八月

上田奉行所様

これは正永が寛永9(1797)年に上田奉行所へ出した小林家復興のための願ひ文書である。それによ
ると天明の災害後、江戸の表本町3丁目に真綿店を出して引越し、再起をかけて何とかやってきたが、
ここ5年間は難渋が重なっている。丑年(1793年)の冬に真綿店等が焼失し、その上長男の堅治郎が病
氣で死去した。翌寅(1794年)正月24日には坪井の家が自火により火災に遭い、また江戸の店で売掛貸
金が多くあり、辰(1796年)春まで厳しく催促に奔走したがまったく回収できなかったのが江戸を引き
払い、坪井に戻ってきた。寅年(1794年)以来、拝借米で少々の酒造をし世渡りしてきたが、年々困窮
し難儀している。そこで質屋商売をしたいので600両を借用したいという旨の内容の文書を上田奉行所に
提出したということである。これに対して同年巳の11月になって裁許の通知が届き、200両だけが許可に

なったようである。その借証文は以下の通りである。

(K165)

上 小林助右衛門 (端裏書)

拝借金仮証文の事

一金式百両也

右はこの度願い上げ奉り候処書面の金高拝借仰せ付けられ下置かれ
冥加至極有り難く請取り奉り候。尤も返上の儀は来たる午暮方卯暮迄老拾ヵ年
之間壹ヵ年に金式拾両宛無利足にて元金残らず返上仕るべき旨せられ
仰付冥加に相叶有り難く存じ奉り候。然る上は返上納之儀聊無遅滞年々
極月二十日限りきつと上納仕べく候。尤も本証文追て相認差上申すべき候。其節
此仮証文手形御戻し下さるべき候。念の為金子請取手形差上申候。仍て件の如し

上州坪井村 小林助右衛門 印

同 常 吉 印

寛政九年巳十一月

上田御奉行様

これは正永が上田奉行書に提出した拝借金の仮証文である。これを見ると総額200両を10年無利息で借りていることが分かる。毎月20日が返済日で毎年20両を返していく旨が綴られている。晩年はこの200両を元手として質屋を営み生活事業の再建を図ったと考えられるが、その詳細は不明である。正永はこの仮証文提出から11年後の文化元年(1808)8月に死亡している。その後は冒頭で触れたとおり、一人残されたおやす(妙念比丘尼)が天保年間に餓死して正系は断たれたが、豊造を養子にしてからは小林家一族は脈々と繁栄を遂げて現在に至っている。昭和59年には小林家一族の手により小林家墓地に災害供養塔が奉納されている。

7 関係文書・文献

今回の調査で小林助右衛門関係の古文書・文献を集成した(第3・4表)。母屋が被災にあったり、その後も火事等で助右衛門関係文書はほとんど残っていない状況である。その中で今回取りあげなかったが小林助右衛門正永著の「日光山紀行」(第4表9)、妻るせ著の「浅間記」(第4表6)が現存することが判明したことは大きな収穫であった。これら一覧は現時点で分かっているもので今後増えていくことに期待したい。

注

- (1) 小林家系図は現存していない。小林清氏より、氏作成の系図・星野光儀氏作成の系図を、また輪村明氏より墓石から作成した系図を提供していただき、それを元に必要箇所を抜粋して筆者が作成した。
- (2) 星野光儀氏作成の系図では宇多天皇まで遡る。これらは何を根拠として作成したのかは不明である。

- (3) 文献によっては政房が初代助右衛門とするものもあるが(第4図10)、雲柱山園王殿の建設記念碑(第2表3)の銘文を重視し、助兵衛政房とし、初代助右衛門は清房とした。
- (4) 文に引用した上原家文書(第3表15・16)が参考になる。
- (5) 長野原町教育委員会 1990【長野原町の遺跡】
- (6) 岩田芳明氏(中之条町歴史民俗資料館古文書講座講師)の御教示による。
- (7) 作者のせの出自に関しては今井氏の説とあるのみで、この今井氏のことを森統三氏が著書の中で「今井氏は涼庵の最初の師ではないか」としていることを古屋氏が紹介している(第4図18)。
【森統三著作集】第7巻 津村涼庵
- (8) 原文からの読み下しは岩井八郎氏(長野原町郷土史研究会)、資料提供は坂寄富士夫氏による。

第3表 小林助右衛門関係古文書一覽

No.	所 蔵	No.	表 題	年 代	作 成	形 態	備 考
1	大津区有	2	上野国吾妻郡坪井村御城地田畑 宛地帳(荒田畑合3町7反6畝 25歩)	貞享3,9.	酒井河内守内高須単人・山田清 右衛門・天野九左衛門外7名	冊	貞享3年=1686年 助右衛門清政
2	大津区有	5	上野国吾妻郡坪井村御城地本帳 (田畑屋敷合12町1反9畝27 歩、分米84石3斗1升5合)	貞享3,9.	酒井河内守内高須単人・山田清 右衛門・天野九左衛門外7名	冊	貞享3年=1686年 助右衛門清政
3	大津区有	13	上野国我妻郡坪井村御城地名寄 帳 *虫損有	享保9,9.		冊	享保9年=1724年 助右衛門清政
4	大津区有	14	田畑御年貢勘定帳 *虫損有	宝曆9.	坪井村	冊	宝曆9年=1759年 助右衛門正喜
5	大津区有	15	天明三年沼荒地取調帳 *虫損有	天明3.	坪井村	冊	天明3年=1783年 助右衛門正永
6	大津区有	21	差上申一札之事(河上金五之助 支配曆につき符留宿所附坪井村 御用勘方証文)	安政3,3	坪井村名主太郎右衛門・与頭伝 之丞、百姓代武左衛門外9名 一野留御領所	状	安政3年=1856年 別姓か
7	黒岩今朝松家	4	〔辰年寅皆済目録〕(坪井村高84 石3斗1升5合、納合米4石9 斗1升5合、米14貫630文3分) *池田新兵衛裏書印有、破損有	享保10,6.	坪井村名主助右衛門・組頭権兵 衛、長百姓清吉外3名 一池田新兵衛役所	状	享保10年=1725年 助右衛門清政
8	市村平八郎家	65	借用申金子之事	明和3,12.	立石村金借主平兵衛・請人2名 一坪井村助右衛門	状	明和3年=1766年 助右衛門正永
9	市村平八郎家	162	借用申金子之事 *破損	明和6,8.	立石村平兵衛一坪井村助右衛門	状	明和6年=1769年 助右衛門正永
10	市村平八郎家	67	借用申金子之事	天明2,9.	立石村金借主平兵衛・請人1名 一坪井村助右衛門	状	天明2年=1782年 助右衛門正永
11	瀧本正喜家	26	寛(借金差引き勘定・残金70両 貸し)	(明和8),12	坪井村助右衛門一立石・勘堀木 ・古森・今井・目影各村名主	状	明和8年=1771年 助右衛門正永
12	藤原良介家	21	差出申託一札之事(徳兵衛、不 身持、悪事働き時味中、託入取 下げ帳)	文政7.	百姓一節右衛門・養子徳兵衛外 7名一戸加那安左衛門・坪井 村助右衛門	状	文政7年=1824年 助右衛門行政
13	唐澤和夫家	3	売渡申細證文之事	文政13,12.	坪井村畑売主助右衛門・名主九 兵衛・組頭 一羽根尾村林蔵	状	文政13年=1830年 別姓か
14	唐澤和夫家	4	売渡申細證文之事(名主の奥書 あり)	文政5,1	坪井村畑売主助右衛門・請人善 兵衛 一羽根尾村林蔵	状	文政5年=1822年 助右衛門正永
15	上原(清彦)家	K165	拝借金仮証文之事	寛政9,11	上州坪井村小林助右衛門・岡常 吉 一上田御奉行	状	寛政9年=1797年 助右衛門正永
16	上原(清彦)家	K164	年忌以上書奉願上帳	寛政9,8	上州坪井村小林助右衛門 一上田御奉行	状	寛政9年=1797年 助右衛門正永
17	瀧本貞二家	322	年忌以上書奉願上帳	天明3,10.	赤岩村名主四良左衛門外 →原田清右衛門手代	状	天明3年=1783年 助右衛門正永

第4表 小林助右衛門関係文献一覽

No.	著 者 名	表 題	収 録 書 名	編 集・発 行	発 行 年	備 考
1	山口 魚樞	「浅間焼出山津波大変記 (浅間山大変記)」	「浅間山天明噴火史料集成 日記録編(一)」	萩原 進編・群馬県文化 事業振興会	昭和61年	
2	作者不詳	「浅間山大変記」	「浅間山天明噴火史料集成 IV記録編(三)」	萩原 進編・群馬県文化 事業振興会	平成5年	原本は小諸市立火山博物 館蔵
3	緑屋伴七享齋	「信陽浅間年代記」	「浅間山天明噴火史料集成 IV記録編(三)」	萩原 進編・群馬県文化 事業振興会	平成5年	原本は小諸市立火山博物 館蔵
4	新美清太夫正論	「秋之友(抄)」	「浅間山天明噴火史料集成 IV記録編(三)」	萩原 進編・群馬県文化 事業振興会	平成5年	原本は本田彦彦氏蔵
5	杉田玄白	「後見草[下](抄)」	「浅間山天明噴火史料集成 V録編」	萩原 進編・群馬県文化 事業振興会	平成7年	原本は「改訂史籍集覧 第十七集」
6	小林せ	「浅間記」(『片玉集』)	「史料と人物 江戸期おん な考」第14号	東京桂の会・桂文庫	平成15年	原本は国会図書館蔵
7	作者不詳	「免借者宛不詳書翰」	「浅間山天明噴火史料集成 V録編」	萩原 進編・群馬県文化 事業振興会	平成7年	原本は小諸市立火山博物 館蔵
8	津村(圓)涼庵	「坪井集序」(『片玉集』)	「史料と人物 江戸期おん な考」第14号	東京桂の会・桂文庫	平成15年	原本は国会図書館蔵
9	小林正永	「日光山紀行」(『片玉集』)				原本は国会図書館蔵
10	小林藤司	「一、助右衛門略記」	「大津のすがた」	大津区	昭和37年	
11	長野原可		「長野原町誌」下巻		昭和53年	
12	鈴木広義		「〔三原郷〕西吾妻三十四番 札所めぐり」	吾妻新聞社	昭和54年	
13	萩原 進	「小林」	「上毛新聞」	上毛新聞社	昭和54年	
14	萩原 進	「小林助右衛門の墓」	「群馬の墓めぐり 郡部編」	みやま文庫	昭和55年	
15	萩原 進		「天明三年浅間山噴火史」	確忠村教育委員会	昭和57年	
16	長野原可		「長野原町の石造文化財」	上毛民俗学会・長野原町	平成元年	
17	倉本京子	「『片玉集』の中の女の史 料について」	「史料と人物 江戸期おん な考」第13号	東京桂の会・桂文庫	平成14年	
18	古屋祥子	「『浅間記』について」	「史料と人物 江戸期おん な考」第14号	東京桂の会・桂文庫	平成15年	

第IV章 検出された遺構と遺物

1 遺構

A 概要

本調査で検出された遺構は近世江戸期に限定される。調査区からは石垣1基、土蔵跡1棟、礎石建物跡2棟が検出されている。土蔵基礎内のピットから縄文前期土器片が出土したことから、調査区南壁沿いにサブトレを設定したが、近世以前の遺構・包含層を検出するには至らなかった。上記遺構は1783(天明3)年に浅間山の噴火に伴い発生した泥流堆積物にバックアップされた状態で検出された。

B 各説

1) 石垣 (図版5・24・26)

位置 調査区北面～東面。

検出状況 試掘調査の第1～3トレンチで確認していたので北壁に関しては予想通り検出できたが、東壁に関しては根石を残して抜いてしまった。北壁西側の壁面には木材混ロームブロックが5～10cm厚で付着していた。

遺存状態 北壁は良好。東壁は不良。

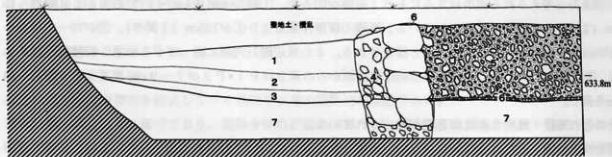
規模 北壁は検出長18.6m、高さ0.98m。東壁は検出長3.15m、高さ1.02m。

主軸方位 北壁はN-81°-E。東壁はN-20°-W。北壁と東壁は北東コーナーで109°で交わる。

概要 屋敷の外郭施設である。屋敷裏手には御堂入山が迫っており、屋敷敷地の区画および土留めの役割を担っていたと考えられる。石垣は建物群の北側を東西に巡り、2号礎石建物跡の東側で南北に折れていることから、調査区は屋敷敷地内の北東隅にあたることになる。壁体は比較的形の整った幅50～60cm、厚さ20～50cmの安山岩を基本的に3段積み上げて壁面を構成している。築石は自然石が大半だが、所々幅110cm、厚さ80cmの矢穴を遺した巨石を配している箇所も見受けられる。積み方は築石の横目地が通っておらず、自然石と割石を用いて積み、間隙には割石・角礫などを詰めている。三浦氏分類によれば、野面積乱積に該当する(三浦1999)。裏込石等の石垣設置状況に関しては今回の調査では詳細な記録がとれなかったので試掘調査の第3トレンチでの所見を援用したい(第8図)。

まず、石垣を設置する際に幅1mほどの溝を掘削し、そこに小さめの角礫を敷き詰め、石垣と同規模の石を水平に据えて根石を据えるステージを作っていることが理解される。次に石垣は壁面を約70度傾斜させ3段積み上げている。その背後には多量の角礫を含む裏込め(4層)を順次施し、さらにその背後には版築状にやはり角礫を多量に含んだ1～3層で堅牢に固めている。第2礎石建物跡の南壁セクションでも明らかのように地盤の関東ローム層は調査区東側へ向かって不安定になり、調査区東側ではローム層は確認されなくなる。これは調査区東側がかつて御堂入沢の沢筋を形成していたと考えられることと深く関連している。7層は浅間A軽石が直接のっている層なので建物構築面である。第1トレンチでは裏込めの背後にすぐ地山が確認されているのですべての石垣がこのように積まれているわけではないが、調査区でも比較的地盤の弱い東側半分では以上のような構造を採っていたと考えられる。

付帯施設 調査区北東コーナーに土坑が検出されているが、出土遺物より後世の掘乱と判断した。



1. 黒褐色土層：粘性なし。締まりあり。軽石を散見含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム殻・軽石を含み、角礫（大）を多量に含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム殻を少量。軽石を含み、角礫（小）を多量に含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。多量の角礫を含む。礫は上段が大きく下段が小さい。
5. 暗褐色砂質土層：粘性なし。締まりあり。河原石・浅層石を多量に含む。
6. 新 石 層：粘性・締まり共になし。いよゆる浅層角礫石の純層。
7. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。軽石を含み、角礫（小）を多量に含む。

第8図 第3トレンチ石垣設置状況図 (S = 1/50)

遺物検出状況 遺物は少なく、北壁西側壁面でロームブロック（土壁か）に混じって木材片が7点と釘（70）1点が検出されている。それらのうち3点を樹種分析し、アカマツ2点、マツ属複雑管束亜属1点と判明している（第V章3参照）。

遺 物 釘（70）1点のみ図示し得た。

2) 土蔵跡 (図版6・24・27・29・30)

位 置 調査区西側。

検出状況 調査区外に延びており、約4分の1～6分の1の検出である。泥流堆積土を除去していく過程で土蔵基礎を構成する安山岩切石が建物範囲を巡っている状況が確認された。

遺存状態 基礎2段が遺存しており共に泥流に押されているが、特に上段基礎は大きく北西方向にずれている。

規 模 規模は東西間口2.06m以上（2間以上）、奥行き5.4m（3間）。

主軸方位 南北N-7°-W、東西N-92°-E

概 要 基礎構造や調査区西壁セクションに土壁と考えられるロームブロックが観察されたことから土蔵と判断した。遺構の大半は調査区外に延びているが、建物東辺の南北端を把握することができたので間口2間×奥行き3間あるいは3間×3間の土蔵と考えられる。調査区内から瓦の出土が見られないことから茅葺き屋根であったと想定される。基礎は前述した通り2段構造である。下段基礎は大振りな粗粒輝石安山岩を使用しており、平面形は長方形を呈する。設置面以外の5面は平ノミ状・チョウナ状工具により小叩き仕上げが施されている。大きさは長辺57～100cm、短辺40～54cm、厚さ25～34cmを測る。設置に関しては、拳大の角礫を間隙に詰めて水平を採っていたことが窺われた。基本的に長辺を外側に向けて並べられているが、北辺の1石だけは短辺を外側に向けて設置されている。また北東コーナ部分ではクランク状の石組みがなされている。上段基礎は下段基礎と比べると小振りなものを使用している。石質は北半にはデイサイト質安山岩、南半には下段基礎と同じ粗粒輝石安山岩と異なり、使い分けが確認された。平面形は長方形を基本とし、方形を呈するものも多い。大きさは長辺48～64cm、短辺32～40cm、厚さ14～20cmを測る。加工は上面内側に柱や床材を載せるための溝（段）が切られている他は下段基礎と同様に小叩き仕上げが施されている。溝（段）幅は4～8cm、深さは3cm程で、柱あるいは根太

を据えたと考えられる箇所はさらにもう1段溝が切られ、①幅20cm前後(6~7寸)のものと②幅14~15cm(5寸)の2種類が確認されている。基礎の復原作業により①が135cm(1間半)、②が均一ではないが90cm(半間)間隔で並んでいたと推定される。また東辺礎石内側に沿ってP1~P5が検出されている。平面形は円形を呈し、直径14~20cm、確認面からの深さはP1・P2が7~9cm、P3~P5が32~33cmを測る。

その他の施設 建物北側に雨落溝が検出されている。

遺物検出状況 遺物は全体的に少ない。西壁セクションにおいて釘が数点出土している他、軒裏で肥前陶器(7)、埴摺鉢(8)が出土している。

遺物 陶器2点、釘5点、楔1点を図示し得た。

3) 礎石建物跡

1号礎石建物跡(図版7・8・24・28)

位置 調査区中央。

検出状況 試掘調査では遺構の性格まで把握できなかったが、泥流堆積物を除去していく過程で礎石が並んで確認された。

遺存状態 調査区外に延びており、約5分の3あるいは5分の4の検出である。礎石はトレンチにかかっている範囲以外は比較的良好に遺存している。

規模 東西間口7.6m(4間)、奥行き5.7m以上(3間以上)。柱間約1.9m。

主軸方位 南北N-84°-E、東西N-15°-W

概要 総柱の礎石建物跡である。検出範囲では、土蔵の前面と合わせていると考えれば4間×3間、また礎石列上にとってこないP1を建物の中心に据えた床持柱と考えれば4間×4間の建物が想定される。礎石はS1~S16まで検出されているが、S13は礎石を据えた痕跡が見られなかった。礎石に使用される石は扁平な輝石安山岩で比較的大振りである。S11の礎石には矢穴が残されている。礎石以外にもP1~P6が検出されている。P1はそのS13のすぐ北側、S8との中間に位置する。柱痕跡は確認できなかったが平面形は不整楕円形を呈し、長軸164cm、短軸92cm、確認面からの深さは44cmを測る。P2~P4は柱材が腐朽してしまった様なピットで平面形は不整円形を呈し、直径12~15cm、確認面からの深さは約40cmを測る。P5・P6に関しては建物と直接関係しないものと考えられる。囲炉裏は建物の北壁東寄りに位置し、東西に長軸をもつ隅丸長方形を呈している。白色粘土混山砂が用材とし、方形の礎の並びが見られる。囲炉裏北側にも白色粘土混山砂が広がって分布していたことからカマドの可能性も否定できない。掘り込みの規模は長軸127cm、短軸108cm、確認面からの深さ10cmを測る。確認面では灰層が広がっており、その下に炭化材・炭化粒を含む層が堆積しているが焼土は見られなかった。また釘が比較的多く出土している。

その他の施設 建物北側に雨落溝が検出されている。

遺物検出状況 遺物はS1・S6の西側の土蔵との間で集中して検出され、銅板を鋸留める木製品片および銅製飾り金具、鉄製品類のほとんどがこの付近に集中している。試掘調査の1号トレンチからそれらと同一製品と考えられる板状木製品部材(31・32)が出土していることから本建物に帰属するものと判断した。その他に1号トレンチでは挽臼(80・81)が出土している。

遺物 磁器2点、木製品部材26点、建築部材2点、銅板1点、飾り金具6点、鎌・鉞各1点、釘11

点、挽臼4点、搗臼2点を図示し得た。

2号礎石建物跡 (図版9・10・24・28)

位置 調査区東側。

検出状況 泥流堆積物を除去していく過程で2連の固定臼が検出された。

遺存状態 調査区外に延びており、建物全体の把握は困難だが、固定臼を設置した土抗をほぼ中心に礎石が遺存している。

規模 間口2.75m (1間半)、奥行き1.9m以上 (1間以上)。

主軸方位 東西N-21°-W、南北N-68°-E。

概要 調査時には不明遺構として取り扱っていた建物である。固定臼と判断する前にはトイレ状遺構の可能性も視野入れて、寄生虫卵・花粉分析も実施している。結果的には屋敷の北東隅(鬼門)にあたることからトイレを設置することはないのだが、分析結果にもそれが反映している。固定臼設置土抗を中心にS1~S7までの礎石が検出されているが、S6・S7に関しては列上から逸れている。礎石は1号のそれと比べるとやや小振りだが扁平な輝石安山岩を使用している。この他P1・P2が検出されており、P1は1号礎石建物跡でも見られた柱材が腐朽した様なビットである。P2に関してはS3と対応する位置に近いが列上から逸れている。固定臼設置土抗は南北に長軸を採る隅丸長方形を呈し、長軸272cm以上、短軸100~110cm、確認面からの深さは100~120cmで南側へ緩く傾斜している。固定臼の設置に関しては北側(86)は上面が扁平な礎上に置かれたように設置されているのに対し、南側(87)は傘大の礎で周囲を固め、内部は空洞となっている。調査終了後の図面整理で明らかになったことだが、さらにその南側にもう1連の固定臼を設置していたと考えられる石組みが認められる。

その他の施設 建物北側に雨落溝が検出されている。

遺物検出状況 建物の東側で生木材が多く検出されている。

遺物 遺物は磁器片1点、建築部材4点、鉄釘1点を図示し得た。

2 遺物

A 概要

出土遺物は石製品を除いてタバコ(約54×34×15cm)8箱分である。そのほとんどが近世のものであるが、近世以前の縄文土器片や近世以後のものも若干混在している。遺物の種類は陶磁器・木製品・金属製品・石製品・その他に大別される。今回図示し得た遺物は90点であるが、その内訳は陶磁器8点(9%)・木製品32点(36%)・金属製品39点(43%、うち銅製品10点・鉄製品29点)・石製品9点(10%)・その他2点(2%)となる。木製品としたものはその全てが破片での出土であり、一部に構築部材を含んでいるが、特定の製品名を推定することは困難である。また調査区内で木造校舎の建て替えなどが2度行われていることから、殊に木製品に至っては一括で出土したのものに関しては所属時期が曖昧なものも存在する。さらに近世に属する遺物に関しても、埋没原因が泥流の逆流によると考えられることから、出土した位置が本来所属した遺構なのかどうかも疑問の余地がある。本調査区が屋敷敷地内の北東隅にあたり、母屋など主要な建物外にあたることや調査面積の狭小から致し方ない面もあるが、1783(天明3)年旧暦7月8日と埋没時期が判明している地方分限者の屋敷跡からの出土品が主体を占めること

に相違ない。

B 各 説

1) 陶磁器 (図版 2・11・31)

大きく肥前陶磁器、志戸呂陶器、瀬戸・美濃陶器、堺陶器に分類される。

a) 肥前磁器

そば猪口(1) 直立気味に開き、下端部が屈曲する。体部外面に葛花文。

碗(2・3) 2・3ともにやや厚みがある。体部外面に梅樹文。波佐見系。

b) 志戸呂陶器

灯明皿(4) 無高台平形。見込み平坦。

c) 瀬戸・美濃陶器

皿(5) 鈔緑形。陶胎染付。

植木鉢(6) 半銅甕を転用。口縁部直下に2条の凹線。底部は輪高台で腰部を除き鉄釉を掛けている。底面中央に外面からの穿孔を施している。

d) 肥前陶器 (唐津)

甕(7) 植木鉢に転用。胴下部に段を有する。輪高台。外面は胴中部に白化粧を施し、銅緑釉によりモチーフを描出。胴下部は白釉を3条巡らし、以下および胴下部内面に鉄泥を施しており、内底面には砂の付着が認められる。重ね焼きの痕跡か。底面中央に外面からの穿孔が施されている。

e) 堺陶器

播鉢(8) 口縁部縁帯で内面に突帯を巡らす。口縁部上面を押さえて片口部を作り出し、片口部内面扇形内に「令」の刻印が押印されている。外面は横位ヘラ削り、内面は体部に密な播目を施し、見込み中央には三角状の播目を入れている。

2) 木製品 (図版 3・12・31・32)

出土遺物の中でその占める割合は大きい、そのほとんどが土質化しており、遺存状態が良いものは少ない。また破片が多く、製品・部位を特定できるものも残念ながらほとんどない。遺存度の高い木製品片のほとんどが厚さ1mmに満たない銅板を紙留めしているあるいは剝離痕跡があることが特徴的である。掲載した木製品32点の樹種別割合はヒノキ15点(46.9%)、ケヤキ8点(25%)、アカマツ3点(9.4%)、トウヒ属2点(6.3%)、モクレン属2点(6.3%)、クリ1点(3.1%)、イチョウ1点(3.1%)であった。ヒノキとケヤキで全体の7割以上を占め、木製品として使用例が少ないイチョウが含まれている。

分類に際しては木製品部材(9~34)あるいは建築部材(35~40)なので大別し、その中で形状・加工の類似性を重視した。なお、漆器(図版25)が1点出土しているが、木質部が腐朽し、漆膜のみの遺存であったため図示するには至らなかった。

a) 木製品部材

曲物(12・26) 12は口縁部と考えられる。鋸穴1箇所。板状道具の柄の可能性もある。26は体部と考えられるが、遺存状態は悪い。表面赤色。

脚部・台座状もの(9~11) 9~11は調度品の脚部あるいは台座の一部と考えられる。いずれも銅板を鋸留めしていた痕跡が窺える。10はほぞを11はほぞ穴を表裏に有している。

段を有するもの(15・16) 15・16は共に段を有する類だが用途は不明である。16は膳の脚部の可能性がある。

棒状を呈するもの(17~21) 17~21は棒状で断面が台形を呈すると思われる類である。これらも銅板を鋸留めしていた痕跡が窺われる。調度品の部材と考えられるが、17は照明具の脚部、21は蓋上に付く把手の可能性もある。

丸棒状を呈するもの(22~24) 22・23は銅板を鋸留めしており、24もその痕跡が見られる。これらは先端が留め金で補強されている柄の可能性もある。

板状を呈するもの(13・14・25・27~34) 13・14は同一個体である。その形状から差歯下駄を連想させるが、銅製飾り金具(45)が鋸留めされていた可能性が高いため、木製品を特定するには至らなかった。14には設計線が遺されている。25は不定形だが下駄の歯の可能性もある。27~33は黒漆の付着・塗布が確認されるもので、特に28~33は同一個体と考えられる。黒漆を下地として銅板の飾り金具を銅板で留めているあるいはその痕跡が窺える類である。その中でも遺存度の高い31・32は上面には2個単位、側面には上面と呼応する箇所1個単位で銅板が間隔をあけて数箇所留められており、鋸頭には鍍金が施されている。また31にはほぞ穴状の加工も認められる。34は1枚の銅板が鉄釘で巻き留められている。銅板表面には白い繊維質の付着が認められる。

b) 建築部材

板材(35・37・38) 35・37・38は各面を平滑に加工し、35は面取り状に斜めの加工も認められる。37は釘穴2箇所、38は1箇所見られる。

角材(36) 36は節部はよく遺存しているがその他は脆弱である。一部生焼けが確認される。

加工をもつ部材(39・40) どちらも節部分の遺存である。39は丸木材を縦に半載、40はL字に加工を施している。

3) 金属製品 (図版2・15・17・33)

銅製品と鉄製品に大きく分類される。銅製品は木材に固定されていた銅板状の飾り金具とそれを留め

ていた鋸とに分けられる。鉄製品は鎌・鉞・釘(鋸)・楔が出土しており、数的な主体は釘が占める。

a) 銅製品

鋸(41) 全長1.2cm、軸幅0.15cm、重量0.1gと極小である。木材に銅板を固定するのに使用されたものと考えられる。

飾り金具(42~50) これら9点は木材表面に鋸留めされていたと考えられるものである。木製品片と混在するかたちで出土している。多量の破片が出土しているが比較的大きさや形状が揃っているものを掲載している。厚さは0.5mmと極薄である。これらは膨らみを有するもの(43・44)と扁平なもの(42・45~50)とに大別でき、さらに後者は無文のもの(45・46)と有文で鍍金が施されているもの(47~50)に細別される。42はL字に屈曲しており木材の角に鋸留めされたものであろう。鋸穴が1箇所認められる。43・44は膨らみを有しており、花卉あるいは葉を模しているのか。45は縦長弧状を呈しており、板状木製品部材(13・14)と形状・鋸穴の位置などが一致している。3個単位の鋸穴が3箇所認められる。46も45と形状が類似しており縦長である。3個単位の鋸穴が2箇所認められ、銅鋸が4箇所残存している。47~50は金銅製飾り金具で形状も縦長の長方形を呈している。それぞれ魚々子打ちと毛彫りにより草花文を描出しており類似しているが文様そのものの細部は微妙に異なっている。遺存度の高い48は文様部下端でL字に屈曲しており、鋸留めしていた木製品片の形状を示していると考えられる。

b) 鉄製品

鎌(51) 刃部の大半を欠いているがその形状から鎌と考えられる。柄部に木質が遺存しており、分析の結果クリ?が使用されていたようである。

鉞(52) 刃部先端に「止め」があり新潟型。刃部長20.6cm。厚みがあり幅広。柄部に木質が遺存しており、分析の結果カエデ属が使用されていたようである。

鋸(53) 1点のみの出土である。鉄鋸が使用されているのは板状木製品部材(34)のみである。

釘(54~78) 鉄製品の主体を占め、図化したもので25点である。いわゆる和釘で軸の断面形は基本的に方形ないし長方形を呈している。大きさにより3段階位に分類ができそうであるが、全体的な遺存度が低いため指摘しておくに留めたい。全体的に木質の付着が顕著である。

楔(79) 1点のみの出土である。いわゆる楔形を呈しており下端は土錆により形状不明である。

4) 石製品(図版4・18~23・34~36)

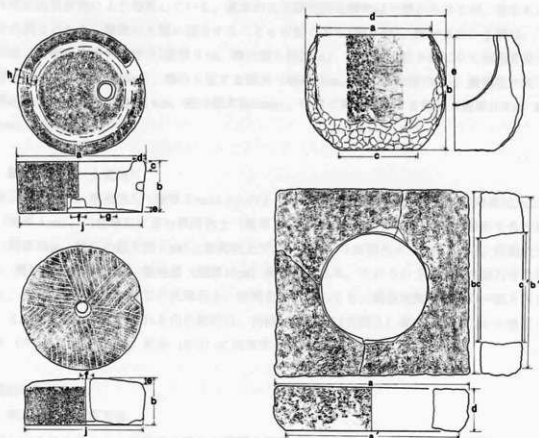
石臼・基礎石が検出されており、石臼は粉挽臼(上臼・下臼)、搗臼、固定臼に分類される。一般的に石臼は完形での出土は希有である。石臼の計測位置を第9図に示す。

a) 石臼

搗臼(80~83) 80・81と82・83は粉挽臼で、共に上下臼セットで出土している。81の底面には十字の溝が切っており、他に類例を見ない。下臼を固定するものか。また擦り合わせ面の分割は4点すべて6分割で、目は主溝+副溝で9~12に収まる。目は芯穴から周縁にやや弧状に施されており、目立ては同一人物によるものと考えられる。いずれも粗粒輝石安山岩製。

搗臼(84・85) 84は片口か。割れ口が新旧認められる。底部から緩やかに立ち上がり口縁部が開いている。側面に一對の半月形柄杓が認められる。85は底部から丸く立ち上がり、口縁部は内彎している。全体を荒削加工したのち3分の1程は平ノミ状工具・チョウナ状工具による小叩き仕上げを施している。正面を意識か。口縁部上面には設計線が残されており、当初は全体を小叩き仕上げする予定だったようである。内面は使用によると思われる光沢が見られる。いずれも粗粒輝石安山岩製。

固定臼(86・87) 検出当初は性格不明であった。上記搗臼に被せて使用するものとも考えられるがここでは固定臼という名称で報告する。平面形はほぼ方形に近い長方形を呈し、真ん中に円形の穴を設けている。厚みは14cm程で上面より下面に向かってテーパが付けられている。上面および円孔内は平滑に仕上げているが、側面および下面は基本的には荒削加工である。ただし下面の円孔周りの幅4cmほどは平滑に仕上げている。いずれも粗粒輝石安山岩製。



第9図 石臼計測位置図

b) 基礎石 (88)

1点のみの出土である。一括出土であるため確定的ではないが、土蔵上段基礎の息抜きと考えられる。長方形を呈し、全面を小叩き仕上げしている。中央に9.5cm×5.0cmの長方形の通風口が設けられている。粗粒輝石安山岩製。

5) その他の遺物 (図版23・36)

近世以前の遺物として縄文土器片が2点検出されている。

a) 縄文土器 (89・90)

89は土蔵跡の下段基礎内に並んで検出されたP4から出土している。胎土に繊維を含んでおり、外面には半截状工具による肋骨文、その下にループ文が施されている。縄文時代前期前葉関山式土器である。90は調査区南壁沿いに設定したサブトレからの出土である。深鉢の素口縁で後期～晩期に帰属するものと考えられる。



第V章 自然科学分析

1. 小林家屋敷跡の土層とテフラ

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

群馬県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間、草津白根、白根など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山碎屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

調査分析の対象となった地点は、溝状遺構（*2号礎石建物内の固定白設置土坑）および調査区西壁（*土蔵跡）の2地点である。

2. 土層層序（第10・11図）

(1) 溝状遺構（*2号礎石建物内の固定白設置土坑）

溝状遺構（*2号礎石建物内の固定白設置土坑）は、浅間火山1783（天明3）年の噴火に伴って発生した天明泥流堆積物により埋没している。基本的に天明泥流堆積物は一層からなるが、含まれる粒子の特徴や色調などから、複数の土層に細分することも可能である（第9図）。細分された土層は、下位より色調が暗く暗褐色を呈する部分（層厚9cm、礫の最大径27mm）、黄褐色土粒子混じりで褐色を呈する部分（層厚8cm、礫の最大径38mm）、褐色を呈する部分（層厚13cm、礫の最大径79mm）、黄褐色土粒子を多く含む褐色を呈する部分（層厚14cm、礫の最大径58mm）、砂質で褐色を呈する部分（層厚109cm、礫の最大径188mm）からなる。

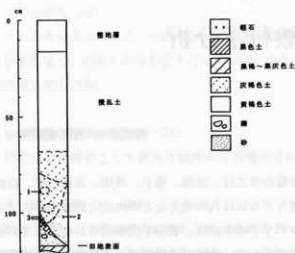
(2) 調査区西壁（土蔵跡）

調査区西壁では、黒褐色土（層厚2cm以上）の上位に、下位より褐色泥流堆積物（層厚10cm以上）、黒色土（層厚4cm）、白色軽石に富む黒灰色土（層厚2cm、軽石の最大径3mm）、黄色軽石を含む黄褐色砂質土（層厚33cm、軽石の最大径2mm）、黄褐色土ブロック混じり灰褐色土（層厚31cm）、灰褐色土（層厚16cm）、攪乱土（層厚52cm）、整地層（層厚16cm）が認められる。これらのうち、黄色軽石を含む黄褐色砂質土、黄褐色土ブロック混じり灰褐色土、灰褐色土についても、褐色泥流堆積物の一部と考えられている。また黒灰色土中に含まれる白色軽石は、岩相から1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A、荒牧1968、新井1979）に由来すると考えられる。

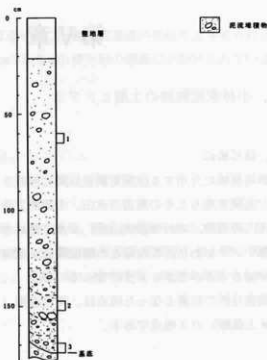
3. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

試料に含まれるテフラと指標テフラとの同定を行うために、調査区西壁において採取された2試料について日本列島のテフラ・カタログ（町田・新井1992）作成に利用された温度一定型屈折率測定法（新



第10図 調査区西壁の土層柱状図 (S = 1/20)
数字はテフラ分析の試料番号



第11図 溝状遺構の土層柱状図 (S = 1/20)
数字はトイレ遺構分析の試料番号

井 1972, 1993) により、テフラ粒子の屈折率測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を第5表に示す。調査区西壁の試料2に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) は、1.502-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.707-1.711である。また、調査区西壁の試料1に含まれる火山ガラスの屈折率 (n) も、1.502-1.505である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石の屈折率 (γ) は、1.707-1.711である。

4. 考察

調査区西壁の試料2および試料1に含まれるテフラは、重鉱物の組合せや火山ガラスおよび斜方輝石の屈折率などから、約1.3~1.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石(As-YP, 新井1962)の一部と考えられている浅間草津黄色軽石(As-YPk, 町田・新井 1992)に由来すると考えられる。

5. 小結

小林家屋敷跡において、地質調査と屈折率測定を行った。その結果、浅間草津黄色軽石(As-YPk, 約1.3~1.4万年前*1)に由来するテフラ粒子を検出することができた。

*1 放射性炭素 (^{14}C) 年代

(*) 筆者注釈

文献

- 新井房夫 (1962) 関東盆地北西部地域の第四紀編年, 群馬大学紀要自然科学編, 10, p.1-79.
新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究, 第四紀研究, 11, p.254-269.
新井房夫 (1979) 関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層, 考古学ジャーナル, no.53, p.41-52.
新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法, 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
荒牧重雄 (1968) 浅間火山の地質, 地研専報, no.45, 65p.
町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス, 東京大学出版会, 276p.
早田 勉 (1991) 浅間火山の生い立ち, 佐久考古通信, no.53, p.2-7.
早田 勉 (1995) テフラからさぐる浅間山の活動史, 御代田町誌自然編, p.22-43.
早田 勉 (1996) 関東地方—東北地方南部の示標テフラの諸特徴—とくに御代第1テフラより上位のテフラについて—, 名古屋大学加速器質量分析計業績報告書, 7, p.256-267.

第5表 屈折率測定結果

地 点	試料	火山ガラス(n)	重鉱物	斜方輝石(γ)
調査区西壁	1	1.502-1.505	opx > cpx	1.707-1.711
調査区西壁	2	1.502-1.505	opx > cpx	1.707-1.711

屈折率の測定は, 温度一定型屈折率測定法 (新井 1972, 1993) による, opx: 斜方輝石, cpx: 単斜輝石.

2. トイレ遺構分析

株式会社 古環境研究所

1. はじめに

トイレ遺構等の糞便の堆積物は、寄生虫卵密度、花粉群集組成、種実群集組成の特徴などから識別が可能であり、遺体群集から食物の種類を探ることも可能である。

2. 試料 (第9図)

試料は、浅間天明泥流により埋没した屋敷跡の置石土壌 (* 2号礎石建物内の固定白設置土坑) 覆土から採取された1点、置石 (* 固定白) につながる溝状遺構から採取された3点の計4点である。

3. 寄生虫卵分析

(1) 原理

人や動物などに寄生する寄生虫の卵殻は、花粉と同様の条件下で堆積物中に残存しており、人の居住域では寄生虫卵による汚染度が高くなる。また、寄生虫卵分析を用いてトイレ遺構や人糞施肥の確認が可能であり、寄生虫特有の生活史や感染経路から、摂取された食物の種類やそこに生息していた動物種を推定することも可能である (金原 1999)。

(2) 方法

微化石分析法を基本に、以下のように行った。

- 1) サンプルを採量
- 2) 脱イオン水を加えて攪拌
- 3) 篩別および沈澱法により大きな砂粒や木片等を除去

- 4) 25%フッ化水素酸を加えて30分静置(2~3度混和)
- 5) 遠心分離(1500rpm、2分間)による水洗の後にサンプルを2分割
- 6) 片方にアセトリシス処理を施す
- 7) 両方のサンプルを染色後、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 8) 検鏡・計数

(3) 結果

分析の結果、寄生虫卵はいずれの試料からも検出されなかった。また、明らかな消化残渣も検出されなかった。

4. 花粉分析

(1) 原理

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象として比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

(2) 方法

花粉粒の分離抽出は、中村(1973)の方法をもとに、以下の手順で行った。

- 1) 5%水酸化カリウム溶液を加えて15分間湯煎
- 2) 水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
- 3) 25%フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
- 4) 水洗処理の後、水酢酸によって脱水してアセトリシス処理を施す
- 5) 再び水酢酸を加えて水洗処理
- 6) 沈澱に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300~1000倍で行った。花粉の同定は、島倉(1973)および中村(1980)をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン(-)で結んで示した。

(3) 結果

1) 分類群

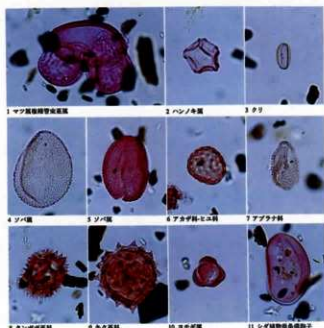
出現した分類群は、樹木花粉8、樹木花粉と草本花粉を含むもの1、草本花粉8、シダ植物孢子1形態の計18である。分析結果を第6表に示す。

〔樹木花粉〕

マツ属複雑管束亜属、サワグルミ、ハンノキ属、クマシデ属-アサダ、クリ、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、トチノキ

第6表 小林家屋敷跡における花粉・寄生虫卵分析結果

分 類	群	置石土壌		溝状遺構		
		1	1	2	3	
学 名	和 名					
Arboreal pollen	樹木花粉					
<i>Pinus subgen. Diploxylon</i>	マツ属複雑管束亜属					1
<i>Pterocarya rhoifolia</i>	サワグルミ		1			
<i>Alnus</i>	ハンノキ属					1
<i>Carpinus-Ostrya japonica</i>	クマシデ属-アサダ	1	1			
<i>Castanea crenata</i>	クリ	4			2	5
<i>Quercus subgen. Lepidobalanus</i>	コナラ属コナラ亜属	2	5	3		1
<i>Quercus subgen. Cyclobalanopsis</i>	コナラ属アカガシ亜属		1			
<i>Aesculus turbinata</i>	トチノキ	1		1		
Arboreal-Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉					
Araliaceae	ウコギ科		2			
Nonarboreal pollen	草本花粉					
Gramineae	イネ科	2	3	1		3
Cyperaceae	カヤツリグサ科	1		1		
<i>Fagopyrum</i>	ソバ属	1				2
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科-ヒユ科		8			3
Cruciferae	アブラナ科					1
Lactucoideae	タンポポ属科	1	3	1		11
Asterioideae	キク亜科	1	3			1
<i>Artemisia</i>	ヨモギ属	5	6			5
Fern spore	シダ植物胞子					
Monolate type spore	単条溝胞子	1	1	2		6
Arboreal pollen	樹木花粉	8	8	6		8
Arboreal-Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	2	0		0
Nonarboreal pollen	草本花粉	11	23	3		26
Total pollen	花粉総数	19	33	9		34
	試料 1 cm ² 中の花粉密度	1.4	2.3	0.7		2.5
		×10 ²	×10 ²	×10 ²		×10 ²
Unknown pollen	未同定花粉	1		1		1
Fern spore	シダ植物胞子	1	1	2		6
Helminth eggs	寄生虫卵	(-)	(-)	(-)		(-)
	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)		(-)



第12図 元素マッピングおよびポイント分析を行った試料

〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕

ウコギ科

〔草本花粉〕

イネ科、カヤツリグサ科、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、アブラナ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属

〔シダ植物孢子〕

単条溝孢子

2) 花粉群集の特徴

各遺構の試料からは、クリ、コナラ属コナラ亜属、イネ科、ソバ属、アカザ科-ヒユ科、タンポポ亜科、キク亜科、ヨモギ属などが検出されたが、いずれも少量である。

5. 種実同定

(1) 原理

植物の種子や果実是比较的強靱なものが多く、堆積物や遺構内に残存している場合がある。堆積物などから種実を検出し、その種類や構成を調べることで、過去の植生や栽培植物を明らかにすることができる。トイレ遺構では、食用時に嚙下した種実により食物の推定が可能となる。

(2) 方法

以下の方法で、種実の抽出と同定を行った。

- 1) 試料200ccに水を加えて泥化
- 2) 攪拌した後、0.25mmの篩で水洗選別
- 3) 双眼実体顕微鏡下で検鏡・計数

同定は形態的特徴および現生標本との対比で行い、結果は同定レベルによって科、属、種の階級で示した。

(3) 結果

分析の結果、種実はいずれの試料からも検出されなかった。

6. 考察

(1) トイレ遺構の可能性について

各遺構の試料からは、寄生虫卵および種実などの糞便堆積物を示唆する遺体が検出されないことから、これらの遺構がトイレ遺構である可能性は考えにくい。ただし、花粉もあまり検出されないことから、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で寄生虫卵、種実、花粉などの有機質遺体が分解された可能性も考えられる。

(2) 周辺の環境について

花粉があまり検出されないことから植生や環境の詳細な推定は困難であるが、各遺構の周囲はイネ科、

タンポポ亜科、キク亜科、アカザ科-ヒユ科などが生育する人里の環境であったと考えられ、ソバなどの栽培も行われていたと推定される。また、周辺地域にはナラ林やクリ林などが分布していたと推定される。

7. まとめ

浅間天明泥流により埋没した屋敷跡の置石土壌（*固定臼内）および置石につながる溝状遺構（*2号礎石建物内の固定臼設置土坑）の試料について分析を行った。その結果、これらの試料からは糞便堆積物を示唆する遺体は検出されず、これらの遺構がトイレ遺構である可能性は認められなかった。ただし、花粉もあまり検出されないことから、乾燥もしくは乾湿を繰り返す堆積環境下で寄生虫卵、種実、花粉などの有機質遺体が分解された可能性も考えられる。

各遺構の周囲は、イネ科、タンポポ亜科、キク亜科、アカザ科-ヒユ科などが生育する人里の環境であったと考えられ、ソバなどの栽培も行われていたと推定される。また、周辺地域にはナラ林やクリ林などが分布していたと推定される。

(*) 筆者注釈

文献

Peter J. Warnock and Karl J. Reinhard (1992) Methods for Extraxting Pollen and Parasite Eggs from Latrine Soils. *Journal of Archaeological Science*, 19, p.231-245.

金原正明・金原正子 (1992) 花粉分析および寄生虫。藤原京跡の便所遺構—藤原京7条1坊一。奈良国立文化財研究所, p.14-15.

金子清俊・谷口博一 (1987) 線形動物・扇形動物。医動物学, 新版臨床検査講座, 8, 医歯薬出版, p.9-55.

金原正明 (1999) 寄生虫。考古学と動物学, 考古学と自然科学, 2, 同成社, p.151-158.

中村 純 (1973) 花粉分析。古今書院, p.82-110.

金原正明 (1993) 花粉分析法による古環境復原。新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法, 角川書店, p.248-262.

島倉巳三郎 (1973) 日本植物の花粉形態。大阪市立自然科学博物館収蔵目録第5巻, 60p.

中村 純 (1980) 日本産花粉の標識。大阪自然史博物館収蔵目録第13巻, 91p.

3. 小林家屋敷跡出土木製品・炭化材の樹種同定

植田弥生 (バレオ・ラボ)

1. はじめに

ここでは、天明3 (1783) 年の浅間山大噴火に伴う泥流に押し流された、小林助右衛門の屋敷跡と推定される遺跡から出土した木製品の破片や炭化材、合計36点の樹種同定結果を報告する。

江戸時代の木製品樹種は、都市の遺跡出土品において樹種利用の情報が蓄積されつつあるが、地方ではどのような状況であったかは、比較する資料は少ない。出土した木製品や炭化材の樹種を明らかにする調査は、小林家屋敷における樹種利用 (木材利用) を明らかにする事のほかに、江戸時代の都市と地方の木材利用の関連性を今後知る上で、有意義な情報蓄積となる。

2. 試料

発掘区からは、泥流に押し流された石垣、土倉、屋敷関連の建物などが検出され、その周囲から採取された試料である。木製品は破損品がほとんどであるが、加工痕や形状などから建築部材や調度品などが多いと思われる。泥流に押し流されているため、出土遺構と試料との関連性は明確ではない。

採取された試料には、試料番号1～29を記した。同一地点から複数が採取されていた試料には、枝番号を記した。

なお、試料番号17は欠番であり、試料番号5は土塊であった。

3. 方法

木製品は、材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）を見定めて、剃刀を用い各方向の薄い切片を剥ぎ取った。材は乾燥しており、そのまま封入すると気泡が多く観察しづらいので、1週間ほど水漬けで放置し、充分に水が材に浸透した後に、スライドガラスに並べ、ガムクロラルで封入し、永久プレパラート（材組織標本）を作成した。この材組織標本を、光学顕微鏡で40～400倍に拡大し観察した。材組織標本は、パレオ・ラボに保管されている。

炭化材は、取上げられていた試料から形状や大きさの異なる炭化材を選び、樹種同定試料とした。まず炭化材の横断面（木口）を手で割り実体顕微鏡で予察し、次に材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を作成し、走査電子顕微鏡で拡大された材組織を観察した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5mm角以下の大きさに整え、直径1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、試料を充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。なお、試料番号9（鉦柄）・試料番号18（板材）・試料番号20（角材）・試料番号29（鎌・柄）の木製品は、鉄分が浸透し固結していた試料や、生焼け状態で炭化していた試料などは薄片法が使えないため、3方向の断面を作成し、走査電子顕微鏡で材組織を観察した。同定した炭化材の残り破片は、長野原町教育委員会に保管されている。

4. 結果

同定結果の一覧を、第7表に示す。

第7表 小林家屋敷跡出土木製品・炭化材の樹種同定結果一覧

試料No.	図版No.	遺物No.	遺構名	注記	種別	器種名	木取り	樹種	備考
1	5, 25	—	石垣	No.1	生材	板材	板目	マツ属接線管束型属	
2	5	—	石垣	No.5	生材	板材片	板目	アカマツ	
3	5	—	石垣	No.7	生材	丸木材?	丸木?	アカマツ	
4	3	—	土蔵 北側	No.1	生材	不明	板目	トウヒ属	
5	—	—	1号礎石建物	一括	土塊				
6	3	—	土蔵内	一括	炭化材	不明		コナラ属	
7	13, 32	34	1号礎石建物	一括	生材	不明木製品	板目	ヒノキ	漆割板巻き 繊維質付着
8	12, 31	21	1号礎石建物	一括	生材	不明木製品	板目	トウヒ属	表面赤色 針状穿孔4箇所
9	16, 33	52	1号礎石建物	一括	生材	鉦柄		カエデ属	鉄分が多く付着
10-1	—	—	1号礎石建物西側	一括	炭化材	不明		コナラ属	
10-2	—	—	1号礎石建物西側	一括	炭化材	不明		マツ属接線管束型属	
11-1	3	—	1号礎石建物南側	一括	炭化材	不明		コナラ属	
11-2	3	—	1号礎石建物南側	一括	炭化材	不明		クリ	
12	3	—	1号礎石建物西側	一括	炭化材	不明		コナラ属	炭化
13	—	—	1号礎石建物	一括	生材	不明木製品		ヒノキ	表面赤色?
14	15, 32	40	1号礎石建物	一括	生材	加工をもつ材	加工利用?	アカマツ	加工痕あり
15	12, 31	13	1号礎石建物	一括	生材	曲物	板目	ヒノキ	表面赤色
16	13, 32	31	1号礎石建物	一括	生材	板状木製品部材	斜め取り	ケヤキ	削痕・削留め具
17	—	—	欠番						
18	3	—	2号礎石建物東側	No.2	生材	板材	板目	マツ属接線管束型属	鉄分が多く付着

試料No	DBSN	遺物No	遺 標 名	注記	種別	器 種 名	木取り	樹 種	備 考
19	3, 14, 32	35	2号礎石建物東側	No 4	生材	板材(建築部材)	板目	ケヤキ	全長12cm, 7×3cm
20	3, 14, 32	36	2号礎石建物東側	No 5	炭化材	角材(建築部材)	芯持ち角材	ヒノキ属	全長20cm, 8×5cm, 一部生焼け
21	15, 32	38	2号礎石建物東側3トレ付近	一括	生材	板材(建築部材)	板目	トウヒ属	すべて割れ面のため未計測
22	14, 32	37	2号礎石建物東側	一括	生材	板材(建築部材)	板目	クリ	全長約90cm, 5×1.5cm
23	3, 12, 31	12	1号礎石建物	7 (No 1)	生材	木製品片	観察不可	ヒノキ	
24-1	3, 13, 32	26	1号礎石建物	7 (No 2)	生材	曲物か	板目?	ヒノキ	
24-2	3, 12, 31	9	1号礎石建物	7 (No 2)	生材	加工を持つ破片	板目	ヒノキ	表面赤色
24-3	3, 12, 31	16	1号礎石建物	7 (No 2)	生材	加工を持つ破片	斜め取り	ヒノキ	
25	3, 12, 31	18	1号礎石建物	9	生材	木製品片	観察不可	ヒノキ	表面赤色 破片
26-1	3, 12, 31	11	1号礎石建物	10	生材	木製品片	板目	ヒノキ	表面赤色 角形穿孔あり
26-2	3, 15, 32	39	1号礎石建物	10	生材	加工を持つ部材	丸木利用?	アカマツ	
26-3	3, 13, 32	25	1号礎石建物	10	生材	木製品片	板目	アカマツ	
27-1	3, 12, 31	10	1号礎石建物	11	生材	木製品片	板目	イチョウ	銅張り・銅留め具
27-2	3, 13, 32	23	1号礎石建物	11	生材	木製品片	板目	モクレン属	銅張り
28	3, 12, 31	20	1号礎石建物	13	生材	木製品片	観察不可	ヒノキ	銅板付属 表面赤色
29	2, 16, 33	51	1号礎石建物	14	生材	鏝?柄	未観察	クリ?	鉄分が多く付着

礎石建物から出土した炭化材6点は、コナラ節(4点)・クリ(1点)・マツ属複雑管束亜属(1点)であった。この3分類群は、近世の燃料材としてよく知られている分類群であり、囲炉裏(カマド)から出土した試料もあることから、燃料材であった可能性が高いと思われる。

鉦柄はカエダ属、鎌?柄はクリ?であり、いずれも柄として利用される樹種が使われていた。そのほかの建築部材?・板材・木製品片・加工を持つ破片などからは、ヒノキ(10点)・ヒノキ属(1点)・アカマツ(5点)・トウヒ属(3点)・マツ属複雑管束亜属(2点)・イチョウ(1点)、ケヤキ(2点)・クリ(1点)・モクレン属(1点)が検出された。ヒノキが最も多い。板材・板状には、アカマツ・ケヤキ・ヒノキ・マツ属複雑管束亜属が利用されている。銅張りや留め具のある製品には、イチョウ・ケヤキ・ヒノキ・モクレン属の樹種が検出された。

以下に同定根拠とした材組織の特徴を記載し、材の3方向の組織写真を提示した。

イチョウ *Gingo biloba* L. イチョウ科 第13図 1 a-1 c (試料番号27-1)

主に仮道管・放射組織かなる針葉樹材。ほかの針葉樹材に比べ、横断面において仮道管の径や配列は不揃いである。放射柔細胞の細胞壁は薄壁で、放射組織の細胞高は5細胞以下の低いものが多い。丸く大きく膨らんだ異形細胞が上下に連続してある。

イチョウは、中国原産で暖帯から温帯下部に生育する落葉高木である。現在は日本全土で植栽されており、室町時代には栽培されていたそうである。

トウヒ属 *Picea* マツ科 第13図 2 a-2 c (試料番号8)

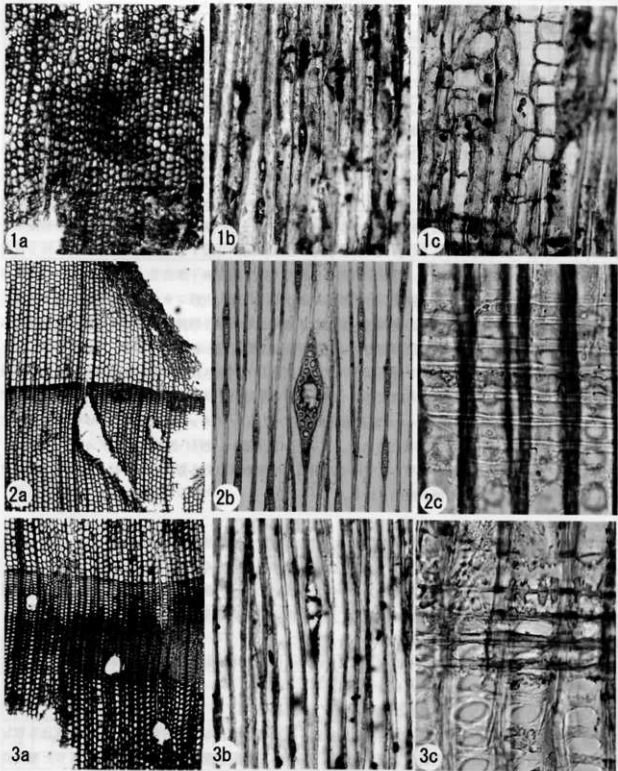
垂直と水平の樹脂道があり、仮道管・放射柔細胞・放射仮道管からなる針葉樹材。分野壁孔はトウヒ型で1分野に普通2個ある。放射仮道管が1層以上あり、放射仮道管内壁に有縁壁孔対はトウヒ型で有縁壁孔対の先端は角張ったものが多く、壁内にも突起状の肥厚が目立つ。

トウヒ属は、温帯から温帯上部の山中に生育する常緑高木である。ハリモミ、トウヒ、ヒメバラモミなど5種がある。

アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc. マツ科 第13図 3 a-3 c (試料番号26-3)

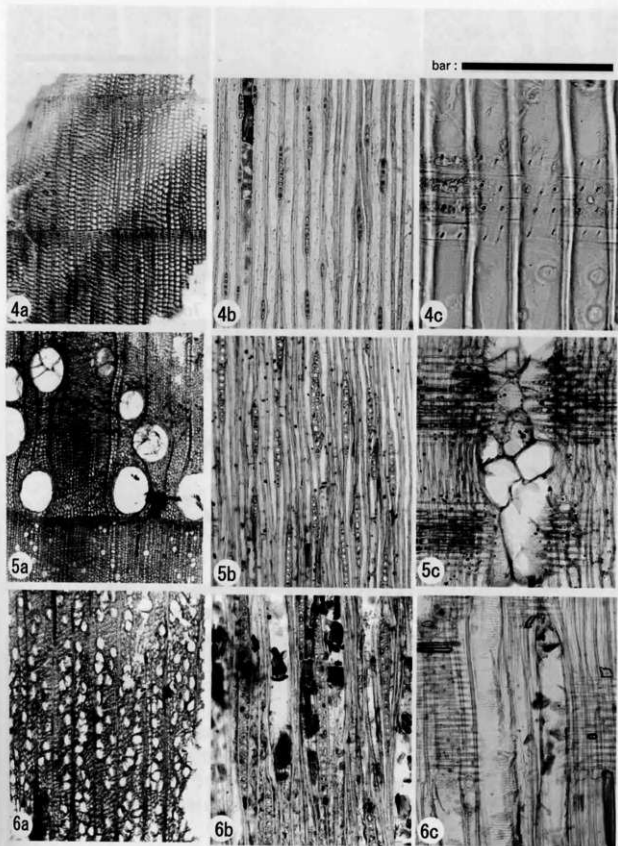
垂直と水平の樹脂道があり、早材から晩材への移行はゆるやかな針葉樹材。分野壁孔は窓状、放射仮

bar : 



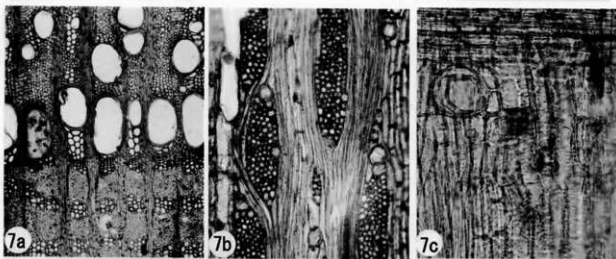
1 a-1 c : イチョウ (試料番号27-1) 2 a-2 c : ツヒ属 (試料番号8) 3 a-3 c : アカマツ (試料番号26-3)
a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面 bar : a = 1mm, b・1c = 0.4mm, 2c・3c = 0.1mm

第13図 出土木製品材組織の光学顕微鏡写真1



4 a-4 c: ヒノキ(試料番号15) 5 a-5 c: クリ(試料番号22) 6 a-6 c: モクレン属(試料番号27-2)
 a: 横断面 b: 接線断面 c: 放射断面 bar: a=1mm, b・5c=0.4mm, 4c=0.1mm, 6c=0.2mm

第14図 出土木製品材組織の光学顕微鏡写真2



7 a - 7 c : ケヤキ (試料番号19) a : 横断面 b : 接線断面 c : 放射断面 bar : a = 1 mm, b = 0.2 mm

第15図 出土木製品材組織の光学顕微鏡写真 4

道管がありその内壁は先の鋭く尖った鋸歯状肥厚が顕著である。

アカマツは暖帯から温帯下部の乾燥地や開けた明るい場所や人間活動地の周辺に多く生育する。

マツ属複維管束亜属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 第16図 8 c (試料番号10-2) 9 c (試料番号18)

前述のアカマツと同様な材組織である。放射仮道管内壁に肥厚は認められるが、炭化材であり内腔に張り出した肥厚の形状は不明瞭なため、亜属の同定レベルに留めた。

なおマツ属複維管束亜属は、放射仮道管内壁の肥厚の形状により、アカマツは鋭利な鋸歯状をなすことで、クロマツは比較的ゆるやかな鋸歯状をなすことで、2種を識別される。

ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endl. 第14図 4 a - 4 c (試料番号15)

仮道管・放射柔細胞・樹脂細胞からなる針葉樹材。晩材の量は少ない。分野壁孔は孔口がやや斜めに細く開いたヒノキ型、1分野に主に2個が水平に配列する。

ヒノキは本州の福島県以南・四国・九州のやや乾燥した尾根や岩上に生育し、材は耐久性・切削性・割裂性にすぐれ、建築材・曲物などによく使われる。

ヒノキ属 *Chamaecyparis* ヒノキ科 第16図 10 c (試料番号20)

前述のヒノキと同様な材組織である。炭化材であり、分野壁孔の開孔の開き加減が不安定であるため、ヒノキまたはヒノキより大きく開孔するサワラとの識別が困難であり、属レベルの同定に留めた。

ヒノキ属にはヒノキとサワラが属し、サワラはヒノキより分布域は狭く東北部から中部地方の沢沿いの岩上に生育する。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 *Quercus subgen. Quercus* sect. *Prinus* ブナ科 第16図 11 a - 11 c (試料番号10-1)

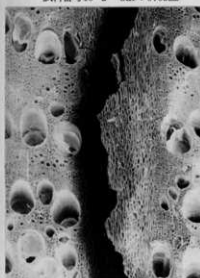
年輪の始めに中型の管孔が配列し、晩材部では薄壁・角形の小型管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと広放射組織がある。



8 c マツ属複維管束亜属(放射断面)
試料番号10-2 bar:0.05mm

9 c マツ属複維管束亜属(放射断面)
試料番号18 bar:0.05mm

10 c ヒノキ(放射断面)
試料番号20 bar:0.05mm



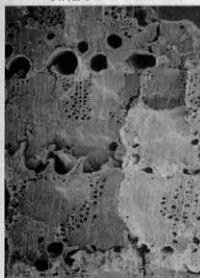
11 a コナラ節(横断面)
試料番号10-1 bar:0.5mm



11 b コナラ節(接線断面)
試料番号10-1 bar:0.5mm



11 c コナラ節(放射断面)
試料番号10-1 bar:0.1mm



12 a クリ(横断面)
試料番号11 bar:0.5mm



13a-1 クリ?(横断面)
試料番号29 bar:0.5mm

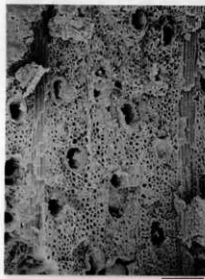


13a-2 クリ?

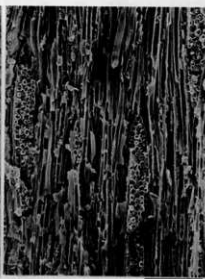


15c-1 カエデ属(放射断面)
試料番号9 bar:0.1mm

第16図 出土炭化材材組織の走査顕微鏡写真1



15a カエデ属(横断面)
試料番号9 bar:0.5mm



15b カエデ属(接線断面)
試料番号9 bar:0.1mm



15c-2 カエデ属(放射断面)
試料番号9 bar:0.1mm

第17図 出土炭化材材組織の走査顕微鏡写真2

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 第14図 5a-5c (試料番号22) 第16図 12a (試料番号11) 13a-1・13a-2 (試料番号29)

年輪の始めに中型～大型の管孔が配列し、晩材では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単穿孔、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性である。

試料番号29鎌?柄は、鉄分が染みおり観察可能な材部が狭いため、広放射組織を持つコナラ節である可能性もあるので、クリ?とした。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

モクレン属 *Magnolia* モクレン属 第14図 6a-6c (試料番号27-2)

小型の管孔が単独または2～数個が複合して均一に分布する散孔材。道管の壁孔は階段状、穿孔は主に単一であるが階段穿孔も見られる。放射組織は異性、主に2細胞幅、上下端に方形細胞があり、道管との壁孔は大きく階段状または対列状に整然と配列している。

モクレン属は暖帯または温帯に分布する落葉性の高木または小高木で、コブシ・ホオノキなどがある。

ケヤキ *Zelkova serrata* (Thunb.) Makino ニレ科 第15図 7a-7c (試料番号19)

年輪の始めに大型の管孔が1～2層配列し、その後は小型の管孔が多数集合して接線状・斜状に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単穿孔、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～8細胞幅の紡錘形、上下端や縁に大型の結晶細胞があり、道管との壁孔は交互状である。

ケヤキは暖帯下部から温帯の山中や川岸に生育する落葉高木である。

カエデ属 *Acer* カエデ科 第16図 15c-1 (試料番号9) 第17図 15a-15c-2 (試料番号9)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して散在しており、観察可能な面積が狭いが散孔材のようである。道管の穿孔は単穿孔、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～4細胞幅、道管との壁孔は交互状で整然と配列している。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹で、約26種と

多くの変種が知られている。

5. まとめ

礎石建物付近から採取された炭化材は燃料材の可能性が推測され、その樹種はコナラ節(4点)・クリ(1点)・マツ属複雑管束亜属(1点)であった。

鉈柄はカエデ属、鎌?柄はクリ?であり、いずれも柄として利用される樹種が使われていた。そのほかの建築部材?・板材・木製品片・加工を持つ破片などからは、ヒノキ・ヒノキ属が最も多く、アカマツ・トウヒ属・マツ属複雑管束亜属・ケヤキ・クリ・イチヨウ・モクレン属が検出された。ヒノキをはじめとする針葉樹材が多く、近世江戸の木材樹種利用(松葉, 1999)と共通性が見られた。また、報告事例が少ない、イチヨウが検出された事が特筆される。能城(1999)によると、池子遺跡群No.5地点(神奈川県)から差歯下駄の歯2点と飯田町遺跡(東京都)からブラシ様木製品1点が知られている。地方においても、イチヨウの材を使用した木製品が流通していたことを知る事ができた。

引用文献

- 松葉礼子(1999) 瀬池遺跡・汐留遺跡・墨田区三遺跡から出土した木製品の樹種から類推される近世江戸城周辺の木材消費, 59-70, 植生史研究, 第7巻, 第2号。
能城修一・鈴木三男・高橋 敦(1999) 近世江戸のイチヨウの木製品, 81-83, 植生史研究, 第7巻, 第2号。

4. 金属遺物の分析

藤根 久(パレオ・ラボ)

1. はじめに

小林家屋敷跡の調査では、漆碗塗膜片や鍍金金属片あるいは調度品と思われる加工木片が出土した。ここでは、これら金属遺物の成分を調べるために蛍光X線分析を行った。なお、漆碗塗膜片については赤外分光分析を行い漆塗膜の確認を行った。

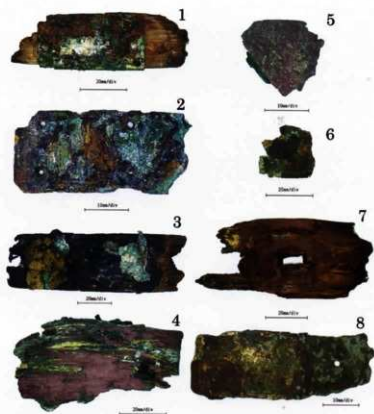
2. 試料と方法

試料は、第18図に示す金属片など8試料である。これらは、洗浄等の前処理を行わず非破壊で分析した。なお、ここで用いた試料Noは第7表と共通番号である。

最初に、主要な元素の平面分布を調べるために蛍光X線分析計を用いて元素マッピング測定を行った。主な元素は、アルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、鉄(Fe)、銅(Cu)、亜鉛(Zn)、金(Au)、鉛(Pb)である。さらに、元素マッピング像のうちもっとも輝度の高い位置についてポイント測定を行った。

測定は、鞆堀場製作所製 XGT-5000Type II を用いた。元素マッピングは、X線導管径10 μ m、電圧50KV、測定時間10000秒である。また、ポイント測定は、測定時間200~500sec、X線導管径100 μ m、電圧50KV、電流0.06~1.00mAである。定量計算は、標準試料を用いないFP法(ファンダメンタルパラメータ法)で半定量分析を行った。

なお、No30の漆碗塗膜については赤外線分光分析を行った。試料は、塗膜表面部分からカッターなどを用いて少量を剝離し、臭化カリウム片(KBr)に挟んで8トンで加圧プレスした。測定は、日本分光



1. 試料No.7 2. 試料No.8 3. 試料No.16 4. 試料No.24-1 5. 試料No.30
6. 試料No.24-4 7. 試料No.26-1 8. 試料No.13

第18図 元素マッピングおよびポイント分析を行った試料

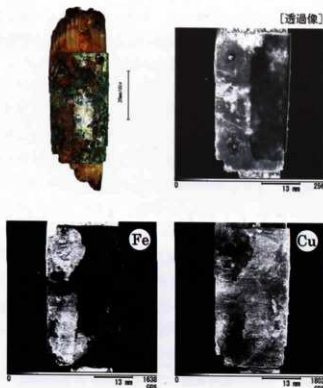
佛製、顕微フーリエ変換赤外分光分析計 (FT/IR-410, IRT-30型) を用いて測定した。

3. 結果

以下に試料ごとに分析結果について述べる。

【試料No.7】

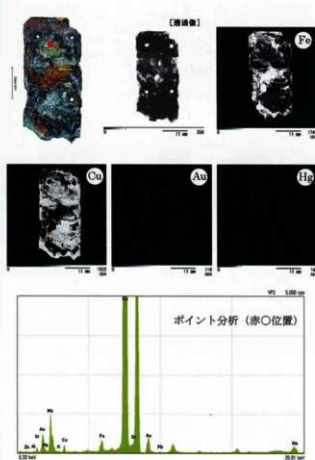
元素マッピング測定の結果、鉄 Fe と銅 Cu の輝度の高いマッピング像が得られた。鉄の輝度が高い部分はマッピング像の右側に集中するが、銅のマッピング像においてビス金具に相当する部分において輝度が低いことから、銅製の留め具を鉄製のビスで固定していることが理解できる (第19図)。



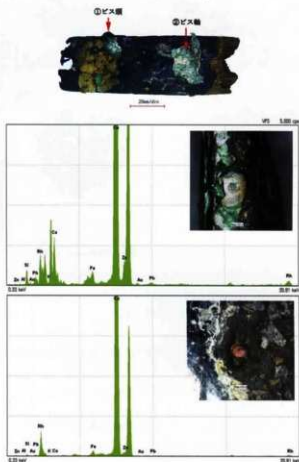
第19図 試料No.7の透過像と元素マッピング測定結果

【試料No.8】

試料は、肉眼的に確認できる金張りの金属片である。元素マッピングでは、鉄や銅のほか金 Au と水銀 Hg が検出された（第20図）。なお、ポイント分析では、金が最大約3.16%検出された（第8表）。こうしたことから、銅製の金具に金のアマルガムを用いて鍍金したことが理解される。



第20図 試料No.8の透過像と元素マッピングおよびポイント分析結果



第21図 試料No.16のポイント分析結果

【試料No.16】

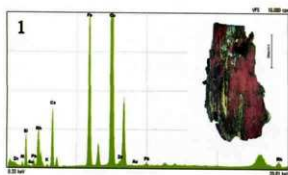
測定は、ビスの頭と軸部分について蛍光X線分析を行った。ビス頭の分析では、金張りが確認されるもののポイント分析では金含有量は高くなく、銅が約84.91%検出された。また、ビスの軸のポイント分析では、銅が約96.57%含まれていたことから銅製のビスである（第21図、第8表）。

【試料No.24-1】

赤色部分のポイント分析では銅やケイ素あるいは鉄やカルシウムの含有量が高い（第22図-1）。木質であるためケイ素やカルシウムなどは周辺土壌などから吸着したことが考えられる。

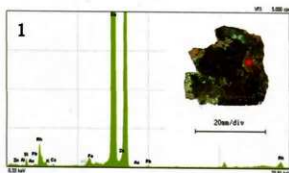
【試料No.30】

赤色部分のポイント分析では、鉄が約72.41%検出された（第22図-2、第8表）。また、顕微赤外分光分析により生漆と同様の赤外線吸収スペクトルが得られたことから漆と同定された（第25図）。



第22図 遺物表面のポイント分析結果 1

1. 試料No.24-1 (上)
2. 試料No.30 (下)



第23図 遺物表面のポイント分析結果 2

1. 試料No.24-4 (上)
2. 試料No.26-1 (下)

このことから、酸化鉄からなる赤色顔料を混ぜた赤漆である。

[試料No.24-4]

赤色部分のポイント分析では、銅が約90.40%検出された(第23図-1、第8表)。この赤色部分は銅製金属の地が露出した部分である。

[試料No.26-1]

赤色部分のポイント分析では銅やケイ素あるいは鉄やカルシウムの含有量が高い(第23図-2)。試料No.24-1と同様木質であるためケイ素やカルシウムなどは周辺土壌などから吸着したことが考えられる。

[試料No.28]

元素マッピング測定の結果、鉄 Fe と銅 Cu の輝度の高いマッピング像が得られた。全体的には銅の輝度が高く、金も検出されている(第24図)。

金の輝度の高い部分のポイント分析では、金が約4.87%検出されている(第8表)。

4. おわりに

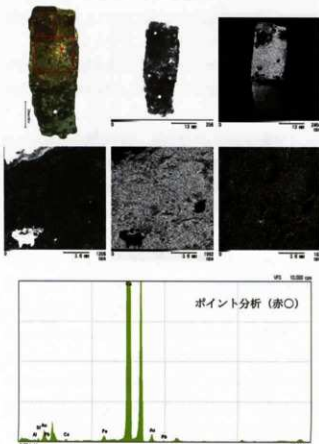
ここで検討した金属片は、主に銅製品であるが金のアマルガムを用いて鍍金した金具も検出された。

また、漆碗の塗膜は、酸化鉄からなる赤色顔料を混ぜた赤漆であった。なお、赤色を呈する木材片は、銅やケイ素など周辺の影響を受けているが鉄の赤色と推定された。

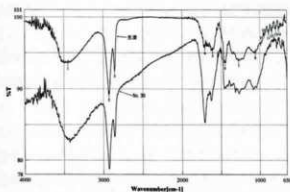
第8表 出土遺物の蛍光X線分析による化学組成

(単位: %)

試料No	回数No	遺物No	遺物	部位	Al	Si	K	Ca	Fe	Cu	Zn	Au	Pb	合計	備考
7	13, 25, 32	34	木製品片(銅板新留)		—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	マッピング分析
8	15, 25, 33	47	金銅飾り金具片	鍍金部	0.15	3.53	0.00	0.21	1.17	91.39	0.00	3.16	0.29	100.00	マッピング分析
				ビス頭	1.54	8.70	0.00	3.58	0.25	84.91	0.37	0.03	0.62	100.00	
16	13, 32	31	板状木製品片(銅板新留)	ビス軸	1.29	1.55	0.03	0.06	0.15	96.57	0.12	0.09	0.04	100.00	
24-1	13, 32	26	加工をもつ破片	赤色部	9.70	28.72	0.53	12.66	10.81	36.39	0.25	0.07	0.86	99.99	
30	3, 25	—	漆機塗膜	赤色部	3.28	17.12	0.46	5.91	72.41	0.27	0.43	0.12	0.00	100.00	赤外分光分析
24-4	—	—	銅板(飾り金具)片	赤色部	1.42	3.69	0.02	0.11	0.02	94.40	0.00	0.01	0.33	100.00	
26-1	12, 31	11	木製品片(ほぞ穴)	赤色部	5.19	15.78	0.30	6.88	12.75	57.37	0.00	0.05	1.69	100.01	
28	15, 25, 33	48	金銅飾り金具片	鍍金部	1.69	2.98	0.11	0.61	0.16	90.26	0.00	4.87	0.22	100.00	マッピング分析



第24図 試料No.28の透過像と元素マッピングおよびポイント分析結果



ピーク検出結果		ピーク検出結果		ピーク検出結果	
No.	位置	強度	No.	位置	強度
1:	2944.08	95.5268	7:	2828.28	99.1971
4:	1709.29	95.6882	8:	1810.27	95.3249
7:	1274.65	95.9144	9:	1027.76	95.0624
10:	945.08	97.4738	11:	887.09	97.8304
13:	792.00	98.3281	14:	755.06	98.3441

第25図 No.30の赤外線吸収スペクトル図

《要 約》

1. 小林家屋敷跡は群馬県吾妻郡長野原町大字長野原字坪井コ1489,1490ほかに所在する。遺跡は長野原町の北部、吾妻川流域地域に属し、吾妻川左岸の中段段丘に立地しており、現在の町立中央小学校・中央幼稚園の敷地内にあたる。吾妻川との比高差は約40m、標高は約635mである。
2. 遺跡の調査は町立中央小学校屋内体育館・プールの建設に伴い、平成14年に長野原町教育委員会が実施した。調査面積は110㎡である。
3. 調査の結果、1783（天明3）年に浅間山の大噴火に伴って発生した泥流によって埋没した屋敷跡の一部が検出された。調査地点では石垣1基、土蔵跡1棟、礎石建物跡2棟が検出された。いずれの遺構も部分検出であった。
4. 石垣は建物群の北側を巡り、2号礎石建物跡の東側で南側に折れていることから、調査地点が屋敷の北東隅にあたることが判断された。検出総長は北壁で18.6m、東壁で3.15m、高さは約1.02mを測る。壁体は比較的形の整った幅50cm～60cm、厚さ20cm～50cmの安山岩自然石を基本的に3段積み上げて壁面を構成しており、所々幅110cm、厚さ80cmの矢穴を遺した巨石割石を配している箇所も見受けられた。積み方は野面積乱積で目地が通っており、自然石と割石を用いて積み、間隙には割石・角礫を詰めている。裏込めは壁面から1m幅で確認され、比較的地盤が軟弱な調査区東側では版築状の堆積も確認されている。
5. 土蔵跡は調査区西端で検出された。規模は東西間口2.06m以上（2間以上）、奥行き5.4m（3間）を測る。基礎は2段構造で、壁は調査区西壁セクションから土壁、屋根は瓦の出土がないことから茅葺きであったと考えられる。下段基礎は大振りな長方形の安山岩切石を用いているのに対して、上段基礎は小振りで正方形に近いものも多用されている。さらに土蔵東辺では北半と南半では明らかに上段基礎石の石質が異なり、使い分けがなされている。基礎石は平ノミ状・チョウナ状工具により小叩き仕上げがなされているが、上段基礎にはさらに上面内側に溝（段）を設けて柱（壁）材・床材を据える所作が施されている。また基礎石の検出状況では、壁面と直結していると考えられる上段基礎が大きく北西方向にずれて検出されていることから泥流の逆流（オーバーフロー）による被災であったことが窺われることは注目に値する。
6. 1号礎石建物跡は土蔵跡の東隣、調査区中央で検出された。規模は東西間口7.6m（4間）、奥行き5.7m以上（3間以上）、柱間は約1.9mを測る。総柱の礎石建物である。土蔵の前面と合わせていると考えれば4間×3間、礎石列上の上のこないP1を建物の中心に据えた床持柱と考えれば4間×4間の建物が想定される。礎石には比較的大振りな安山岩を用いている。石垣北壁西側の壁面に付着していた木材混ロームブロックから壁は土壁、屋根は瓦が検出されていないことから茅葺きの建物であったと考えられる。囲炉裏は建物の北壁東寄りに位置する。白色粘土混山砂を用材とし、方形に礫を配置している。囲炉裏北側にも白色粘土混山砂が広がって分布していることからカマドの可能性も否定できない。また出土遺物のほとんどが本遺構からの出土である。
7. 2号礎石建物跡は1号礎石建物跡の東隣、調査区東側で検出された。規模は間口2.75m（1間半）、奥行き1.9m以上（1間以上）を測る。2連の固定臼を設置した土坑を中心に礎石の配置が見られ、土坑内ではもう1連の固定臼を設置していたと考えられる石組みが確認されている。検出時には不明遺

構として扱い、整理段階では建物東側が御堂入沢の沢筋になっていることから水車の可能性も考えたが確証となる材料は見当たらなかった。農村地帯で見られる突臼（地元ではバツクリという）の作業小屋であった可能性もある。

8. 建物群の主副軸に関しては、土蔵跡と1号礎石建物跡の東西軸が石垣北壁と平行なのに対して、2号礎石建物跡の南北軸が石垣東壁と平行に建てられていることが指摘できる。これは構築時期の違いを示している可能性がある。
9. 出土遺物は石製品を除けば、テンバコ（約54×34×15cm）8箱分である。それらは大きく陶磁器・木製品・金属製品・石製品・その他に大別され、図示し得た遺物は90点である。
10. 陶磁器に関しては、肥前陶磁器、志戸呂陶器、瀬戸・美濃陶器、堺陶器に分類される。そのうち肥前陶器の壺（7）は東日本での出土例が見当たらず、類例として宮崎県宮崎市清武町上の原第2遺跡1号集落付近出土壺（1）を挙げる事ができる。実見していないが、報告書の図面・写真を見る限り本遺跡出土資料と器形・施文手法などの特徴が酷似している。また壺（8）の片口部内面扇形内に「合」の刻印が押印され、見込み部には三角状の掘目が施されており、初期の製品の特徴を示している。
11. 木製品に関しては、遺存度の低いものが多く、製品・部位を特定できるものが少ない。木製品部材と建築部材とに大別し、その中で形状・加工の類似性を重視して細別した。木製品部材のほとんどが銅板（飾り金具）の鋸留め（あるいはその痕跡）が窺われることが特徴的で、仏具関連の調度品部材であることを想起させる。
12. 金属製品に関しては、銅製品と鉄製品に大きく分類される。銅製品は木材に固定されていた銅板状の飾り金具と留め具である鋸とに分けられる。銅板状の飾り金具のうち、鍍金・文様を有する4点（47～50）は、木製品の角隅に釘隠として付けられていたと考えられる。鉄製品は鎌・鉞・釘（鋏）・楔が出土しており、数的な主体は釘が占める。
13. 石製品に関しては、石臼と基礎石（息抜か）が検出されており、石臼は粉挽臼・搗臼・固定臼に分類される。石質はいずれも粗製輝石安山岩である。挽臼は上下2セット出土しており、そのうち81の底面には十字溝が設けてあり、他に類例を見ない。
14. その他の遺構外遺物として、縄文土器片を2点掲載した。いずれも建物構築以前の土層から出土していることからサブトレで包含層の有無を確認したが検出するには至らなかった。
15. 管見の文献によると、今回検出した屋敷跡の一部は、当時の分限者である小林助右衛門正永のものであることが判断された。第III章で触れたように考古学的な見地だけでなく、文献史学的見地からの小林助右衛門へのアプローチを試みた。絵地図など古文書類や筆者の力量に限界があるので難しい面も多かったが、関係文献を調べていくと助右衛門に関する記述がかなり見受けられ、当時の有名人であったことが窺えた。また屋敷景観の記述から、現在の小学校校舎下に母屋、校庭下に酒蔵が遺存している可能性が高いことが分かってきた。最後に本調査報告を叩き台として、今後助右衛門研究がより一層進展することに期待するとともに、協力していただいた方々に感謝を記す次第である。

註

- (1) 宮崎県埋蔵文化財センター 2000『上の原第2遺跡・上の原第1遺跡』
渡辺芳郎 2002『九州地方(3)（鹿児島・宮崎）』【国内出土の肥前陶磁 西日本の流通をさぐる第二分冊】九州近世陶磁学会

その他の参考文献

- 飯塚卓二 2004 『前田遺跡』日本道路公団・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 井汲隆夫 1991 「江戸遺跡検出のやきもの分類（兼凡例）」『四谷三丁目遺跡』別冊 東京都消防庁・新宿区四谷三丁目遺跡調査団
- 江戸遺跡研究会編 2001 『図説江戸考古学研究辞典』柏書房
- 大塚昌彦 1995 「火山災害で埋没した中村遺跡」『江戸遺跡研究会第8回大会 災害と江戸時代』
- 大津老人クラブ文化部 1989～1991 『大津区有古文書研究第1集～第3集』
- 小野和之・須田正久 2003 「上福島中町遺跡」群馬県土木部・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 小平市鈴木遺跡調査会・小平市教育委員会 1980 『鈴木遺跡』
- 坂井 隆・山口逸弘他 1992 『五目牛南組遺跡』建設省・群馬県教育委員会・群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 渋川市教育委員会 1986 『中村遺跡』
- 関 俊明・諸田康成 1999 「天明三年浅間災害に関する地域史的研究—北東地域に降下した浅間A軽石の降下日時の考古学的検証—」『研究紀要』16群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 日本民俗建築学会編 2001 『図説民俗建築大辞典』柏書房
- 高橋幹夫 1994 『江戸の暮らし図鑑 道具で見る江戸時代』芙蓉書房
- 堤 隆 2004 『浅間嶽大焼』浅間縄文ミュージアム
- 東京都埋蔵文化財センター 2003 『汐留遺跡III—旧汐留貨物駅跡地内の調査—』
- 長野原町 2001 『長野原町の古文書』
- 長野原町公民館大津分館 2004 『写真集 大津のあゆみ』
- 山下威信 2001 『本丸北大堀切り跡遺跡』大胡町教育委員会

No.	品名	規格	部材	寸法(長×幅×厚)(mm)	重量(kg)	特 徴 (特許・手法等)	備 考
31	13-32	1号壁工建物用	水取り	(11.0)/3.6/1.5		鋼板品厚材。板化。鋼板取付部。両端下地。ほぞ穴。鋼板面は鍍金。鋼板4箇所取付。	ケヤキ 分析16
32	13-32	1号壁工建物用	鋼の取付	(33.2)/3.9/1.5		鋼板品厚材。板化。鋼板取付部。両端下地。ほぞ穴。鋼板面は鍍金。鋼板7箇所取付。	ケヤキ
33	13-32	1号壁工建物用	鋼の取付	(6.0)/1.7/1.6		鋼板品厚材。板化。鋼板取付部。両端下地。	ケヤキ
34	13-25-32	1号壁工建物用	板目	(8.30)/3.7/1.1		用途不同。板化。鋼板取付部。鋼板に鋼線(縦6×7)付着。鉄線3箇所取付。	ヒノキ 分析7
35	3-14-32	2号壁工建物用	板目	(12.4)/6.2/2.5		板化。加工取付部。	ケヤキ 分析19
36	3-14-32	2号壁工建物用	芯持り角材	(18.0)/7.4/4.9		角材。加工取付部。釘穴3箇所。	ケヤキ 分析20
37	14-32	1号壁工建物用	板目	(82.3)/15.2/1.9		板化。加工取付部。釘穴2箇所。	ヒノキ 分析22
38	15-32	2号壁工建物用	板目	(38.3)/4.2/1.9		板化。加工取付部。釘穴1箇所。	トウヒ 分析21
39	3-15-32	1号壁工建物用	丸木用材	(7.3)/2.5/(1.1)		加工取付部。	アカマツ 分析26-2
40	15-32	1号壁工建物用	丸木用材	(3.4)/—/(7.7)		加工取付部。	アカマツ 分析14

金属製品取付表

No.	品名	規格	部材	寸法(長×幅×厚)(mm)	重量(kg)	特 徴 (特許・手法等)	備 考
41	15-33	1号壁工建物用	鋼製品 鋼	1.2/0.15/0.2	0.1	1字に鋼板。釘穴1箇所。	
42	2-15-33	1号壁工建物用	鋼製品 鋼	(3.4)/1.8/0.1	2.0	1字に鋼板。釘穴1箇所。	
43	2-15-33	1号壁工建物用	鋼製品 鋼	(3.2)/(4.2)/0.1	1.8	花弁を巻いているか若干の膨らみを有する。	
44	2-15-33	1号壁工建物用	鋼製品 鋼	(3.0)/(2.3)/0.1	3.8	折れ。花弁を巻いているか若干の膨らみを有する。	
45	2-15-33	1号壁工建物用	鋼製品 鋼	(7.4)/3.7/0.1	9.0	鋼やかぶ取付を有する。2箇所の釘穴3箇所。鋼線1箇所取付。	
46	15-33	一括	鋼製品 鋼	(8.4)/(3.1)/0.1	8.5	折れ。3箇所の釘穴2箇所。鋼線4箇所取付。	
47	2-15-25-33	1号壁工建物用	鋼製品 鋼	(3.9)/1.9/0.1	2.7	鋼金。魚子打りと毛線りにより取付文を抽出。釘穴1箇所。	
48	2-15-25-33	1号壁工建物用	鋼製品 鋼	(4.7)/1.9/0.1	2.7	鋼金。魚子打りと毛線りにより取付文を抽出。釘穴2箇所。	
49	15-25-33	一括	鋼製品 鋼	(3.2)/1.9/0.1	1.4	鋼金。魚子打りと毛線りにより取付文を抽出。釘穴1箇所。	
50	15-25-33	一括	鋼製品 鋼	(3.0)/1.9/0.1	2.0	鋼金。魚子打りと毛線りにより取付文を抽出。釘穴1箇所。	
51	2-16-33	1号壁工建物用	鋼製品 鋼	(14.3)/(5.7)/0.1→0.35	161.4	別部欠損。鋼に本質残存(若干)。	分析29
52	16-33	1号壁工建物用	鋼製品 鋼	(29.3)/9.2/0.1→0.3	448.1	鋼に本質残存(若干)。	分析9
53	2-17-33	1号壁工建物用	鋼製品 鋼	1.2/0.2/0.2	0.4	鋼線鋼。6cm。	鋼線鋼内出し。
54	17-33	1号壁工建物用	鋼製品 釘	(4.0)/0.2/0.2	2.9	鋼線鋼。5cm。先端部欠損。	
55	2-17-33	1号壁工建物用	鋼製品 釘	(2.8)/0.3/0.25	1.8	鋼線鋼。2cm。基部先端部欠損。基部に本質残存。	
56	17-33	1号壁工建物用	鋼製品 釘	2.7/0.35/0.25	0.6	鋼線鋼。6cm。	
57	17-33	1号壁工建物用	鋼製品 釘	(3.4)/0.25/0.2	1.4	鋼線鋼。5cm。基部先端部欠損。	
58	17-33	1号壁工建物用	鋼製品 釘	(3.7)/0.3/0.3	1.6	鋼線鋼。5cm。	
59	17-33	土留部	鋼製品 釘	(3.9)/0.3/0.3	1.4	鋼線鋼。	
60	17-33	土留部	鋼製品 釘	4.0/0.3/0.6	3.6	鋼線鋼。5cm。	
61	17-33	1号壁工建物用	鋼製品 釘	(4.6)/0.5/0.35	2.5	鋼線鋼。1.0cm。基部先端部欠損。	
62	2-17-33	1号壁工建物用	鋼製品 釘	(2.1)/0.4/0.4	1.0	鋼線鋼。6cm。基部下平欠損。	
63	17-33	1号壁工建物用	鋼製品 釘	(2.9)/0.35/0.35	3.5	鋼線鋼。1.6cm。基部先端部欠損。	
64	17-33	一括	鋼製品 釘	(5.7)/0.35/0.35	3.9	鋼線鋼。5cm。基部先端部欠損。基部に本質残存。	
65	17-33	一括	鋼製品 釘	(6.1)/0.35/0.35	4.6	鋼線鋼。6cm。基部先端部欠損。基部に本質残存。	
66	17-33	一括	鋼製品 釘	(4.8)/0.4/0.4	3.1	鋼線鋼。基部先端部欠損。基部に本質残存。	
67	17-33	一括	鋼製品 釘	(6.8)/0.4/0.4	7.3	2本鋼線。鋼線・基部上平欠損。基部に本質残存。	
68	17-33	一括	鋼製品 釘	7.1/0.5/0.45	5.3	鋼線鋼。2cm。基部に本質残存。	

No	図面No	用途	種別	部材	仕様	質量(kg)	設置(㎡/型/型)	質量(kg)	特 徴 (初期平法等)	備 考
69	2-17-33	1号壁石建付物	鉄製品	釘	鉄板	4.2	(4.2)/0.4/0.3	6.2	厚さ約15mm、基部平下欠、基部に本貫付着。	
70	17-33	石壁	鉄製品	釘	鉄板	3.3	3.3/0.6/0.45	6.9	厚さ約12mm、基部中折れ、全長5.5m。	
71	17-33	一級	鉄製品	釘	鉄板	5.8	(5.8)/0.35/0.35	5.8	厚さ約13mm、基部中折れ+先端欠損。	
72	17-33	一級	鉄製品	釘	鉄板	4.7	(3.3)/0.35/0.45	4.7	厚さ約13mm、基部中折れ+先端欠損。	
72	2-17-33	1号壁石建付物	鉄製品	釘	鉄板	9.4	(3.3)/0.65/0.35	9.4	厚さ欠損。	
74	17-33	一級	鉄製品	釘	鉄板	4.9	(6.8)/0.5/0.5	4.9	厚さ欠損、基部に本貫付着。	
75	17-33	1号壁石建付物	鉄製品	釘	鉄板	12.5	(6.9)/0.45/0.4	12.5	厚さ欠損。	
76	17-33	土基礎	鉄製品	釘	鉄板	8.8	(4.9)/0.35/0.35	8.8	基部+基部平下欠。	
77	17-33	土基礎	鉄製品	釘	鉄板	7.4	(5.1)/0.35/0.65	7.4	基部+基部平下欠。	
78	17-33	2号壁石建付物	鉄製品	釘	鉄板	8.3	(3.3)/0.6/0.35	8.3	基部+基部先端欠損、基部中折れ。	
79	17-33	土基礎	鉄製品	鉄か	鉄か	16.5	(4.6)/1.7/0.5	16.5		

石製品観察表

No	図面No	用途	種別	部材	仕様	質量(kg)	設置(㎡/型/型)	質量(kg)	特 徴 (初期平法等)	備 考								
80	4-19-34	1号壁石建付物	石製品	壁石	上壁石	34.6	3	3.7	1.7	4.9	5.5	4.1	5.3	37.7	6分物9~11	3900.0	観察壁石突出部	突部、側面凹孔(長さ3×幅1.9×深さ3.6cm)。
81	4-19-34	1号壁石建付物	石製品	壁石	中石	12.2	—	2.3	4.4	—	—	—	—	38.2	6分物10~11	2790.0	観察壁石突出部	突部、下面に十字溝を設けている。溝幅(約)5.0mm、溝深11mm。
82	19-34	1号壁石建付物	石製品	壁石	下壁石	37.5	12.7	3.4	3.4	3.8	5.3	5.1	4.9	37.8	6分物9~11	2500.0	観察壁石突出部	突部、片べり。側面凹孔(長さ2×幅1.9×深さ3.6cm)。
83	19-34	1号壁石建付物	石製品	壁石	下壁石	37.6	13.2	—	—	2.5	4.9	—	—	36.4	6分物9~12	2450.0	観察壁石突出部	突部。

No	図面No	用途	種別	部材	仕様	高さ(a)	幅(b)	厚さ(c)	質量(kg)	設置(㎡)	質量(kg)	特 徴	備 考
84	20-35	2号壁石建付物	石製品	島	白	42.8	29.8	—	13.5	—	4690.9	観察壁石突出部	ほぼ突部、片べり、側面に一对の半円凹孔(長さ4×幅3.5×深さ3.6cm)。
85	20-35	2号壁石建付物	石製品	島	白	35.5	36.8	24.5	20.0	21.0	9500.0	観察壁石突出部	突部、突部加工で約3分の1の小円を穿削、正面を彫削、口縁部上面に設計線画、内面は彫削による突起あり。

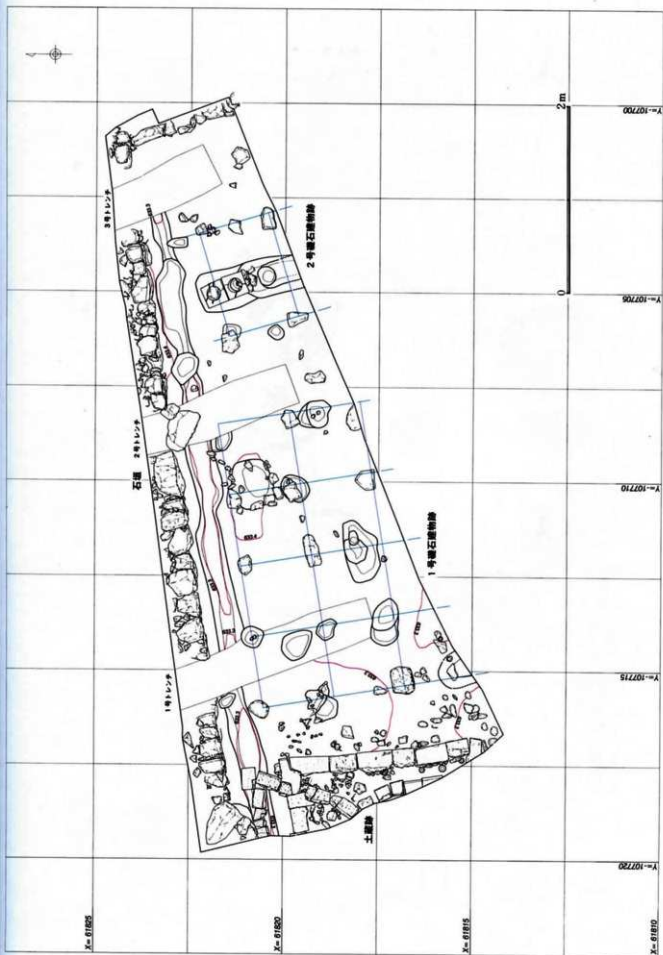
No	図面	用途	種別	部材	仕様	質量(kg)	設置(㎡)	質量(kg)	特 徴	備 考					
86	4-21-35	1号壁石建付物	石製品	壁石	固定石	61.2	54.3	57.9	46.0	33.9	34.8	14.4	6000.0	観察壁石突出部	突部、上面と下面凹孔(長さ10mm)に仕上げられている。側+下面両面彫削部(深さ約)あり、凹孔内面に十字溝+バーを付けている。
87	4-21-35	1号壁石建付物	石製品	壁石	固定石	60.3	54.0	56.4	52.5	32.4	33.9	13.2	6700.0	観察壁石突出部	突部、上面と下面凹孔(長さ10mm)に仕上げられている。側+下面両面彫削部(深さ約)あり、凹孔内面に十字溝+バーを付けている。

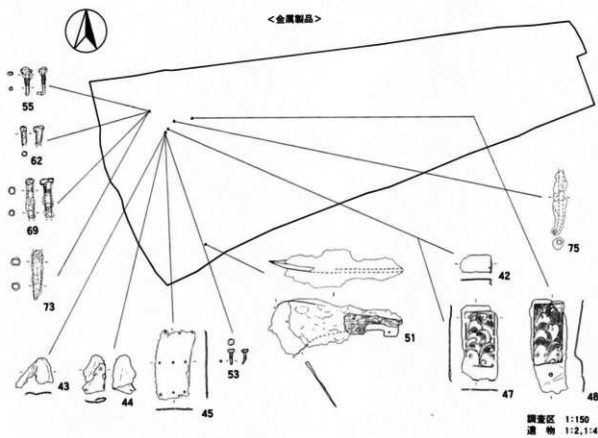
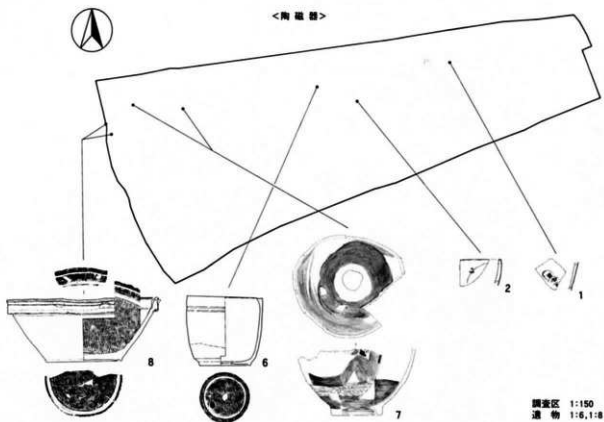
No	図面No	用途	種別	部材	仕様	長さ	幅	厚さ	質量(kg)	設置(㎡)	質量(kg)	特 徴	備 考
88	23-36	一級	石製品	基礎石	基礎石	30.6	17.1	12.4	9.5×5.9	6000.0	観察壁石突出部	突部、小回り仕上げ、土基礎と段と考えられる。取付あり。	

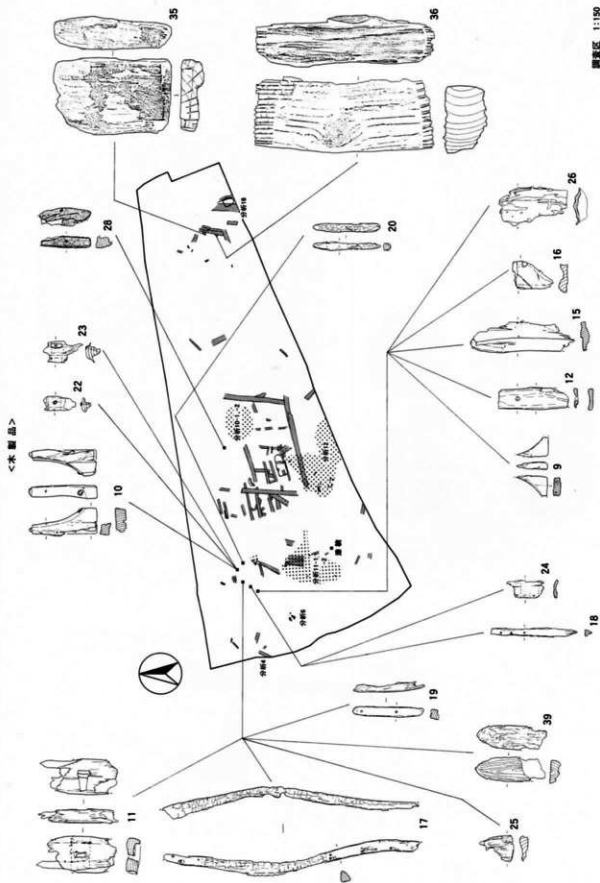
細工土器観察表

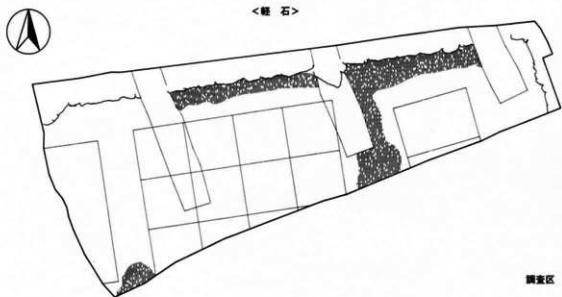
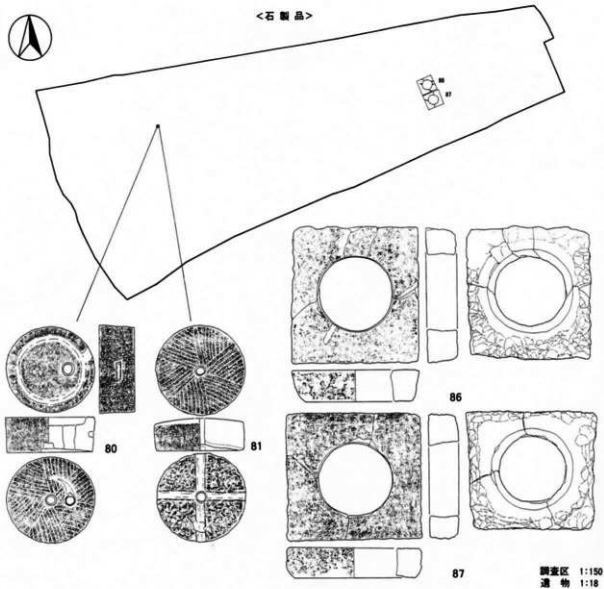
No	図面No	用途	種別	部材	仕様	長さ	幅	厚さ	質量(kg)	設置(㎡)	質量(kg)	特 徴	備 考
89	23-36	土基礎内下4	細工土器	厚鉄	厚鉄	(4.0)/—/—	—	—	—	—	—	外面は半圓状工具による筋付文、a-b字文、内面は縦筋付文。	
90	23-36	一級	細工土器	厚鉄	厚鉄	(2.3)/—/—	—	—	—	—	—	裏口縁、内外面とも縦筋付文。	

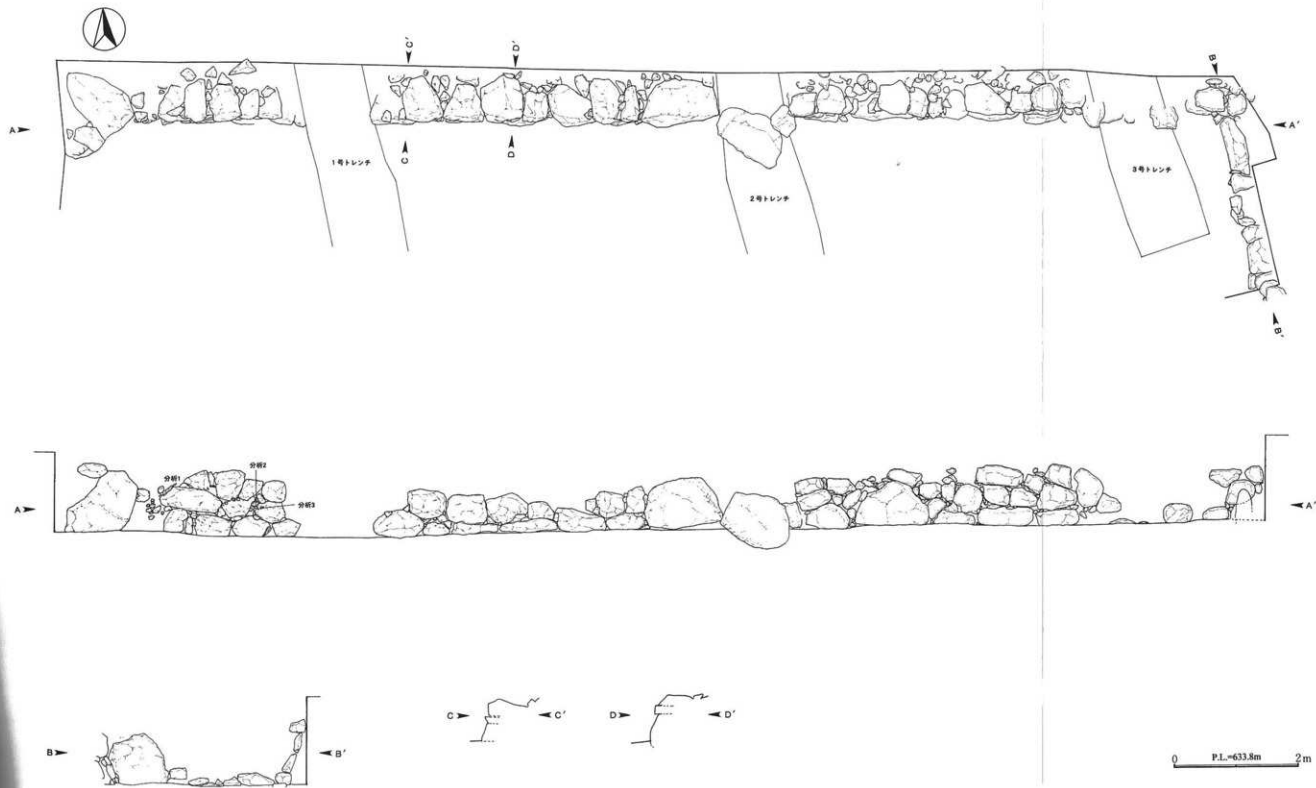
圖 版

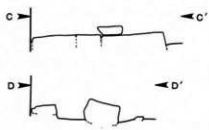
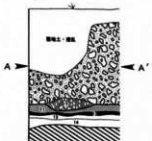
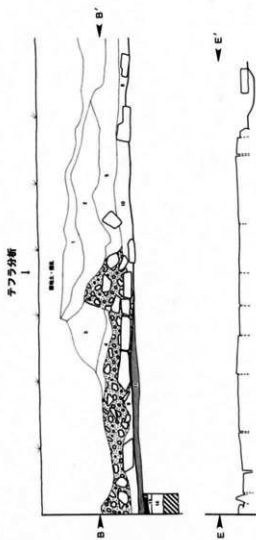
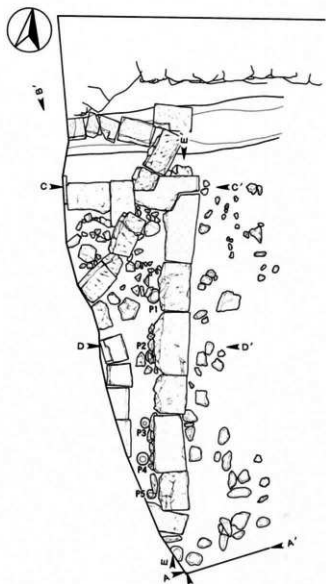






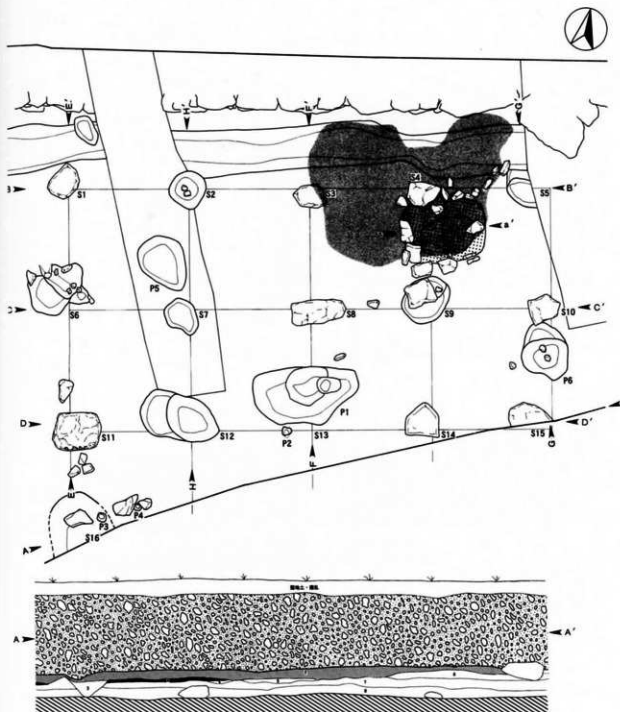






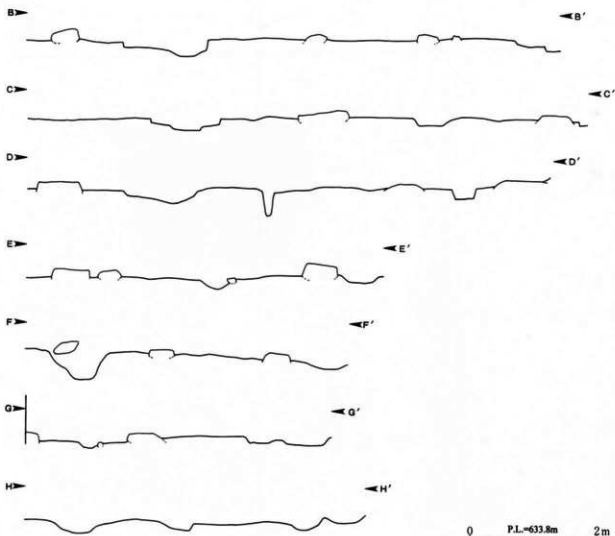
土蔵跡土層説明

- AA' 断面
1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を少量。φ=1cm大のロームブロック・焼石(以下洗関石)・φ5cm大の河原石を含む。
 2. 黄褐色土層：粘性なし。締まりややなし。全体の70%がローム粒から成る。φ=10cm大ロームブロック・洗関石・φ5cm大の河原石を少量含む。
 3. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・Aa・焼石・灰化材。φ=1cm大の小塊を含む。
 4. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を少量。灰化材・φ3~5cm大の河原石を含む。Aa・焼石を少量に含む。
 5. ロームブロック層：粘性なし。締まりあり。河原石を含み、やや黄色ブロックがある。(以上、礫石層・土層の礫石層)
 6. 暗褐色砂質土層：粘性なし。締まりあり。φ=25cm大の河原石・洗関石を少量に含む。(いわゆる洗関層)
 7. 礫石層：粘性・締まり共になし。いわゆるAa・焼石の礫層。
 8. 明褐色土層：粘性ややあり。締まりややなし。ローム粒・木材片を含む。
 9. 黄褐色土層：粘性ややあり。締まりややなし。Aa・焼石・木材片を含む。
 10. 暗褐色土層：粘性ややあり。締まりあり。そのほとんどがφ10~15cm大の角礫からなる。(基礎礫石設置の地盤)
 11. 暗褐色土層：粘性ややあり。締まりあり。地山の露土で強く叩き締められている。上面に泥炭の鉄分沈着が顕著で角礫を多く含む。(建物基礎面)
 12. 赤色土層：粘性・締まり共にややあり。炭入物なし。(建物基礎面の露土)
 13. 暗褐色土層：粘性・締まり共にあり。ほとんど炭入物なし。
 14. 明褐色土層：粘性・締まり共にあり。ローム粒・φ=1cm大ロームブロックを含む。

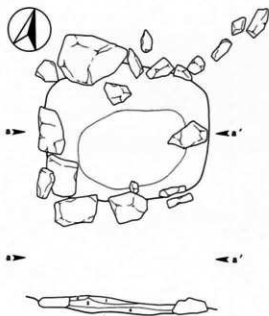


1号礎石建物跡土層説明

- A A'
1. 暗褐色砂質土層：粘性なし、締まりあり、φ~20cmの河原石・流石を多量に含む、(1)物碎る混濁層
 2. 暗褐色土層：粘性ややあり、締まりあり、地山の盛土で強く叩き締められている。上面に高低の起伏が顕著で内層を多く含む。(建物構築層)
 3. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・φ~1cm程度のロームブロックを少量含む。
 4. 褐色土層：粘性・締まり共にややあり、混入物なし。(建物構築前の鉄土)
 5. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり、間に4層を挟む。
 6. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・内層を含む。2層と7層の混濁。
 7. 暗褐色土層：粘性・締まり共にあり、ほとんど混入物なし。
 8. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・φ~1cm程度のロームブロックを含む。



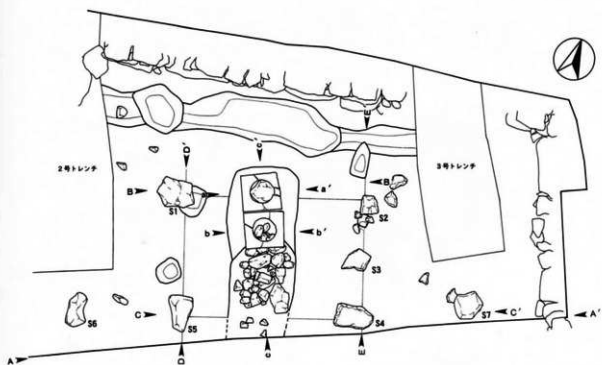
0 P.L.=633.8m 2m



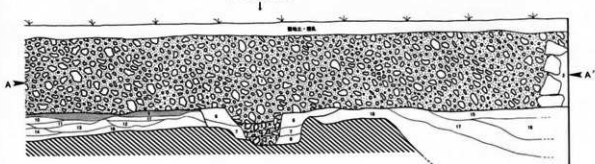
●●' (部伊圖)

1. 瓦 層：粘土なし。締まりあり。炭化粒を含む。
2. 暗褐色土層：粘土なし。締まりあり。ローム粒を多量。炭化材・炭化粒を含む。
3. 暗褐色土層：粘土なし。締まりあり。ほとんど炭化物なし。
4. 暗褐色土層：粘土なし。締まりあり。(伊石製煉炭)

0 P.L.=633.8m 1m



トイレ遺構分析

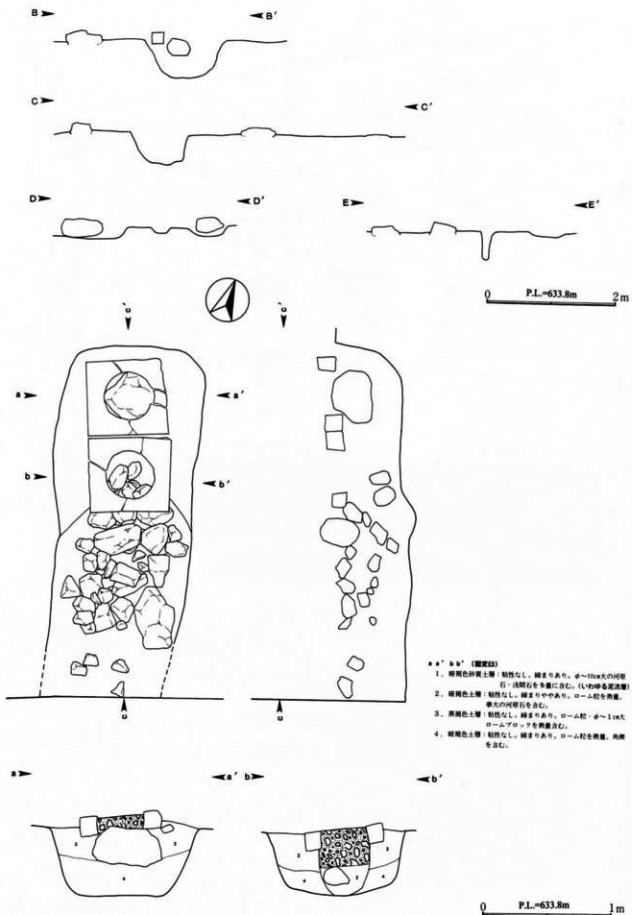


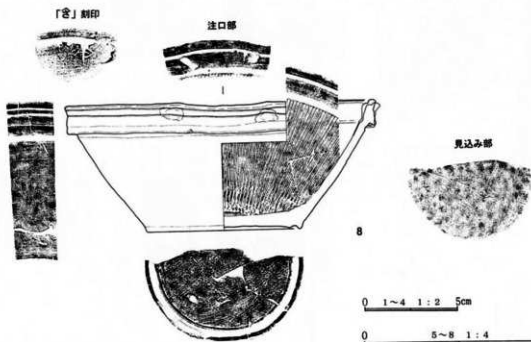
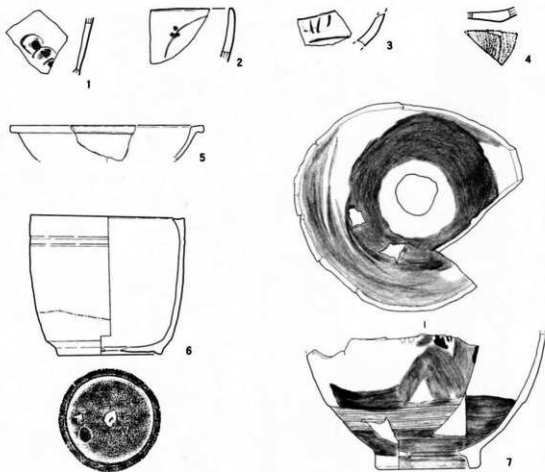
2号礎石建物跡土層説明

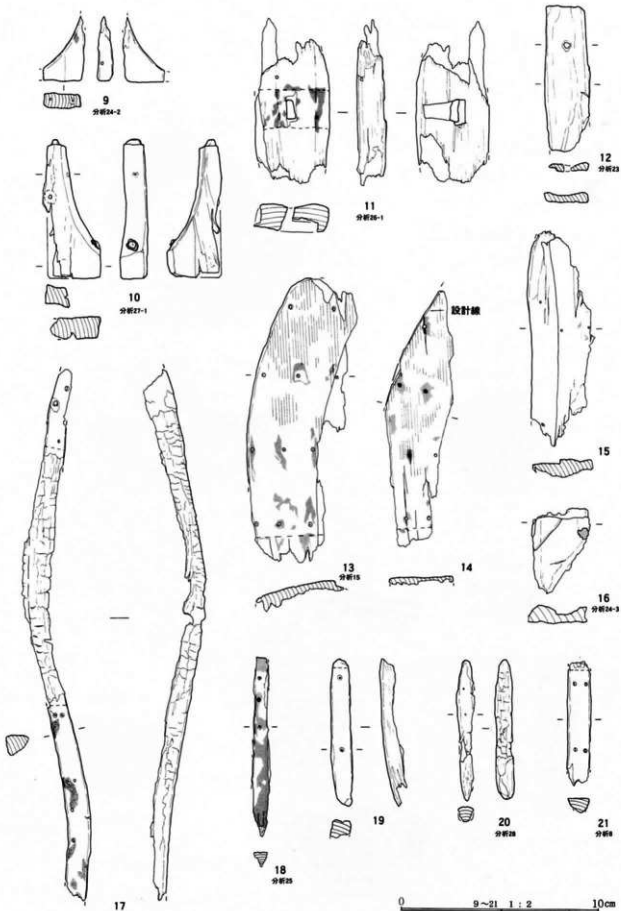
AA'

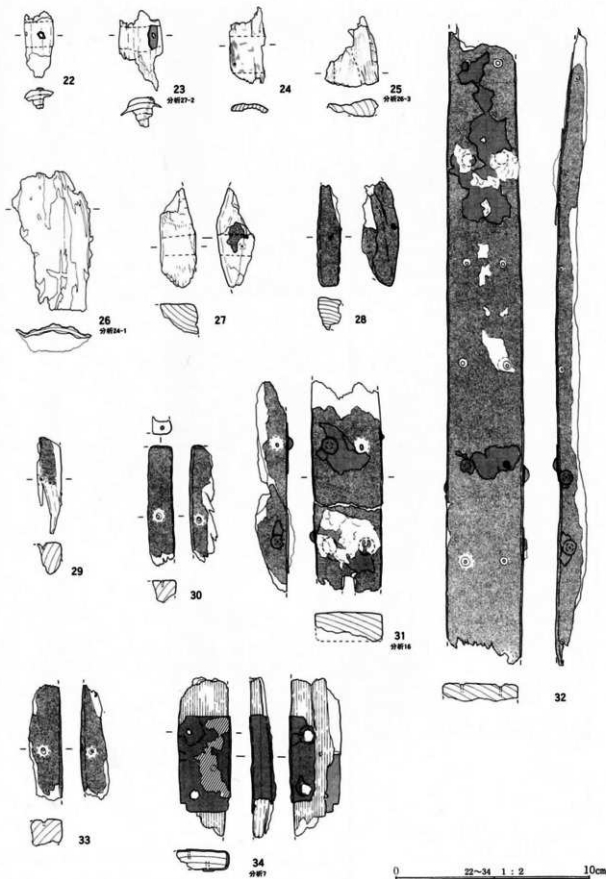
1. 暗褐色砂質土層：粘性なし。締まりあり。φ~20cm大の河原石・浅間石を多量に含む。(いわゆる泥流層)
2. 暗褐色土層：粘性・締まり共に中であり。ローム粒を少量。角礫を多量に含む。(石礫の集込み)
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まり中や中なり。ローム粒を少量。多大の河原石を含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし。締まり中なり。ローム粒を少量。多大の河原石を含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし。締まり中なり。ローム粒・多大の河原石を含む。(以上、鑑定目録層土統内埋土。泥流か)
6. 黒褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・φ~1cm大ロームブロックを少量含む。
7. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を少量。角礫を含む。
8. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・φ~3cm大ロームブロックが水平に入る。(以上、鑑定目録層土統層リワ)
9. 暗褐色土層：粘性中や中なり。締まりあり。地山の腐土で強く叩き締められている。上面に泥流の鉄分沈着が顕著で角礫を多く含む。(建物構築層)
10. 黒褐色土層：粘性なし。締まり中や中なり。ローム粒・φ~1cm大ロームブロックを含む。
11. 暗褐色土層：粘性・締まり共に中なり。ほとんど泥流入物なし。
12. 暗褐色土層：粘性なし。締まり中や中なり。ローム粒・φ~1cm大ロームブロックを多量に含む。
13. 黒褐色土層：粘性・締まり共にあり。ほとんど泥流入物なし。
14. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・φ~1cm大ロームブロックを多量に含む。
15. 黒褐色土層：粘性・締まり共に中や中なり。ローム粒・φ~1cm大ロームブロックを含む。上面に泥流の鉄分沈着が顕著。(以下建物構築以前の沈積)
16. 暗褐色土層：粘性・締まり共にあり。ローム粒を含む。
17. 黒褐色土層：粘性・締まり共に中や中なり。ローム粒を含む。
18. 暗褐色土層：粘性・締まり共に中や中なり。ローム粒・φ~1cm大ロームブロックを含む。

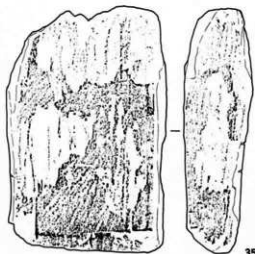
0 P.L.=633.8m 2m



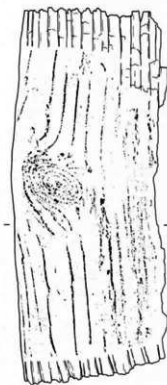




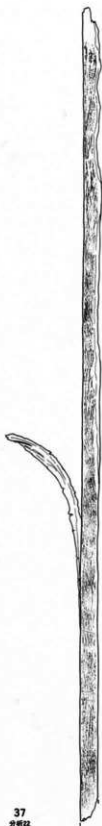
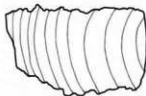




35
分前19



36
分前20



37
分前22

0 35・36 1 : 2 10cm

0 37 1 : 4 20cm



38
分断21



39
分断26-2



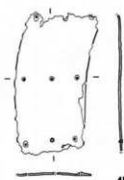
40
分断14



41



42



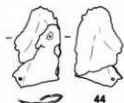
45



46



43



44



47



48



49

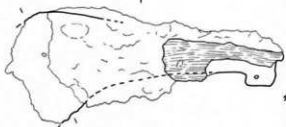


50

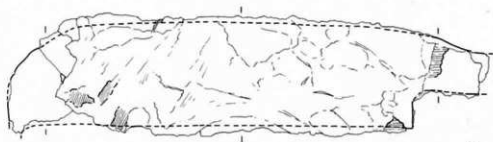
0 47~50 1 : 1 2cm

0 39~46 1 : 2 10cm

0 38 1 : 2 20cm



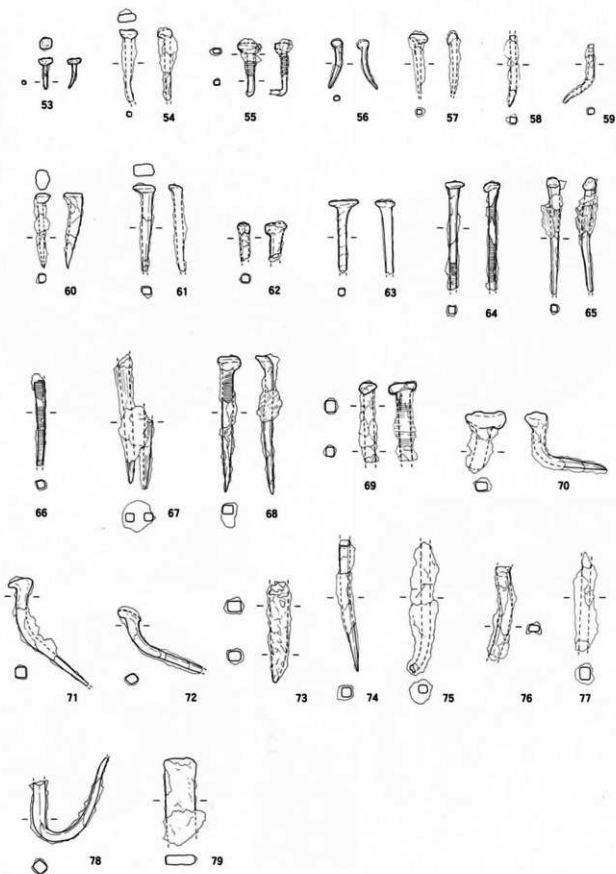
51
分断図



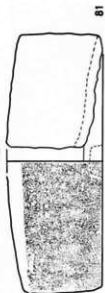
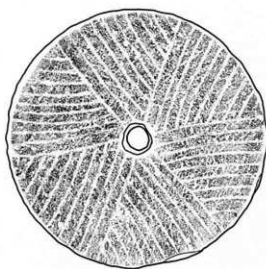
52
分断図



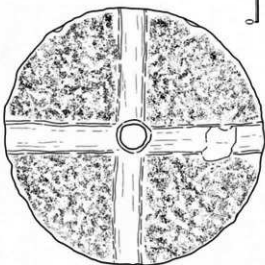
0 51・52 1:2 10cm



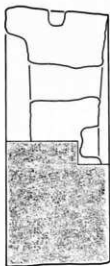
0 100・81 1 : 6 20cm



81

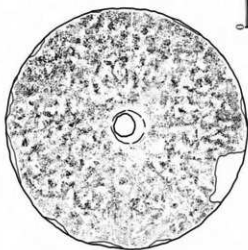


80

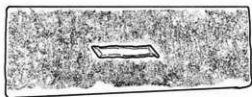




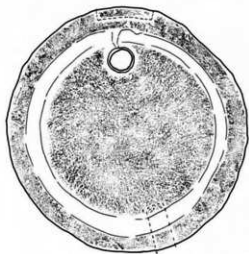
83

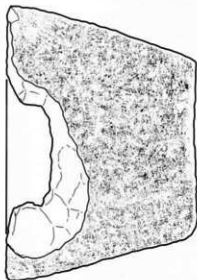
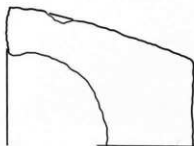
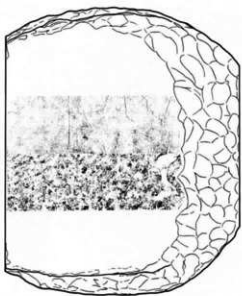
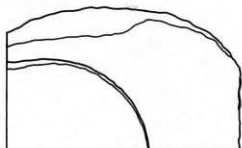
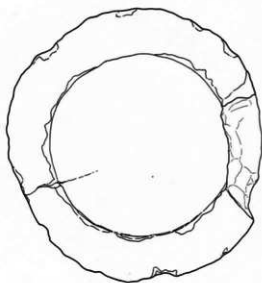
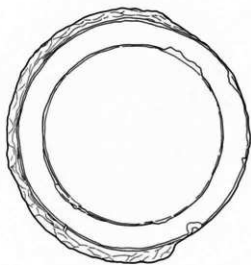


0 82・83 1:6 20cm



82

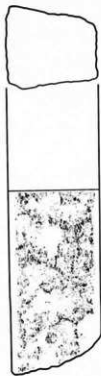
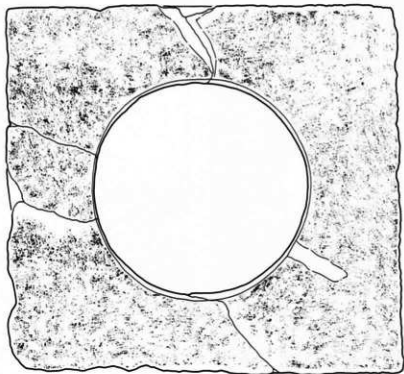
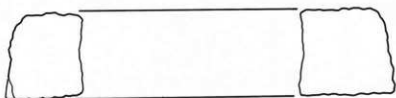
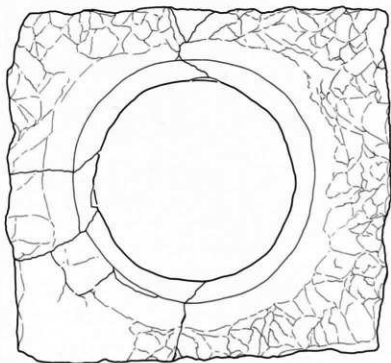




85

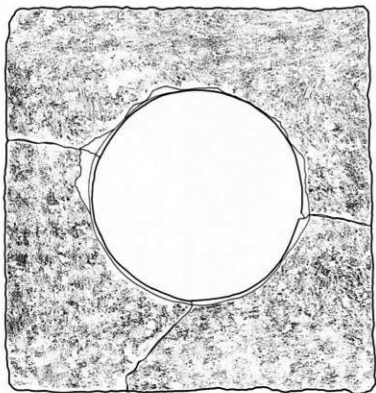
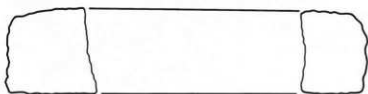
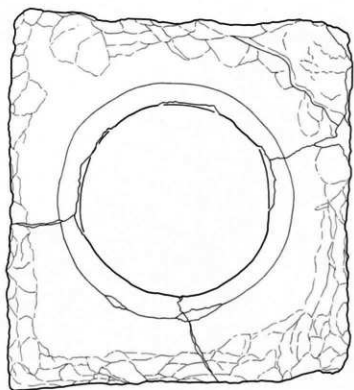
84

0 84・85 1:6 20cm



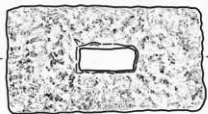
86

0 86 1.6 20mm

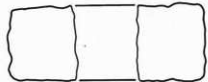


87

0 1:6 20cm



88



89



90

0 89~90 1:2 5cm

0 88 1:6 20cm



石垣北壁西側



石垣北壁東側～東壁



土蔵跡



1号礎石建物跡



2号礎石建物跡



遺物出土状況①（飾り金具・木製品）



遺物出土状況②（瀬戸・美濃陶器）



遺物出土状況③（肥前陶器）



遺物出土状況④（拵摺鉢）



遺物出土状況⑤（漆碗）



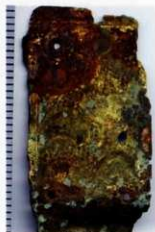
漆碗接写



石壇付着木材片



遺物 No47



遺物 No48



遺物 No49



遺物 No50



織紐貫付着（遺物 No34）



調査区全景 (西より)



調査区近景1 (東より)



調査区近景2 (北東より)



石垣北壁西側



石垣北壁東側



石垣北東コーナー



石垣東壁



土蔵跡検出状況1 (北東より)



土蔵跡検出状況2 (東より)



土蔵跡検出状況3 (南より)



上段基礎検出状況



西壁セクション



下段基礎設置状況1 (北東コーナー)



下段基礎設置状況2 (南東コーナー)



1号礎石建物跡検出状況1 (南より)



1号礎石建物跡検出状況2 (北より)



建築部材痕検出状況 (北より)



囲炉裏検出状況 (南より)



礎石下基礎地溝か (床持柱?)



矢穴のある礎石



遺物出土状況① (飾り金具・木製品)



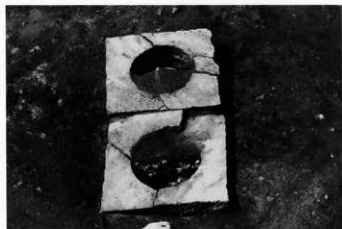
遺物出土状況② (飾り金具・木製品)



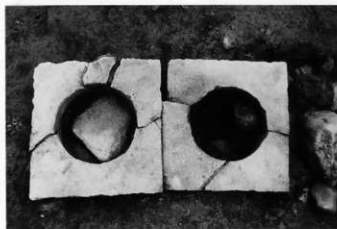
2号礎石建物跡検出状況1(北より)



2号礎石建物跡検出状況1(南より)



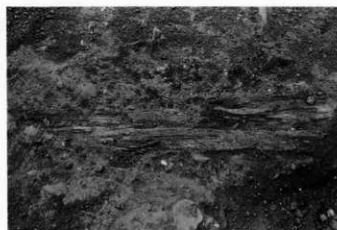
固定白内埋土半截状況(南より)



固定白設置状況(西より)



遺物出土状況①(部材)



遺物出土状況②(部材)



土蔵基礎復原風景



土蔵下段基礎復原(北より)



土蔵上下段基礎復原① (南より)



土蔵上下段基礎復原② (北より)



土蔵上下段基礎復原③ (東より)



土蔵埋め戻し状況



測量風景

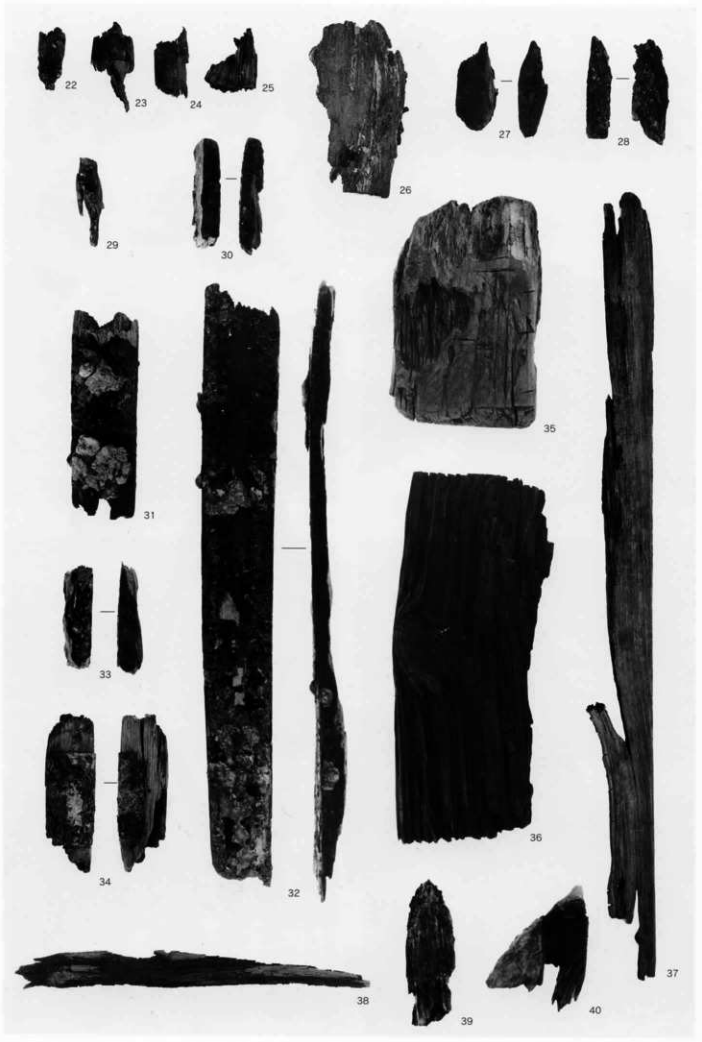


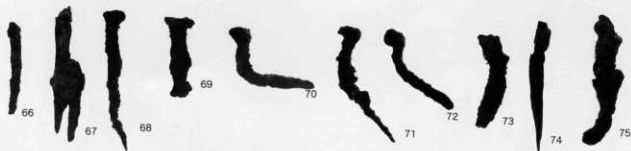
サンプリング風景



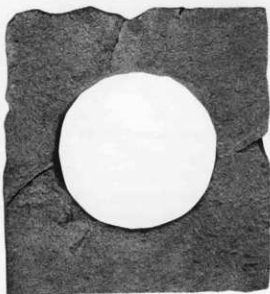
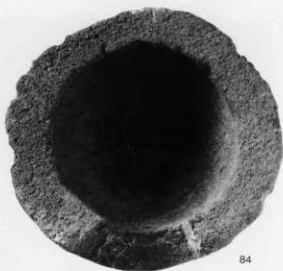
調査風景













86



88



89



90

報告書抄録

ふりがな	こばやしけやしきあと							
書名	小林家屋敷跡							
副書名	—長野原町立中央小学校屋内体育館・プール建設に伴う発掘調査報告書—							
巻次								
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第12集							
編著者名	富田孝彦							
編集機関	長野原町教育委員会							
所在地	〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174 TEL 0279-82-4517							
発行年月日	西暦2005年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	フリガナ 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
こばやしけやしきあと 小林家屋敷跡	オガノハラマツキアサガオノハラマツ 長野原町大字長野原字 ツボイ 坪井コ1489、1490	10424	211	36°33'05"	138°37'51"	020401～ 020424	110㎡	町立中央小 学校屋内体 育館・プー ル建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
小林家屋敷跡	屋敷	近世	石垣 1基 土蔵跡 1棟 礎石建物跡 2棟	陶磁器、木製品、金属製品、 石製品など		天明泥流に埋没した吾妻の分 限者小林助右衛門屋敷の一部 を検出		

小林家屋敷跡

—長野原町立中央小学校屋内体育館・プール建設に伴う発掘調査報告書—

平成17年3月29日 印刷

平成17年3月31日 発行

発行 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174

TEL 0279 (82) 4517 FAX 0279 (82) 4519

印刷 朝日印刷工業株式会社

